

## 第2章 多様な障害を念頭においた試行

### ・・・作業課題の再構成とセルフマネジメント訓練・・・

この章では、地域障害者職業センターにおける職業準備訓練にセルフマネジメント・トレーニング・マトリックスに基づく指導方法の実施の試みと、それらの指導結果と帰趨状況の関係からセルフマネジメント訓練の効果等について考察する。

#### 第1節 セルフマネジメント訓練実施のための環境整備

障害者職業センターの協力を得て、障害者職業センターで実施している職業準備訓練の一部にセルフマネジメント訓練を実施した。セルフマネジメント訓練の実施に際しては、①支援者研修、②作業課題の特定と分析及び再構成を準備として行った。

##### 1. セルフマネジメント訓練実施のための支援者研修

各センターの職業準備訓練にセルフマネジメント訓練を実施するにあたって、担当カウンセラーと職業準備訓練指導員に対し、応用行動分析学に基づく行動の基礎や不適応行動に関する基本的な考え方、セルフマネジメント訓練の基本的な実施方法等について研修を行った。

支援者研修は、表Ⅱ-2-1の内容についての1～2時間程度の講義を行い、不明点等について質疑を受けた。研修で用いた資料例を資料1に示した。

表Ⅱ-2-1. 支援者研修の項目と内容

No	研修項目	内容
1	行動の基礎	行動の考え方、三項強化随伴性、ABC分析等
2	セルフマネジメント訓練	言行一致訓練、セルフモニタリング、タイムトライアル、セルフマネジメント等
3	セルフマネジメントトレーニングマトリックス	セルフマネジメントトレーニングマトリックスの概要、段階的視点等
4	不適応行動の考え方	不適応行動についての考え方、課題への対応方法等
5	その他	研修内容についての質疑、事例に対する質疑等

##### 2. セルフマネジメント訓練に先立つ作業課題の課題分析と再構成

###### (1) 障害者職業センターの作業課題

職業準備訓練担当カウンセラーとの協議の結果、G障害者職業センターでは訓練期間中に行っている作業のうち、納期等に左右されない安定的に実施できる「コネクタ作業」と、比較的長期間にわたって作業を行う「タオル作業」の2作業について、セルフマネジメント訓練を実施することとした。実施に際して、これらの作業についての課題分析を行い、セルフマネジメント訓練を実施しやすい手順等について検討を行った。

それぞれの作業は、表Ⅱ-2-2のような下位作業から構成されていた。

表Ⅱ－２－２． G障害者職業センターの作業課題

作業分類	下位作業名	作業内容
コネクタ作業	コネクタ組立作業	水道用コネクタを組み立てる作業
	コネクタ分解作業	水道用コネクタを分解する作業
タオル作業	タオルたたみ作業	定められた折り方でタオルをたたむ作業
	タオルのし紙作業	たたまれたタオルにのし紙を巻き付ける作業
	タオル袋入れ作業	のし紙付きタオルを小袋に入れる作業

(2) コネクタ作業の課題分析

コネクタ作業の工程を表Ⅱ－２－３に示した。この作業はセンター自前の作業であり、訓練の初期と後期に数日ずつ実施していた。作業は作業準備から組立あるいは分解作業まで一定個数単位で（6個）独力で行えるよう指導していた。セルフマネジメント訓練の実施に際しては、作業の基本数や作業手順は変更せず、セルフモニタリング訓練では、作業1個ずつ自分の作業結果を確認する手続き（モニタリングシートへの記入）を、タイムトライアル訓練では、一定の作業時間内（ex. 15分、30分等）での作業量を目標として設定する手続きを付加し実施した。

表Ⅱ－２－３． コネクタ組立作業の作業工程

①	* 作業準備段階
1	コネクタ本体の入ったフルケースを1ヶ、2人1組で作業台中央へ運ぶ。
2	部品を入れるボックス類を用意する イエローボックス1ヶ、グリーンボックス大1ヶ、グリーンボックス小1、
3	所定の位置に並べる イエローボックス、グリーンボックス大、グリーンボックス小
4	グリーンボックス大の仕切りをはずす
②	* 部品を6ヶ入れてくる
5	グリーンボックス大小を持って部品を入れに行く
6	決められた場所に決められた部品を6ヶ入れる グリーンボックス大 袋ナット、キャップ、コネクタナット グリーンボックス小 ストップリング
③	* 2ヶ組み立てる
7	右手でコネクタ本体をとり、組み立てる。 ストップリング→袋ナット→キャップ→コネクタキャップ
8	ゆるみ等ないか？不良品でないか？

(3) タオル作業の課題分析

タオル作業の工程を表Ⅱ－２－４に示した。タオル作業は受注作業であり、一定の納期があるものの、作業量は多く、多少種類の異なるタオルであってもほぼ同一の工程で実施することができる作業であった。

表Ⅱ－２－４．タオル作業の作業手順

No	タオルたたみ作業の手順	タオルのし紙作業の手順	タオル袋入れ作業の手順
1	タオルを1袋作業台左側におく。	のし紙とセロテープを用意しイエローコンテナを台にしのし紙付けをする。	小袋を1束用意する。(小袋の帯ははずさない。)
2	袋口をあける時、袋を破らない。	のし紙を1枚裏にし台に乗せ真ん中にタオルを置く。	袋を1枚台の上にと、袋の口をあける。
3	袋から1束取り出し、裏を上にして広げ社名が手前にくるよう袋の上に置く。	セロテープを1.5～2cmに切る。	タオルを1枚とり、粗品と書いていると書いてある部分に手を当て、裏に親指を当てるように持つ。
4	1枚タオルの端を持ち少し引っ張って、中裏にして二つ折りにし、タオルの端を手前にして台におく。	のし紙を両手で寄せ真ん中にテープを縦にはる。	タオルの裾部分から袋に入れ、のし紙を押しえたまま袋の底まで入れてから、手を離す。
5	輪になっている部分を両手で押さえ、押さええているところを持って、さらに二つ折りにする。	のし紙の表を上にして右はしにおく。	袋口のしわをきれいにのばし両手で袋口をもって持ち上げ裏向きに置く。
6	輪になっている部分を両手で押さえ、時計回りに45度回して縦にする。	「終わりました」と報告する。	上から押さえて袋から空気を抜く
7	3つに折って多目に折ったところが1.5～2cm折れ曲がるよう、手前をもって三つ折りにする(*最初の折れは少し長めで)。		袋口をそろえて持ち折り曲げて片手で押さえる。
8	輪の部分が左になるように置く。		もう片方の手でテープを5cmに切り袋口に横向きにまっすぐにテープを貼る。
9	「終わりました」と報告する。		表向きにして左端に置く。
10			3枚ずつ重ねる。
11			「終わりました」と報告する。

この作業は、6枚を一単位として「たたみ→のし紙→袋入れ」の全ての下位工程を実施可能な者の場合は連続して行わせ、訓練生の状況によって個々の下位工程を個別に指導していた。

セルフマネジメント訓練の実施に当たって、すべての下位工程に作業上のポイントが見られたため、それぞれのポイントを明確化した上で、全ての工程でセルフモニタリング訓練を実施することが適当と考えた。

また、タイムトライアル訓練については、基本的には各下位工程についてそれぞれ実施することとした。この訓練では、単位作業量を段階的に設定し(ex.6→12→24→60)、単位作業量の実施に要する作業時間と不良数を従属変数とした。さらに、対象者は作業に要する時間を目標として設定し、この目標の達成に向けて安定的に作業することが求められた。

## 第2節 セルフマネージメント訓練の試行と実施結果

### 1. 対象者

G 障害者職業センターでは、職業準備訓練を受講した者のうち、16名をセルフマネージメント訓練の対象とした。対象者16名の障害状況等について、表Ⅱ-2-5に示した。

セルフマネージメント訓練は、訓練実施期間中に全期間を通して実施した。また、16名中1名については、「数概念形成訓練」を条件性弁別訓練を応用して実施した。

対象者は知的障害者11名、精神障害者3名、身体障害者1名であった。また、精神障害者2名および身体障害者1名については高次脳機能障害を、知的障害者のうち3名は、それぞれ言語障害、寡黙、自閉症の重複障害を有していた。

表Ⅱ-2-5. Gセンターでの対象者一覧

No	名前	性別	障害	重複障害
1	b-1	女	知的障害 B1	言語 4 級
2	b-2	男	知的障害 B2	手指機能 6 級
3	b-3	男	知的障害 B2	
4	b-4	女	知的障害 B1	
5	b-5	男	知的障害 B2	
6	b-6	男	精神障害 2 級	
7	b-7	女	知的障害 B1	
8	b-8	男	精神障害 3 級	脳障害
9	b-9	男	知的障害 B1	寡黙
10	b-10	女	知的障害 B1	
11	b-11	男	両下肢 4 級	脳障害
12	b-12	男	精神障害 2 級	脳障害
13	b-13	女	知的障害 A2	
14	b-14	女	知的障害 B2	
15	b-15	男	知的障害 B2	自閉症

### 2. 方法

先に課題分析を行ったコネクタ作業とタオル作業について、訓練カリキュラムに沿ってセルフマネージメント訓練を実施した。作業は職業準備訓練室で小集団で実施した。セルフマネージメント訓練の実施に際しては、自分で作業結果の確認をすることや、目標を持って作業に取り組むことの重要性について、対象者に説明した。

作業の実施方法は、先の課題分析に基づき、第2章で述べたセルフモニタリング訓練やタイムトライ

アル訓練の実施方法を組み入れて行った。各訓練段階で、対象者毎に進捗状況が異なった場合にも、個々の状況に合わせた段階的な指導を行った。

作業結果は、セルフモニタリング訓練については製品の正誤を、タイムトライアル訓練においては、目標（量 or 時間）と作業結果（量 or 時間）、製品の正誤を記録した。

### 3. 結果

結果は、作業における結果をグラフ化すると共に、職業準備訓練期間中の状況及び訓練後の状況等について個々の対象者毎にまとめた。

① b-1

知的障害のある、19歳の女性。父親が日本人、母親はオーストラリア人である。幼児期に脳炎にかかり、発話が不明瞭になる。日本国内のリハビリではこれ以上改善しないと言われたが、諦めきれずに母親の実家であるオーストラリアにてリハビリを受けることとなり、一定レベルまで身体機能面での回復を図ることができた。服飾専門学校に3年間通学し、併設する高校を卒業する。その後、公共職業安定所にて相談を開始し、職業評価を受けるためGセンターに来所した。職業評価担当カウンセラーと相談をし、療育手帳の取得と職業準備訓練の受講を勧められ、受講に至る。

性格的には、素直であり、発話の聞き取りにくさを聞き返されてもイヤな顔をせず言い直す事ができたが、精神的には幼さが目立っていた。

作業面では、一定の指示理解力は有するものの、就労経験がなく、職業準備性の向上と作業スピードの向上等が課題であった、

始めに、コネクタ組立作業を行った。組立作業におけるセルフモニタリング作業では、モニタリング数を6ヶに増やした段階で不良品数が半数程度見られたが、ごく簡単な作業であること、本人の正確さへの意識も見られたことから、タイムトライアル訓練へ移行した。

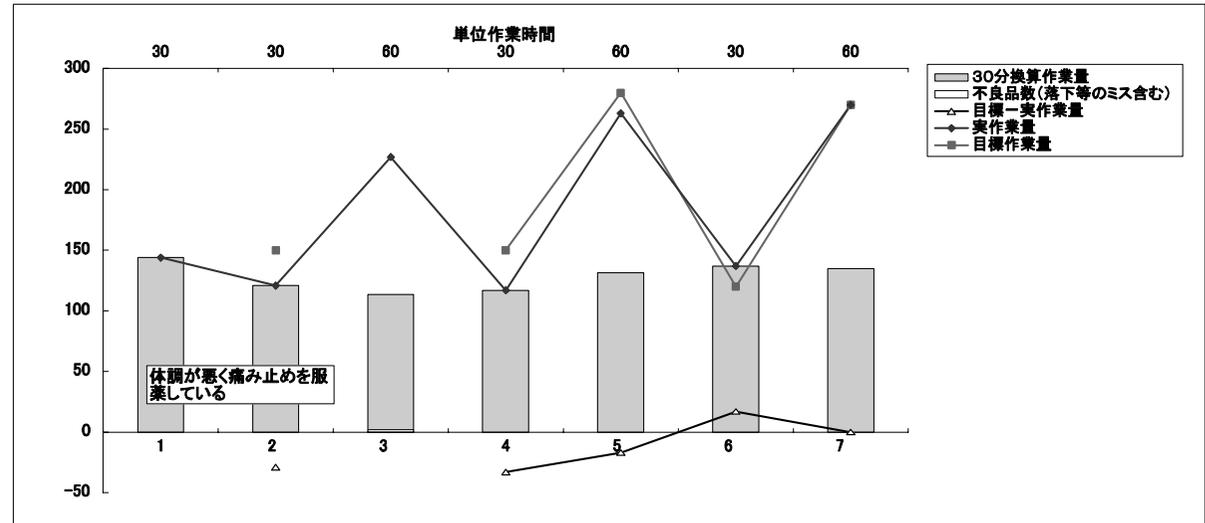
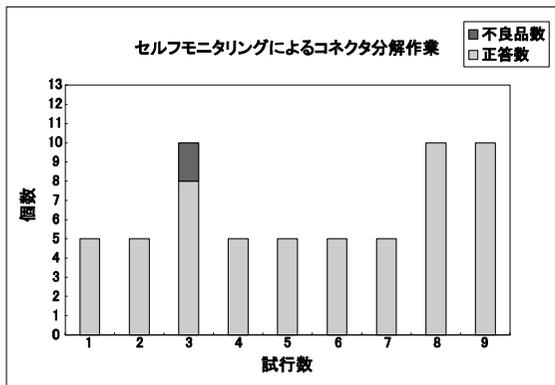
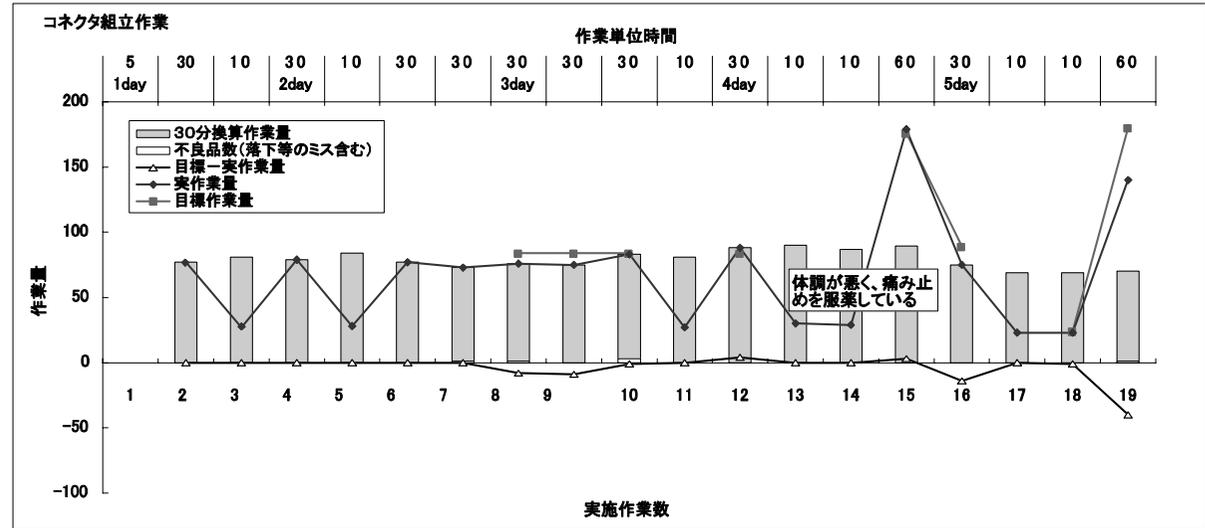
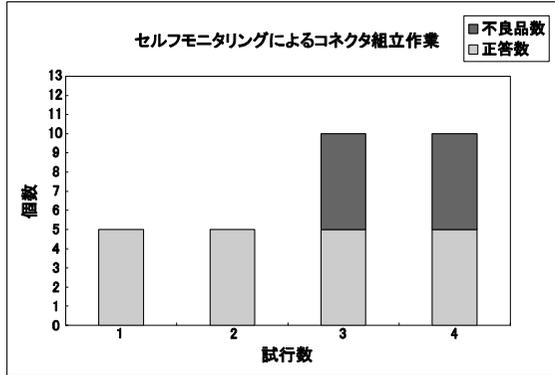
タイムトライアル訓練では、不良品の発生数は少ないものの、目標を設定したり指導員が作業工夫を促したが、なかなか作業スピードは向上しなかった。そのため、作業能率の向上には限界があると判断し、安定して一貫したスピードで作業するよう指導を転換した。その後、本人なりに、なかなか作業スピードが向上しないことに葛藤はあったようだが、精神的に不安定になることなく、作業に取り組んでいた。

タオル作業を実施する頃には、他の訓練生と親しくなり、他の男子訓練生に何か言われたら足でけっ飛ばすといったやや粗暴な行動が出始めたものの、作業そのものは、体調不良時に作業時間の大きな低下が見られた以外は、概ね安定しており、指導員の声かけ等がなくても主体的に取り組むことができた。

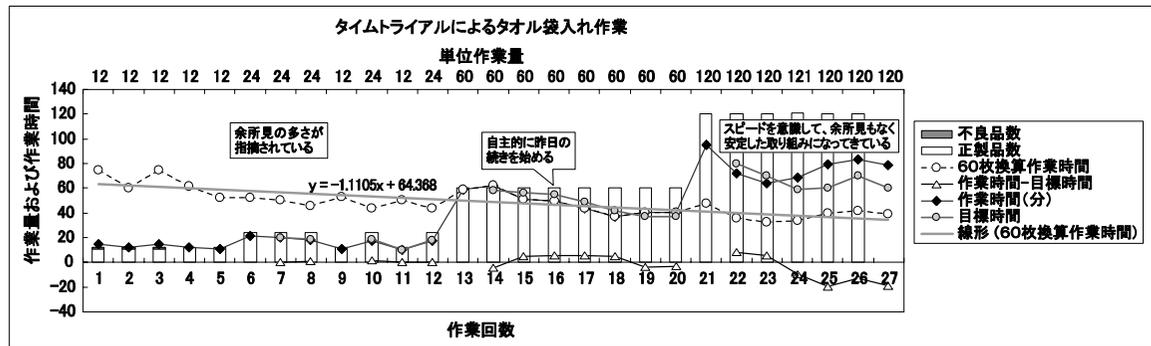
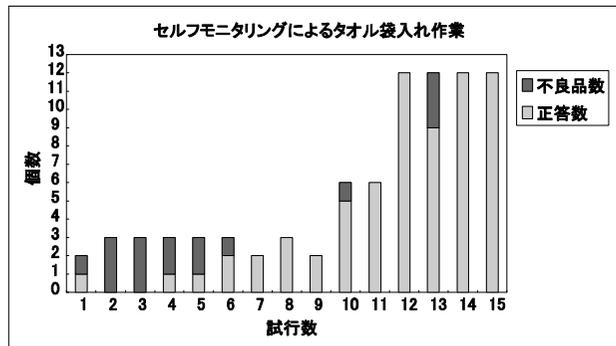
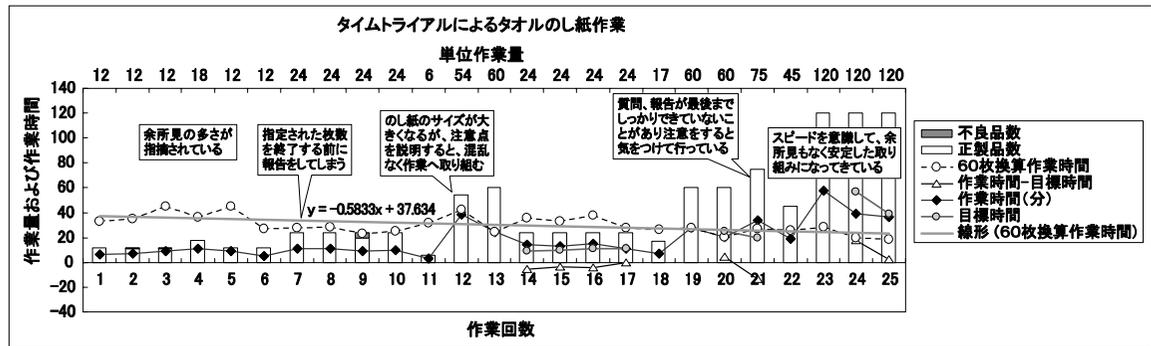
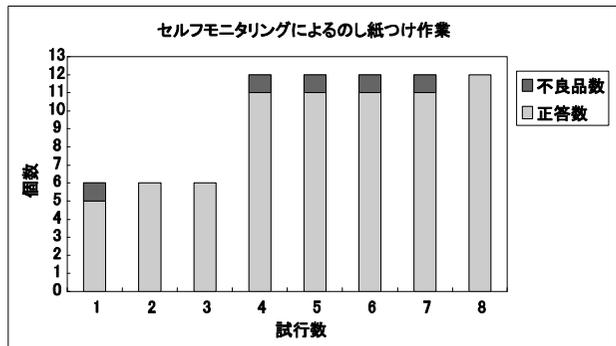
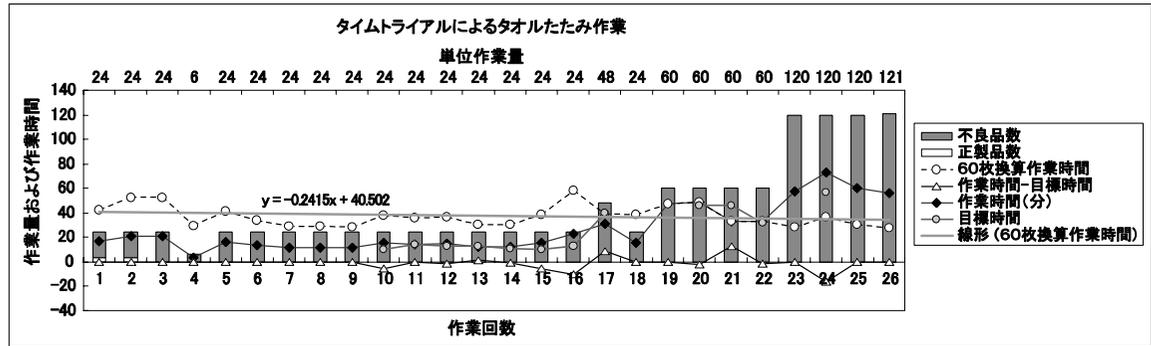
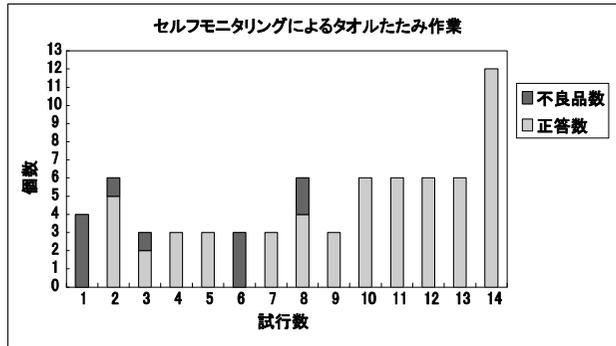
このようなセルフマネジメントトレーニングによる効果は、他の作業でも持続した。

職業準備訓練直後に、公共職業安定所の紹介でリネン関係の会社に就職した。この事業所は、障害者の多数雇用事業所を目指しており、知的障害者の採用を積極的にすすめ始めたところであった。事業所でも、作業スピードは遅いものの、注意を受けなくても安定して作業に取り組むことができおり、また欠勤もなく、他の知的障害者と仲良くしながら、本人も楽しく働いている。職場適応状況は良好である。

図Ⅱ-2-1. b-1さんのコネクタ組立・分解作業の作業状況



図Ⅱ-2-2. b-1さんのタオルたたみ・袋入れ・のし紙つけ作業の作業状況



② b-2

23歳の男性、身体障害6級（左上肢の拇指機能の著しい障害）、知的障害B2である。小中学校特殊学級卒業後、プレス関係の事業所に就職し約1年働くが、機械に左手指を挟み半年間入院する。職場復帰するが、居づらくなり、自己退職している。半年後、高等技能専門学校にて1年間訓練を受け卒業し、数社の事業所に就職するが、作業中に指が痛くなった等により短期間での離転職を繰り返す。また、この頃、身体障害者手帳・療育手帳を取得する。

手帳取得後、障害者職業能力開発校に入校し卒業後、就職するが、会社の要求水準が高く離職した。その後、再度公共職業安定所のすすめで、当センター職業準備訓練受講をすすめられ、職業準備訓練を受講することとなった。これまでの経過の中で、短期間で離転職を繰り返すようになっていたことから、8週間しっかりとやりとげ自信をつけることと、作業耐性を身につけること、また個別相談を通し適職の選定を行っていくことを指導目標とした。

職業準備訓練開始後、作業面では、コネクタ作業におけるセルフモニタリング訓練は順調にこなすが、タイムトライアル訓練にはいると勝手に作業方法を変更したり、注意を受けると謝罪することなく言い訳ばかりすることが問題となった。そのため、タイムトライアル訓練では、作業方法を安定させること、指導員への相談・報告を徹底すること、自発的に謝罪すること等を指導項目とし、計画的な指導を行った。

タオル作業のセルフモニタリング訓練では、タオルたたみ作業で当初、不良品が常に発生し、指の機能が悪いから、と言い訳をし続けていた。これに対し言い訳をするのではなくうまく折る方法を質問・相談して一緒に工夫していく必要性について指導した。のし紙をつける作業も同様であったが、袋入れ作業のモニタリングでは十分に時間をかけ慎重に取り組む様子が見られるようになった。

タイムトライアル作業にはいると、達成困難な作業目標を立て、ストップウォッチによる時間計測に気を取られ、ちょっとした場面でもすぐにストップウォッチを止めてしまう行動が目立った。不良品の発生は少なく作業時間の目標を意識していることはよいが、過度にストップウォッチを止めることは不適切な行為であることを指導したところ、適切な目標時間の設定について班長に自発的に相談をするようになり、その後、適切な目標設定可能となった。

また、新しい作業に入ってから、自発的な相談は見られており、セルフマネジメント訓練で形成された行動が持続された。

対人関係面では、当初は他の訓練生と一緒に騒いだり、個別相談場面ではいろいろな事への不満を多く語っていた。しかし、タオル作業が終了した頃から、自覚して他の訓練生と一緒に騒ぐ不適切な場面で騒ぐこともなくなり、就職に向け一定の適切な行動を自分でとることができた。

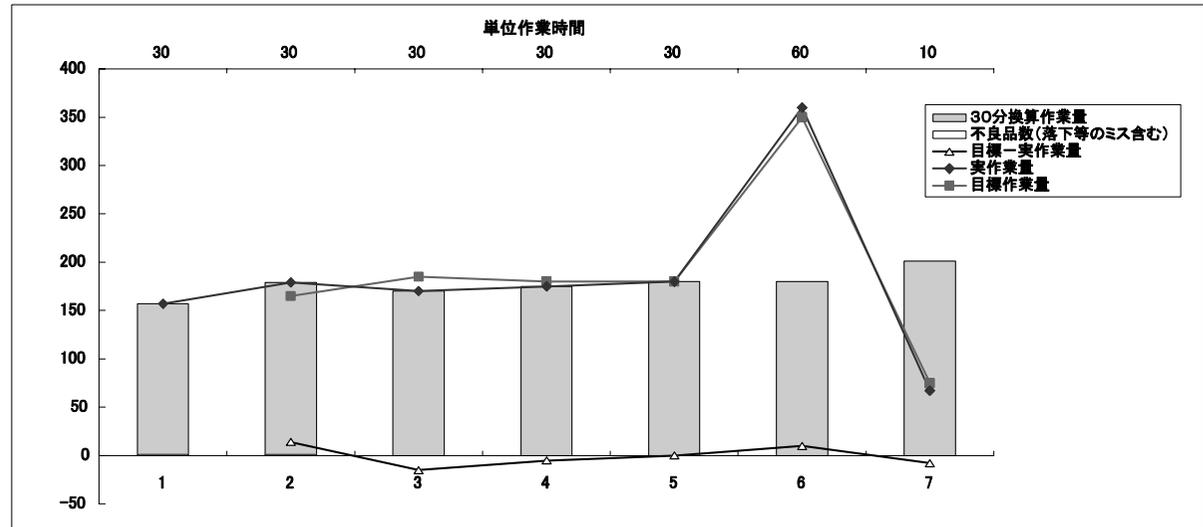
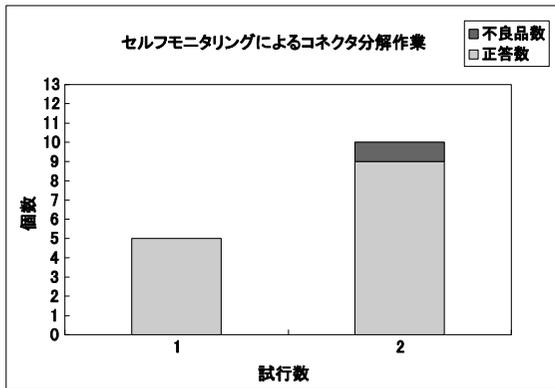
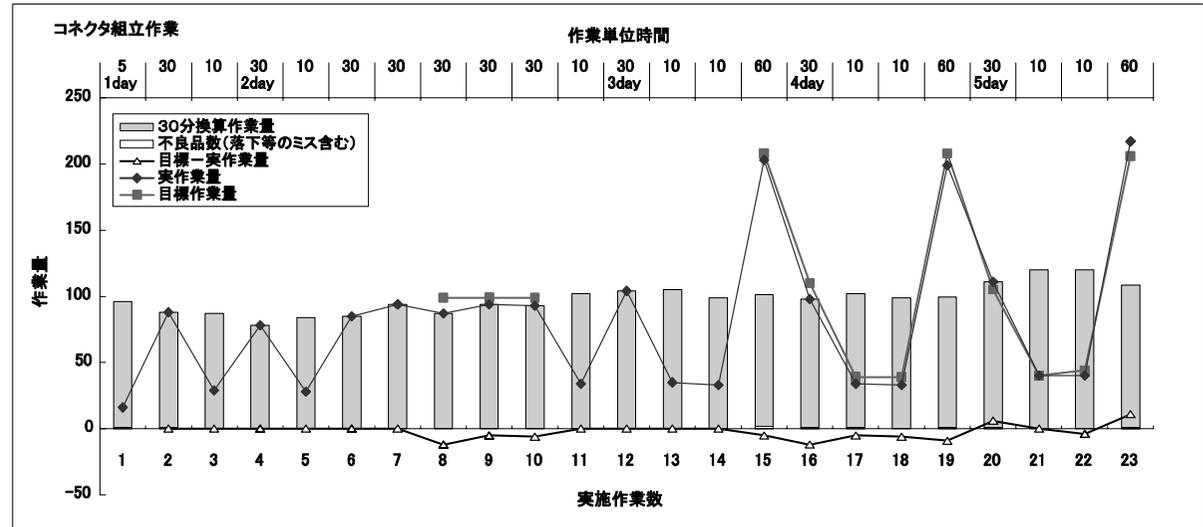
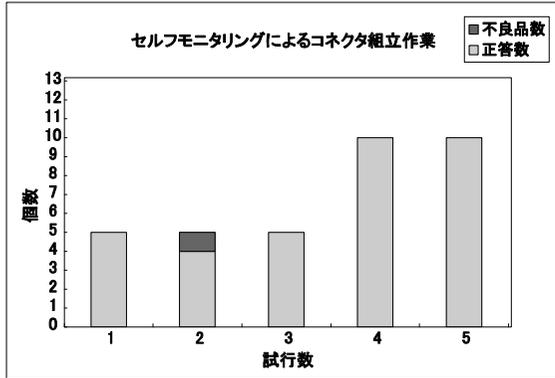
職業準備訓練7週目より、クリーニング会社へ職務試行法で実習へ行った。障害者の雇用経験がある事業所で、彼自身がセルフマネジメントの段階をより高い水準で自己管理・維持できる作業は単純な作業であること、また確実に自信をもってこなすことができる作業内容が望ましいこと、さらにこれまでの離職原因も加味し、少人数の会社であっても本当に彼を戦力として認め、評価してくれる

事業所が望ましいこと、また本人自身もこれらの条件が適切と判断したことから、本事業所とした。

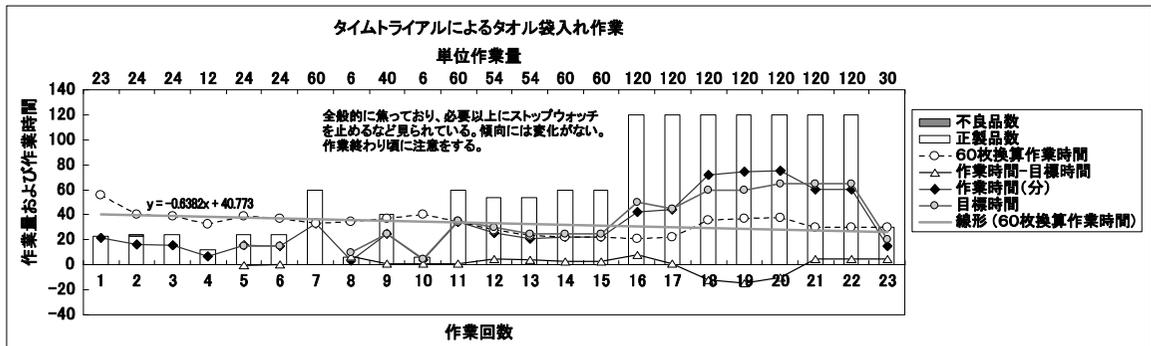
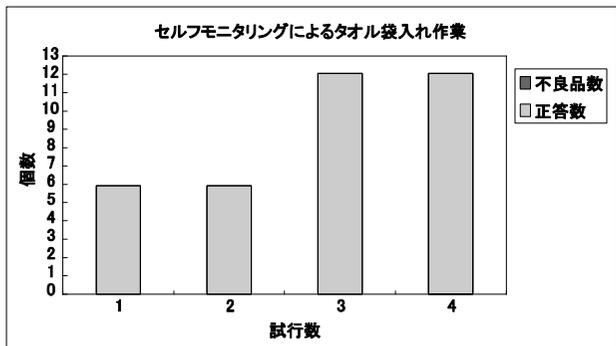
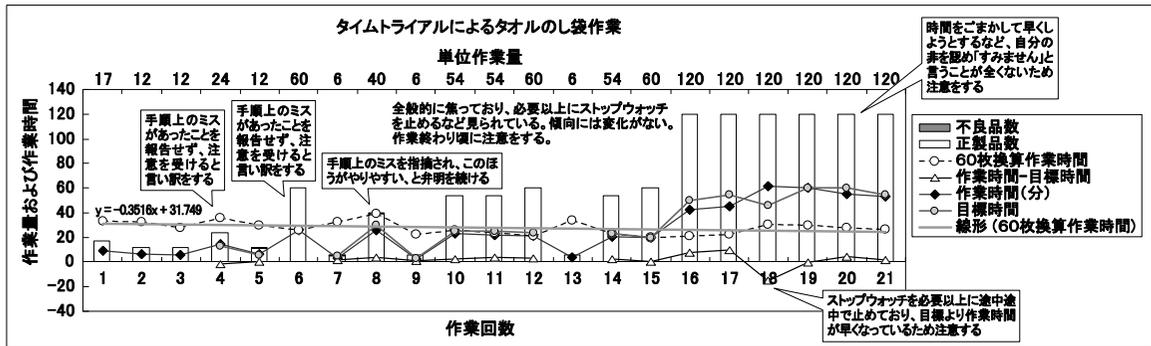
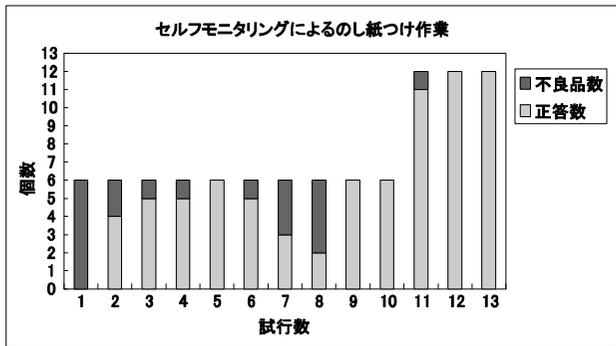
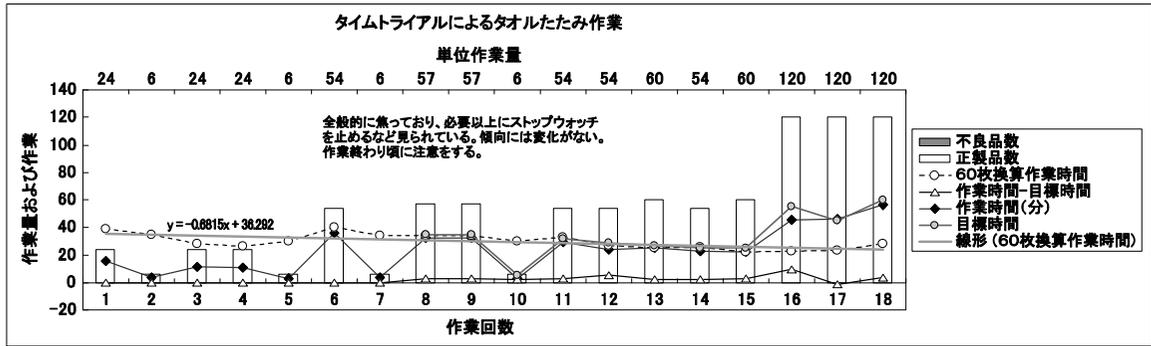
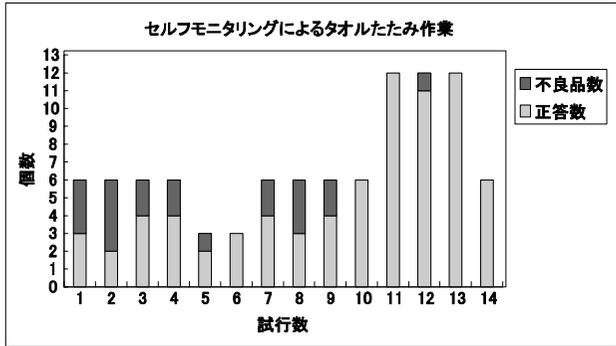
仕事内容は、回収されてきたコンテナに入っているおしぼりを指定された順でベルトコンベアにのせていき、ゴミ等が落とされたおしぼりをまた、コンテナに入れていき、種類ごとにコンテナを重ねていく作業である。当初は、要領よくコンテナから固まっているおしぼりをベルトコンベアの上に乗せることができない、機械の操作手順を間違え、うまくコンテナを重ねることができない、等の課題が見られた。実習期間中は毎日勤務時間終了後、職業センターに報告の連絡を入れさせ、状況を把握するとともに、担当カウンセラーが事業所を訪問し、事業所に対しては本人への指導方法についての助言を、本人に対しては自分で作業管理するよう助言を行った。本人も自発的に指導担当者に質問・相談をしていた。また、作業管理を自律的に行わせるため、本人に職業準備訓練で使用した連絡帳に毎日仕事の状況について記入をさせた。その結果、徐々に自分で判断し、手際よく作業をこなせるようになり、本事業所に採用となった。職業準備訓練終了後、自分から「本当に働き始めても自分で連絡帳を毎日書いて、作業記録をつけます」と宣言していた。

現在は、作業も安定し連絡帳の記入も中断しているが、周囲のパート従業員とも良好な人間関係を築き、職場適応状況も良好であり、以前より幅広い仕事内容をこなすことができるようになっている。

図Ⅱ-2-3. b-2さんのコネクタ組立・分解作業の作業状況



図Ⅱ-2-4. b-2さんのタオルたたみ・袋入れ・のし紙つけ作業の作業状況



③ b-3

19歳の男性、知的障害B2。中学校特殊学級を卒業後、高等技能専門校へ進学し木工科で1年学ぶ。卒業後、2事業所に就職するが、いずれも機械を使いこなせない、要領よく仕事できない等の理由から1ヶ月以内で退職している。退職後約3年間、在宅し家庭内で内職を行うが、仕事が大幅に減ったためセンターへ来所した。

職業評価担当カウンセラーと相談の上、甘えられる人への粗暴な態度の改善、職業準備性の向上、基本的な労働習慣の確立を目指し職業準備訓練を受講することとなった。

訓練開始後、対人関係面では班長と他の訓練生に対して、人によって態度を変える場面が目立ち、班長から指導を受けた。また、作業途中に他の訓練生と大きな声でおしゃべりをしたり、よそ見をすることが多かった。そのため、コネクタのタイムトライアル作業では作業量が増えず、また部品の落下等も他の訓練生に比べ多かった。

このような失敗を踏まえ、タオル作業では集中して作業に取り組むことができるようになること、よそ見をしないようになることを指導目標とした。しかしながら、タオル作業に入ってもよそ見は減らず、また、セルフモニタリング訓練では、常に失敗はない、と自己評価が高い傾向が見られた。タイムトライアル作業では、特にタオルたたみにおいて不良品の発生が多く、本人もショックを受けていたようだがよそ見は減らなかった。

別の作業に移っても同様で、よそ見は減らず、不良品の発生も多く、自己評価の高い傾向は改善がされなかった。

職業準備訓練終了後、いったん地域の作業所に通所することも検討し地域の作業所を訪問する。作業所施設長と相談し、本人は知り合いのゴルフ場でボール拾いの仕事でアルバイトを行った。ゴルフ場経営者の理解もあり、他の従業員に比べ、作業スピードは1/3～1/2以下、指示がないと動くことはできない、指示を出されても手が空くとぼーっとしている等が目立つものの、より成長を促しながら指導をしてもらえるとのことで、採用となった。作業所施設長も、あわせて経過を見てもらえることとなった。しかし、採用後遅刻が多い、さぼっている等、本人の勤務態度があまりにも悪い、とのことで作業所施設長から相談が入ったため、父親と相談し、家庭での指導・支援を徹底することとした。現在は特に連絡はなく定着している。

④ b-4

20歳、知的障害B1、重度判定にて重度知的障害者と判定を受けている。中学校特殊学級卒業後、服装専門学校へ進学するが、勉強についていくことができず2年終了時に中退した。退学後、2社ほど就職をするが、段ボール製造の会社では作業が遅く1週間で解雇、箱詰めの会社でも流れ作業についていくことができず2週間で解雇となる。退職後、約3年間、在宅し家庭内で内職を行うが、仕事が大きく減ったためセンターへ来所した。

職業評価担当カウンセラーと相談の上、①最低限の意思表示をできるようにすること、②依存的な甘えた態度の改善、③作業スピードの意識した取り組みをできるようにすること、④作業耐性の向上、⑤生活リズムの改善と糖尿病の服薬管理をできるようにすることを指導目標に、職業準備訓練を受講することとなった。

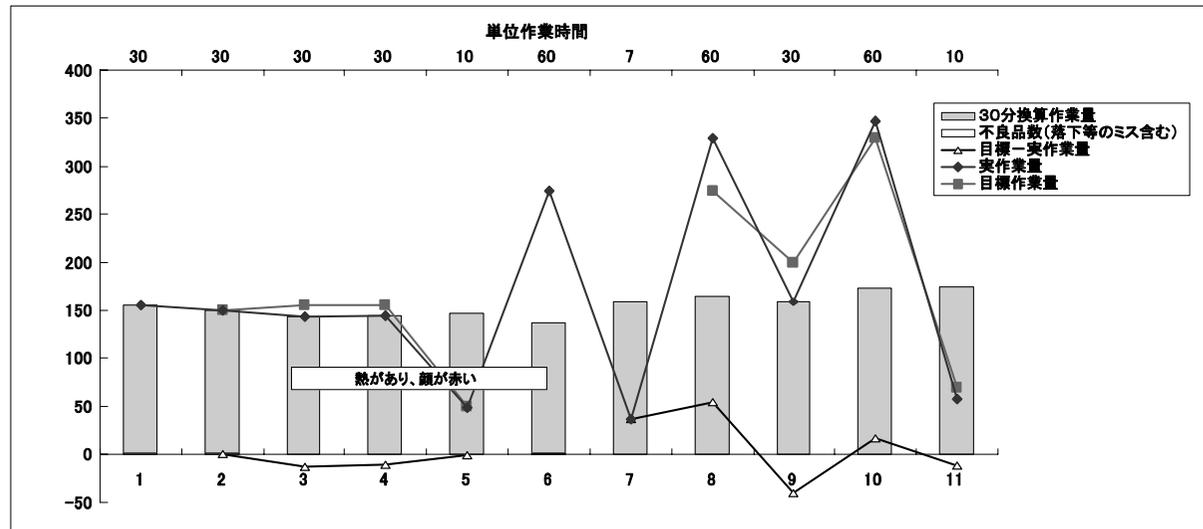
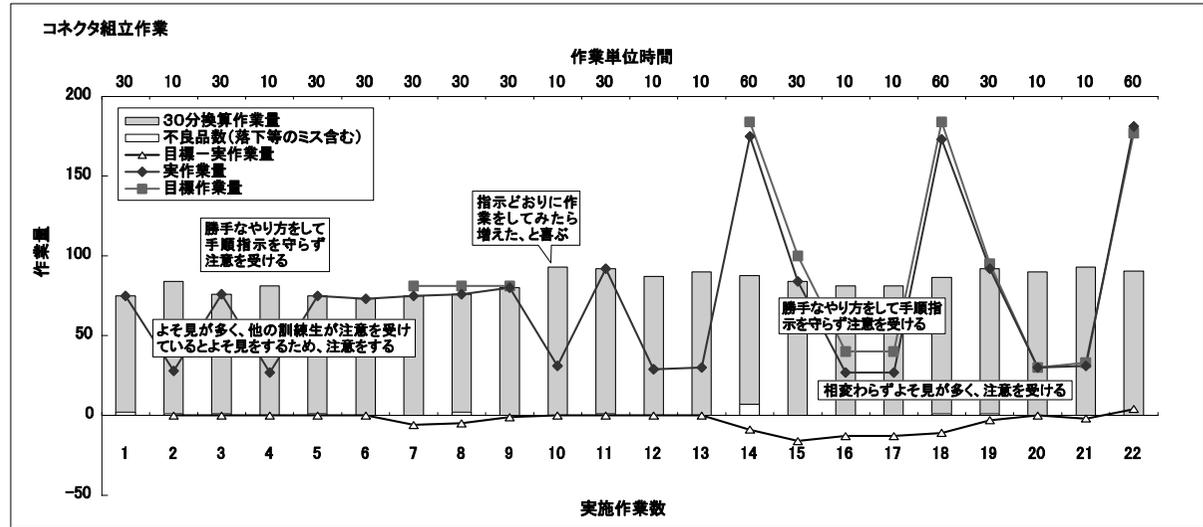
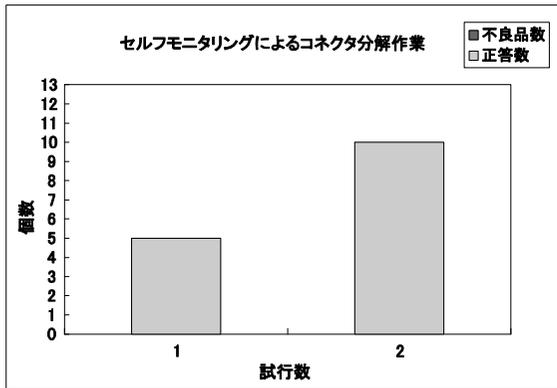
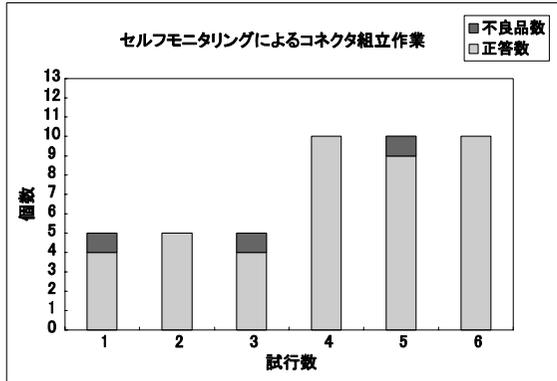
訓練開始早々、他の訓練生と駅で待ち合わせをしていて遅刻しても全く謝罪をせず笑って出勤する、ある男性を好きになり、彼が他の女性と仲良く話していると泣いてしまう、他の男性から何か言われると感情的になって泣き出してしまう等の不安定な状況が続いた。

作業面では、コネクタ作業時には問題は見られなかったが、タオル作業になると、数を数えられないことが問題となった。タオルたたみ作業のセルフモニタリング訓練では、6枚やる場面でも枚数を間違えてしまい、泣き出す場面もあった。そのため、個別に数の学習を実施した。数の学習には意欲的で、家庭に持ち帰り主体的に頑張っており取り組んでいた。タオル作業終盤になると、タオル作業で必要とされる数の理解・弁別が可能になり、時間の概念も理解し、ストップウォッチの時間を読むことができるようになった。次の新しい作業に移った後も、20単位の数の理解が可能となった。

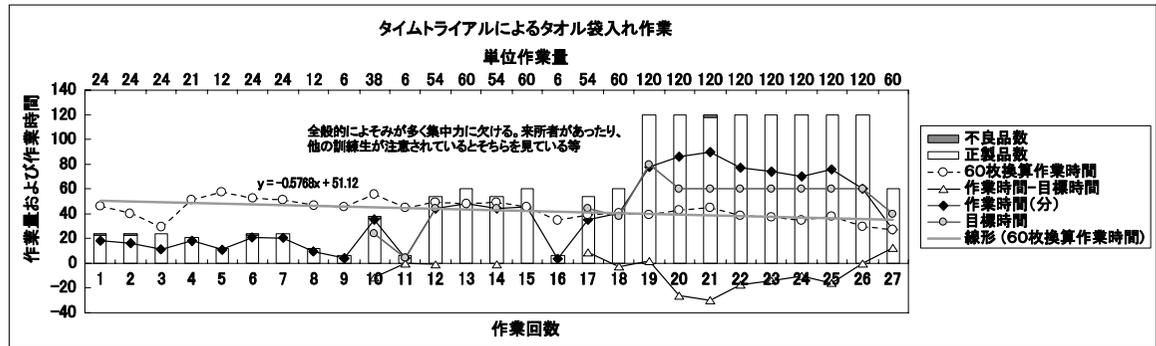
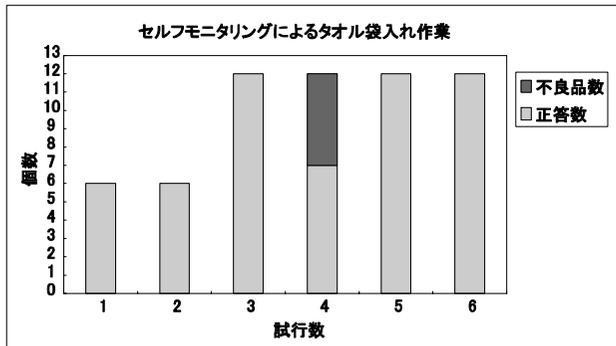
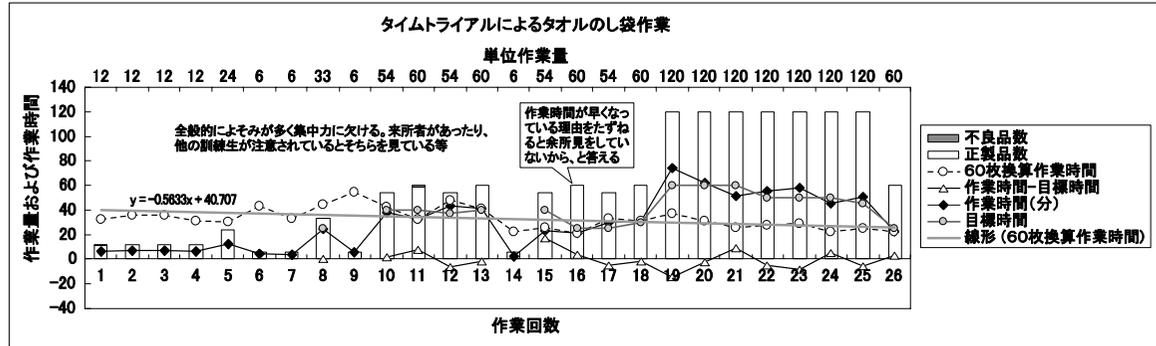
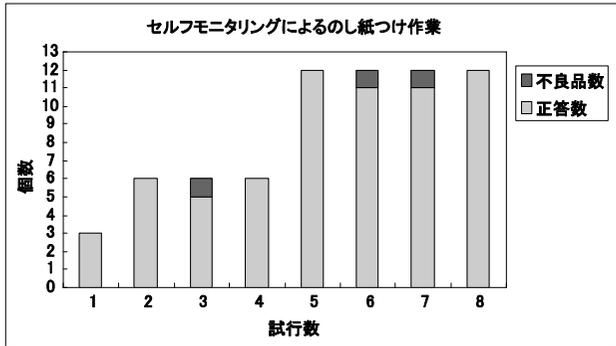
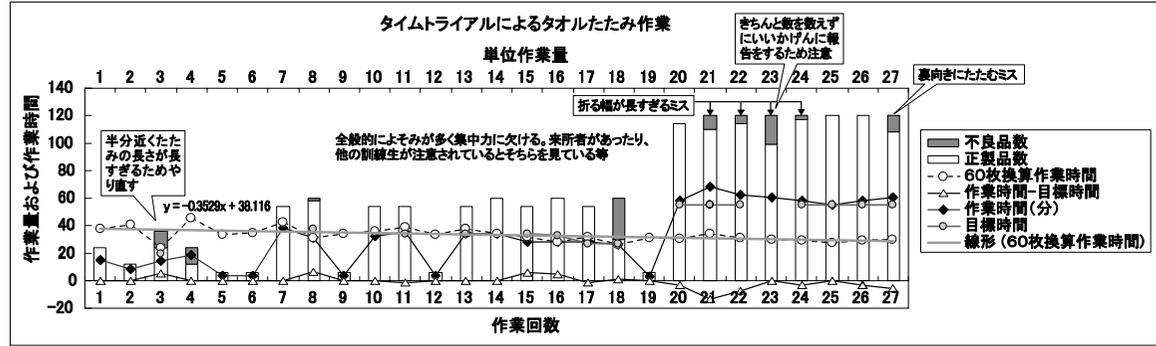
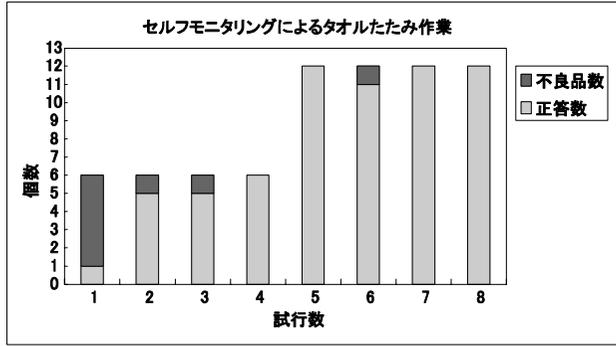
しかしながら、対人関係面でのトラブルや、感情の不安定さは払拭することができず、それが作業に影響し安定した作業ペースでの取り組みには至らなかった。また、作業途中で腰の痛みを訴え、泣きながら作業を中断する、といった場面も見られた。

職業準備訓練終了後、精神面での不安定さから当面は地域の作業所に通所することとなった。

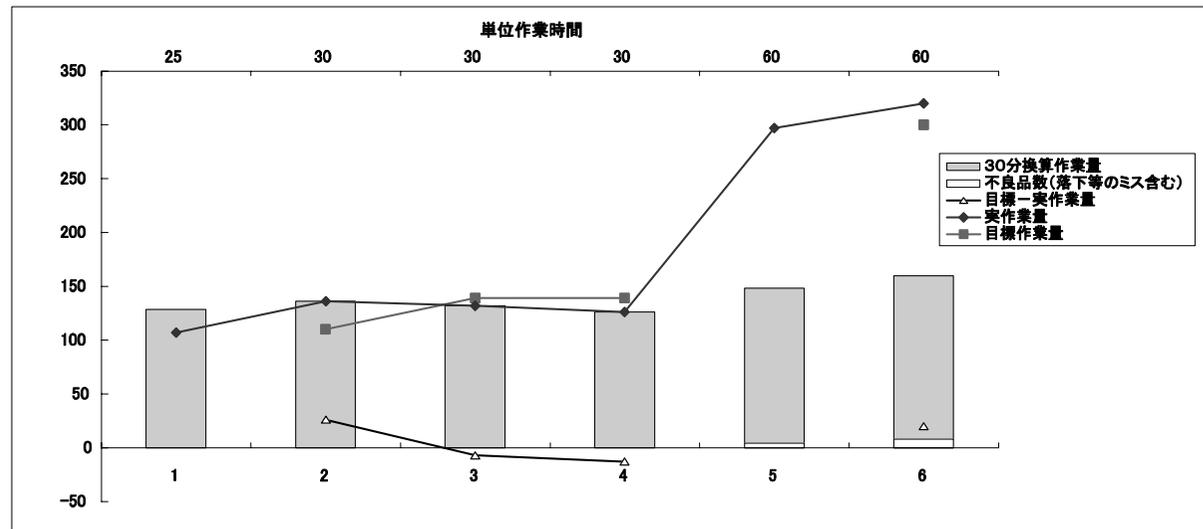
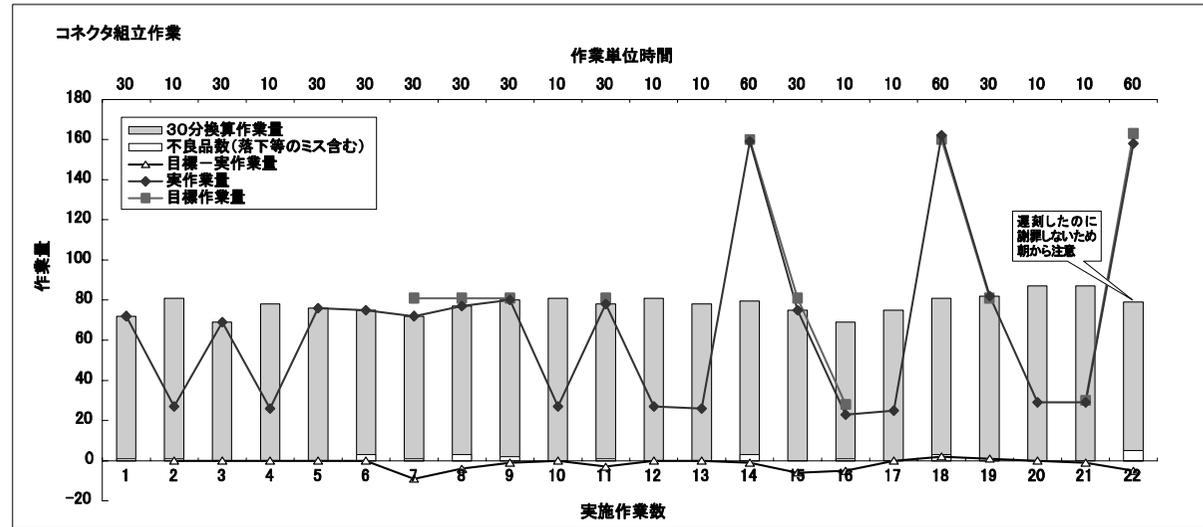
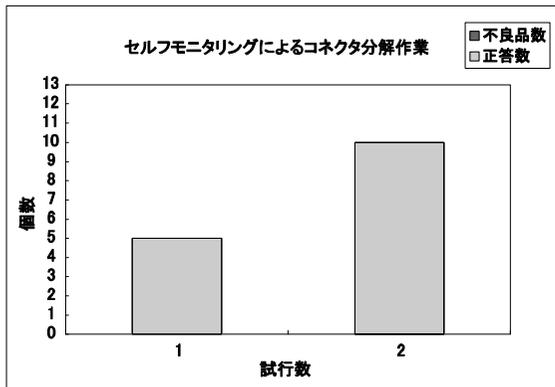
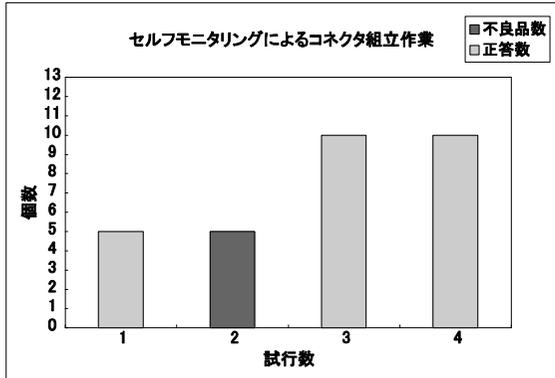
図Ⅱ-2-5. b-3さんのコネクタ組立・分解作業の作業状況



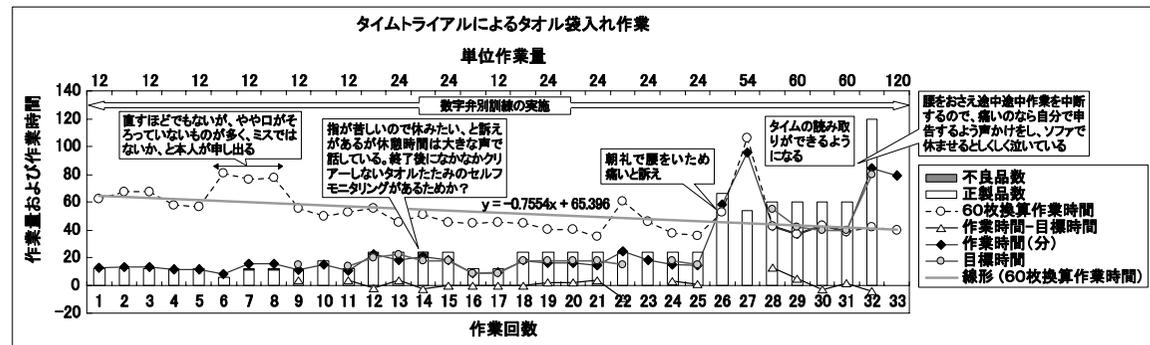
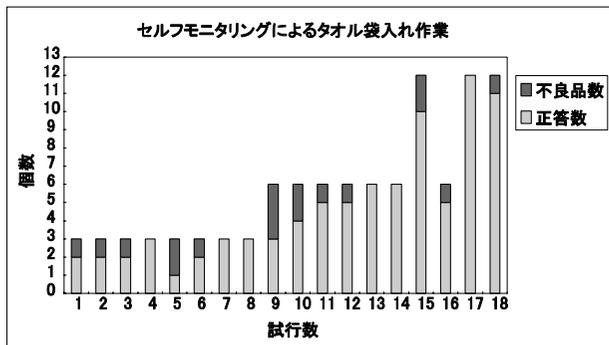
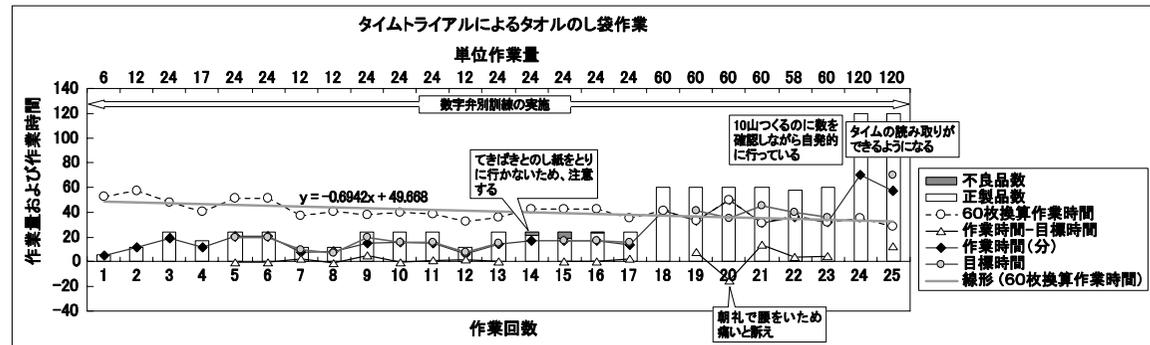
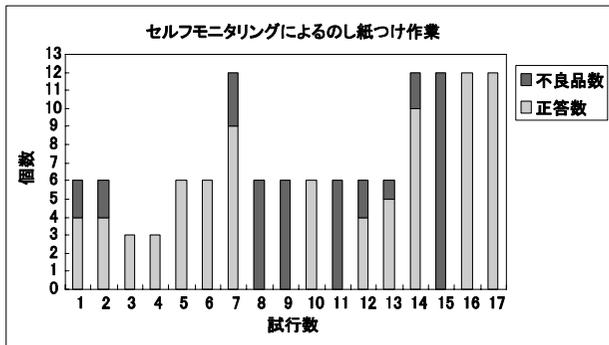
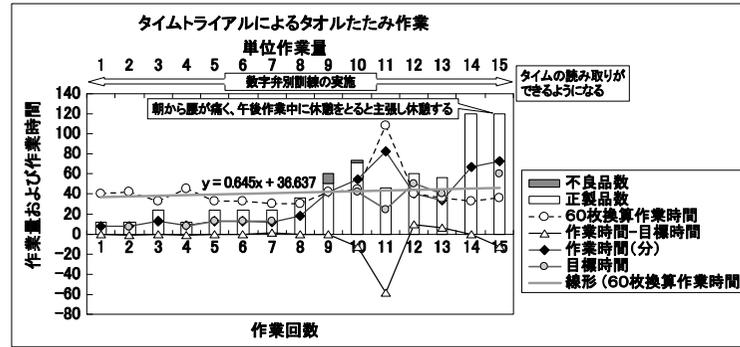
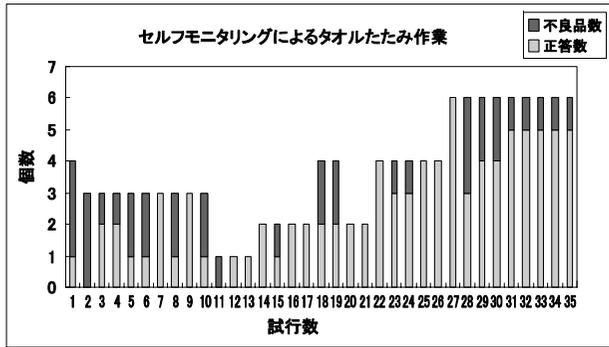
図Ⅱ-2-6. b-3さんのタオルたたみ・袋入れ・のし紙つけ作業の作業状況



図Ⅱ-2-7. b-4さんのコネクタ組立・分解作業の作業状況



図Ⅱ-2-8. b-4さんのタオルたたみ・袋入れ・のし紙つけ作業の作業状況



⑤ b-5

19歳の男性で、軽度知的障害者（重度知的障害者判定で重度と判定されない）、自閉的傾向がある。養護学校高等部卒業後、職業訓練校へ進学するが女性生徒への問題を起し退学した。退学後、センターにて相談の上、職業準備訓練を受講し就労を目指すこととなった。

職業評価・相談および、事前職業準備訓練体験を3日間実施した結果、指示理解力は高いものの、作業耐性・集中力・作業能率面で課題があること、斜視のためメガネの使用が望ましいにもかかわらず、格好が悪いと本人が頑として拒否していること、注意や指示を素直に受け入れられないこと、自分の話を聞いてくれる相手には依存的な態度になること、女性が不快に感じる性的言動等、場に適切な言葉遣いできないこと、等の課題点を見られた。

職業準備訓練実施にあたり、これらの評価結果を元に、①メガネの自発的な使用、②場に適切な言葉遣いと依存的な態度の改善、③①と②の課題についてのセルフマネジメント能力の向上、を指導目標とした。

コネクタ作業実施時は、メガネを使用しなくてもミスが発生が少なく、メガネ使用への指導機会は得られなかった。一方、訓練開始当初から、個別の相談実施時には、性的言動や家族や訓練校への不満が多発し、訓練室内では、他の訓練生と大騒ぎしたり、作業の合間におしゃべりをするなど目立っていた。コネクタ作業でタイムトライアル訓練を行うようになると、作業中は目標を達成しようとする意欲的に集中して取り組むようになった。

タオル作業では、不良品の発生が見られたため、メガネの使用を計画的に働きかけたところ、メガネ使用により、不良品の発生が減少することを体験し、自発的にメガネを使用するようになった。

対象者が自発的なメガネの使用を受け入れ始めた頃から精神的な安定が図られ、作業途中でのおしゃべりや感情的な言動・性的発言が減少し、感情面の自己管理ができるようになった。また家庭内でも母親と感情的にならずに会話できるようになり、家庭での不満や感情的ゆらぎが減少した。

職業準備訓練終了後、公共職業安定所の紹介により、初めて知的障害者を雇用する事業所でジョブコーチ支援を行うこととなった。仕事内容は、ピッキング業務にかかる一連の業務であった。JC支援期間中、メガネ使用に対する否定的態度が一時見られたが、すぐに改善され、また感情的な発言等は生じず、職場定着を促進できた。事業所からも計画的に指導目標が達成できたことは評価され、ナチュラルサポートへの移行も順調にできた。現在も職場適応状況は良好である。

⑥ b-6

41歳の男性、精神障害、精神保健福祉手帳2級。父・母と同居している。高校情報処理科卒業後、いずれも短期間で、離転職を繰り返し、対人関係面でのトラブルが続いていた。家族が実家に連れ戻し精神科を受診し入院する。退院後、自己開拓で就職したが、1年後夏場に体調を崩し、通勤途中で転倒する等の状況が生じ会社を退職した。ここ2年ほどは病状は安定しているが、幻聴があり、女性の声で「～しなさい」と聞こえるが、気にしないことで対応している。体調が悪くなると、話している最中にぼーっとしたり、ふらついてくる。病院のワーカーによれば、本人は現状が最も安定した状態であり、体調を崩さないよう維持していくことが望ましいと判断されていた。

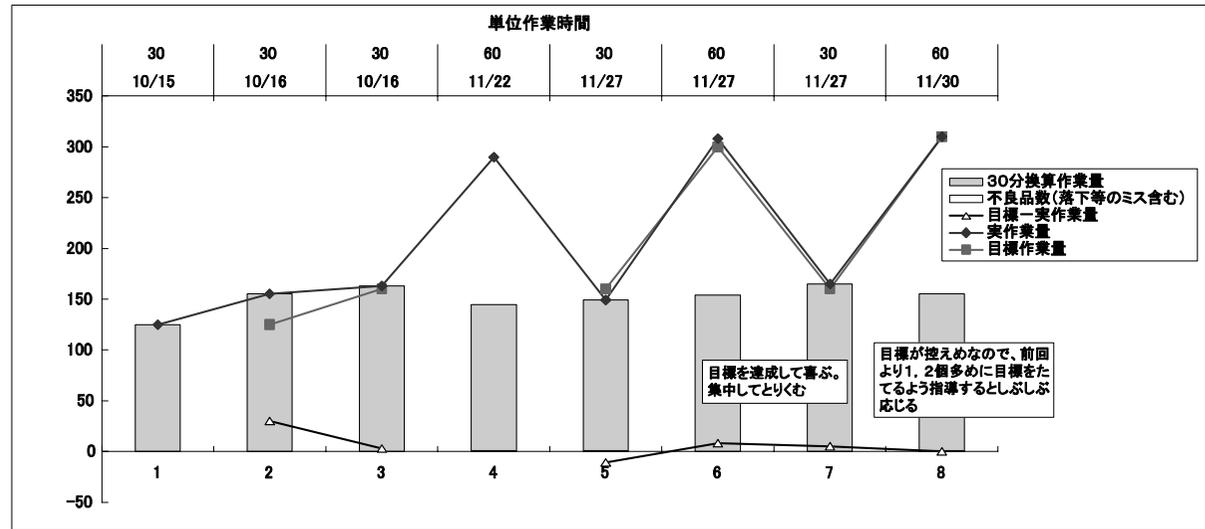
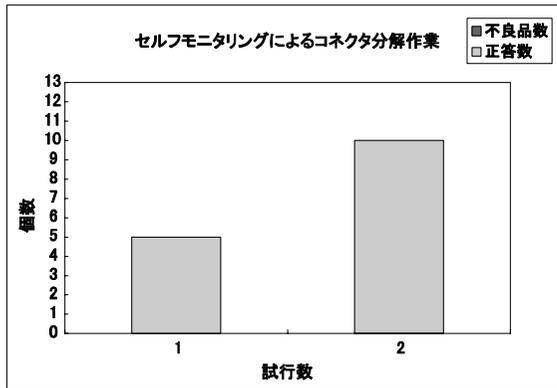
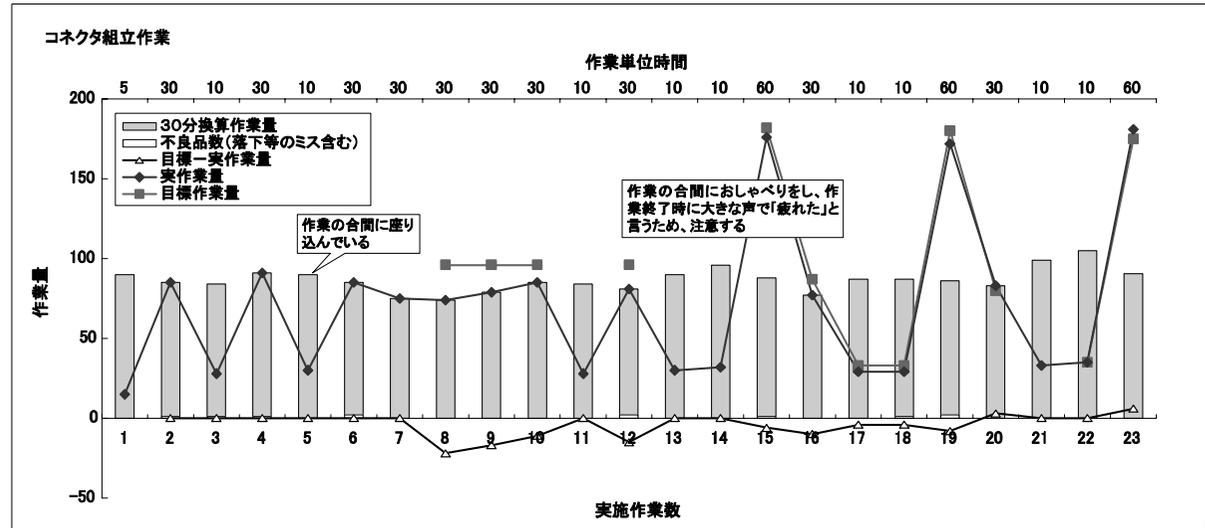
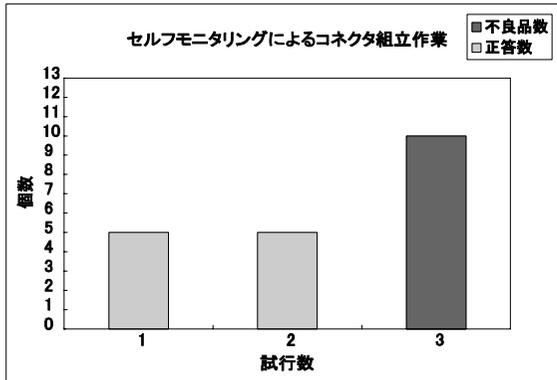
職業評価担当カウンセラーと相談の上、職業準備訓練を受講し、体調を整えながら再就職を目指していくこととなった。

コネクタ作業、タオル作業共に、作業能率は低いものの、安定した作業ペースで作業に取り組むことができていた。作業スピードが向上しないことを気にし、班長に自分から相談へ行く場面もあったが、作業スピードの向上をそれ以上促すことは困難であったため、そのペースを維持していくよう指導した。

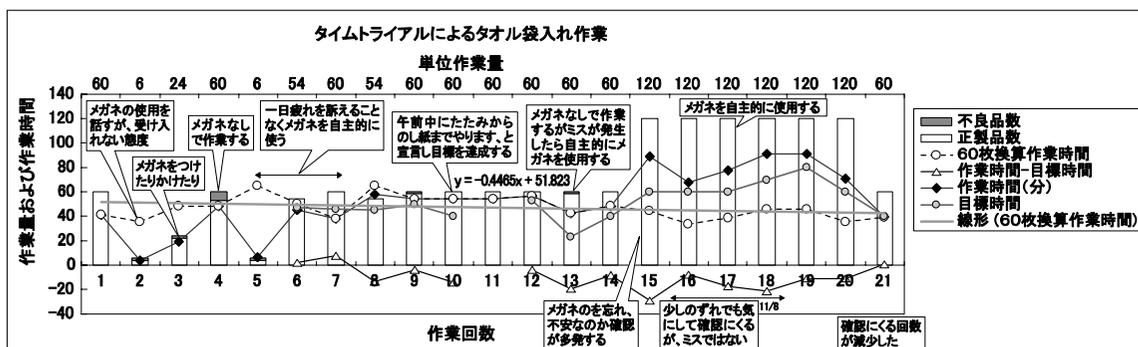
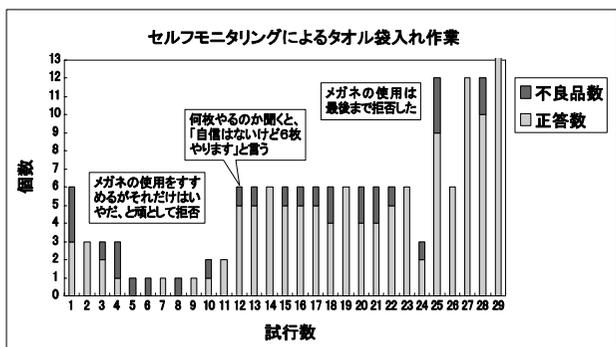
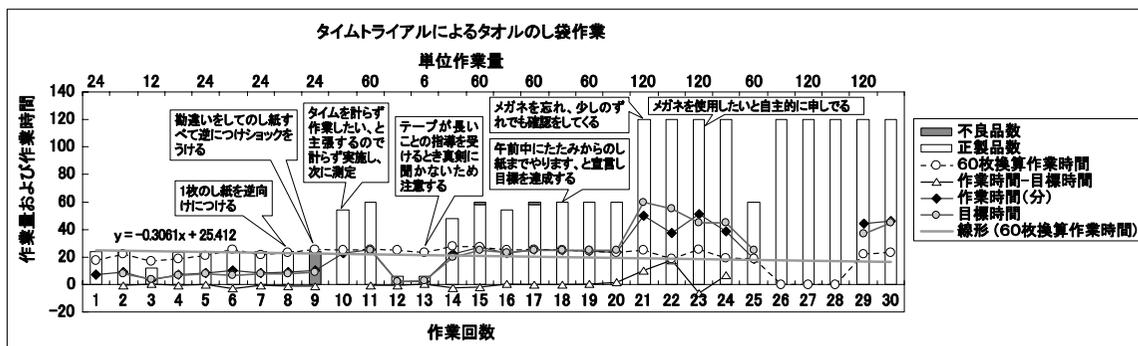
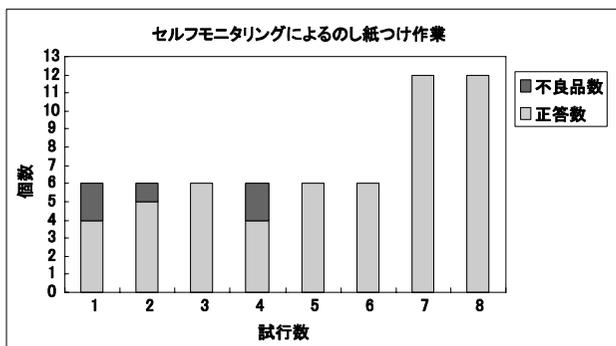
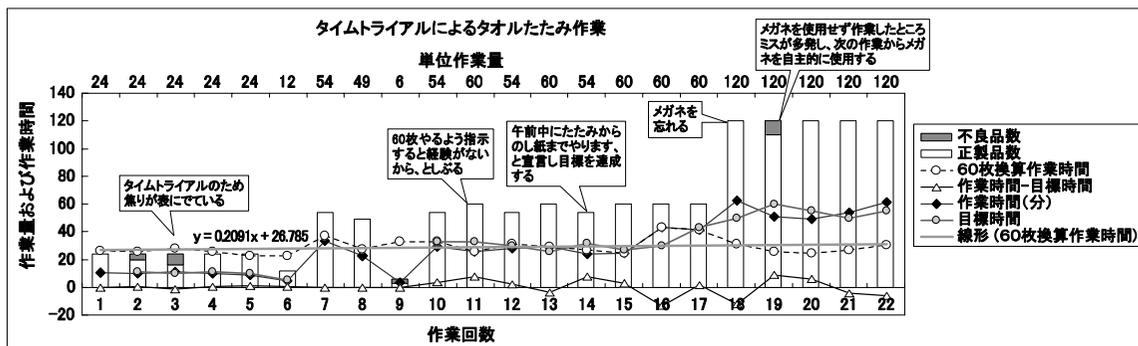
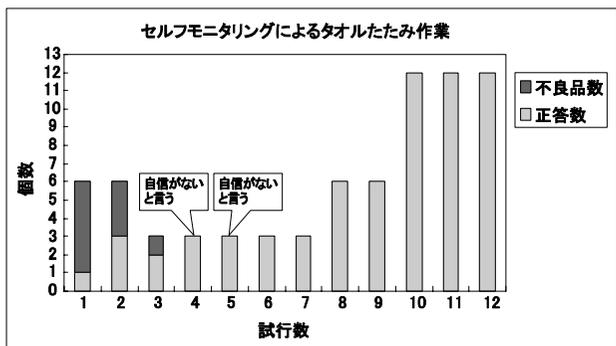
対人関係面では、一人でいる訓練生を気にして声を掛けるといった場面も見られた。また、何か気になると話をしないと気が済まず朝礼直前に相談があるのですが、と申し出る様子が見られた。

職業準備訓練7週目より、重度障害者多数雇用事業所で職場実習を行ったが、他の障害者に比べ、作業スピードの向上が見られず、かなり遅いことと、周囲が気になってほかの人の手助けをするのはよいが、自分の作業に集中していない、とのことで採用に至らなかった。本人と相談のうえ、精神障害者の福祉工場内に設置されている作業所に通所し、一定の作業ペースの向上を図った上で、採用を目指していくこととした。現在も通所中で、福祉工場に確認をしたところ、安定した作業ペースは遅いが自発的に取り組むことができていることから、時期を見て採用の方向で話し合う予定とのことであった。

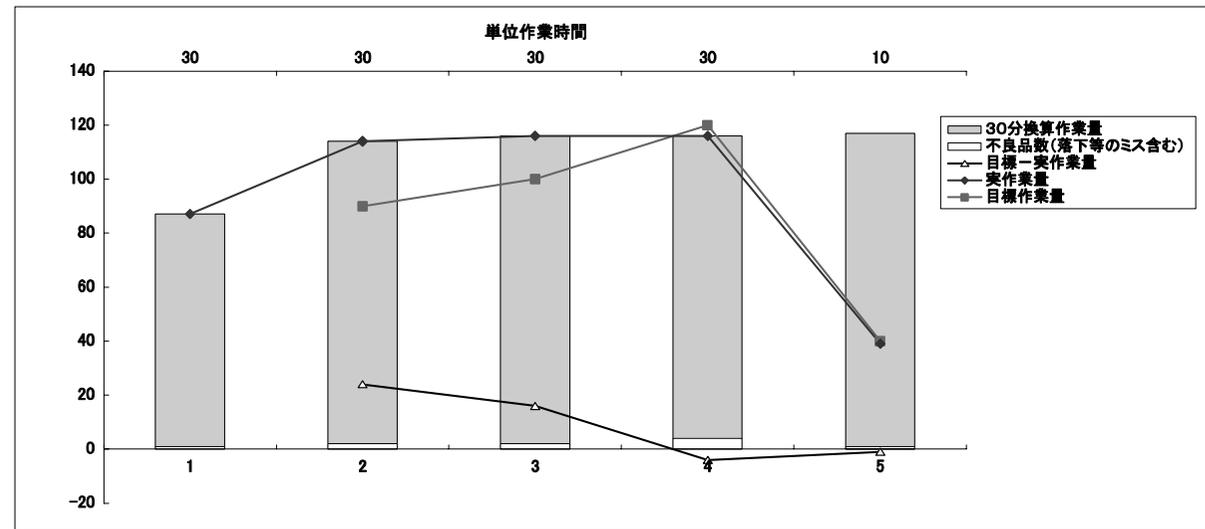
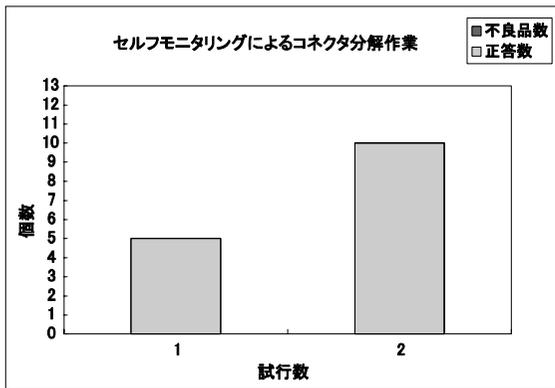
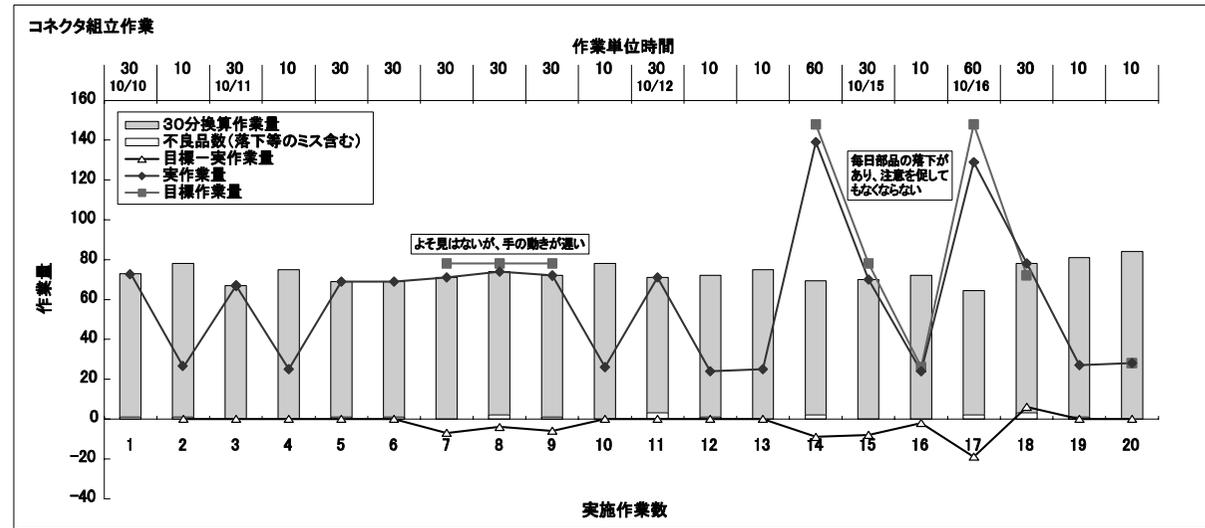
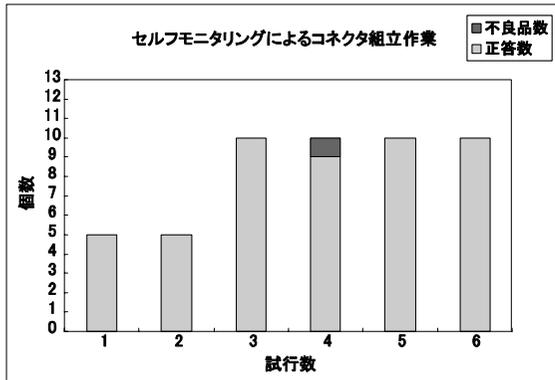
図Ⅱ-2-9. b-5さんのコネクタ組立・分解作業の作業状況



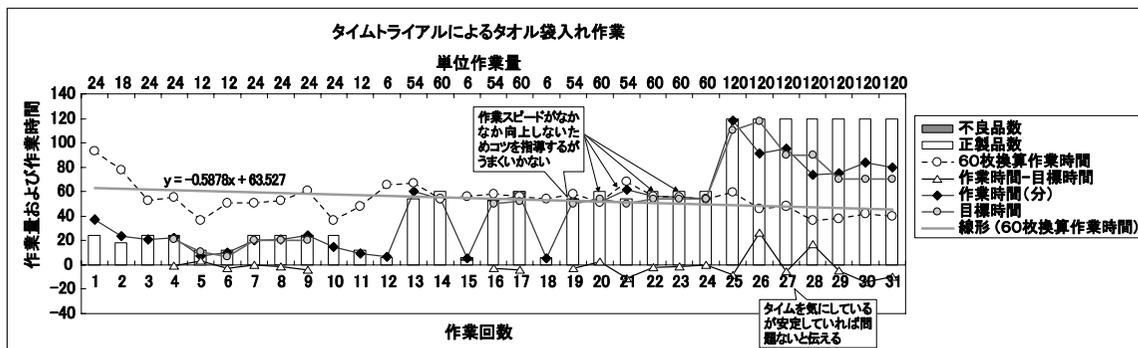
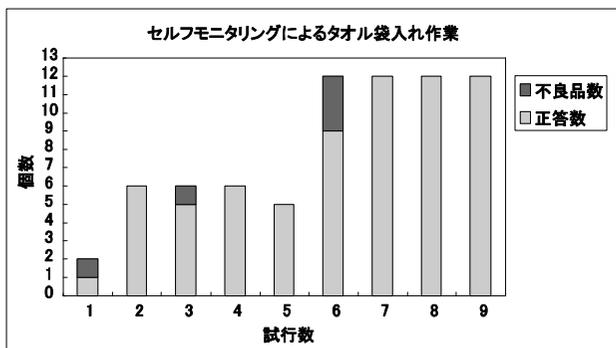
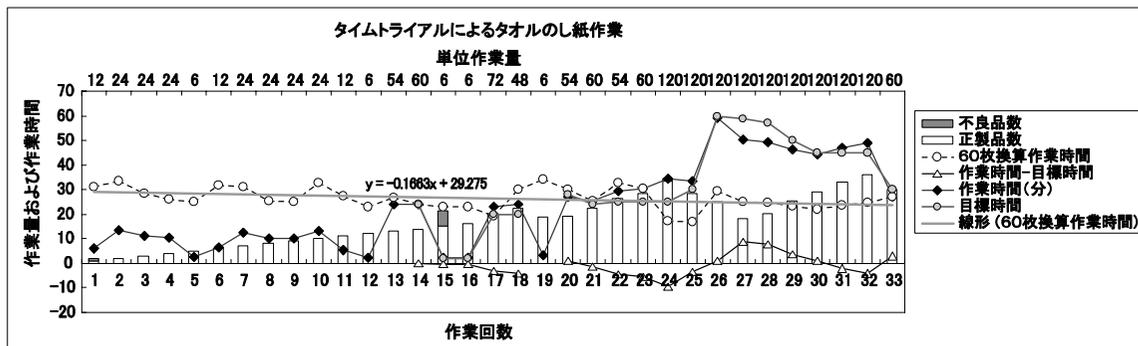
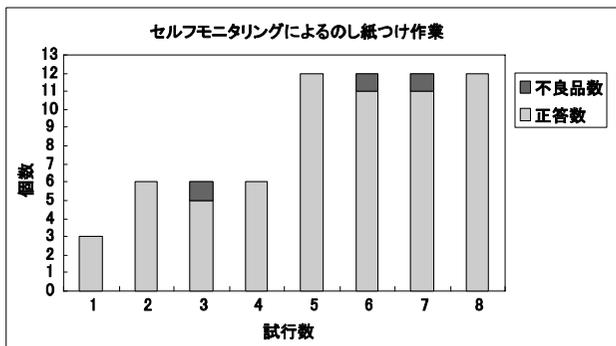
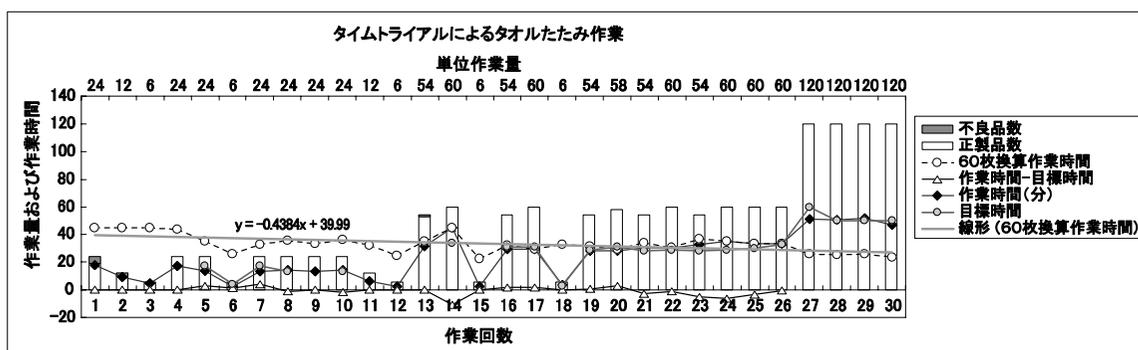
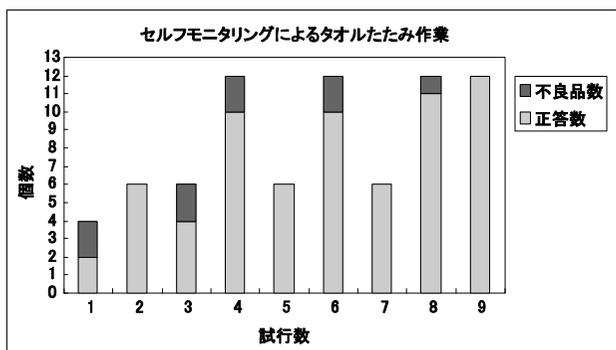
図Ⅱ-2-10. b-5さんのタオルたたみ・袋入れ・のし紙つけ作業の作業状況



図Ⅱ-2-11. b-6さんのコネクタ組立・分解作業の作業状況



図Ⅱ-2-12. b-6さんのタオルたたみ・袋入れ・のし紙つけ作業の作業状況



⑦ b-7

45歳の女性で、知的障害B1、重度判定にて雇用対策上重度と判定を受けている。夫の暴力がひどく、母子寮に入寮となった。不満が多く、精神的に不安定になると作業へ安定した取り組みができない、といった課題点があるものの、自立を目指し就職したいとの本人希望により来所相談を行った。

職業評価の結果、作業能率は早いものの、部品の扱いなどは雑であること、指示を最後まで聞かずにあわてて作業に取り組むこと、作業手順等を正確に理解できないことがある等の作業上の課題が見られた。また、数処理が10程度までしかできず、不確実であること、場に適した態度・言葉遣いができないこと、「自信がない、できません」と何事にも取り組む前から否定的な発言をする傾向があること、等の課題点も見られた。

これらの評価結果を元に、①あわてずに作業へ取り組むことができるようにすること、②正確性を意識した取り組みをできるようにすること、③①と②の課題のセルフマネジメント能力を高め、結果的に自信をもって取り組むことができるようにすること、を指導目標とし、職業準備訓練を受講することとなった。

職業準備訓練開始後、対人関係面では年下の他の訓練生が騒いでいるとうるさい、と苦情を言うことが目立った。作業面では、コネクタ作業では表面化しなかったが、タオル作業に移ると、セルフモニタリング作業において、確実にできているにもかかわらず、常に「自信がない」といい自己評価が低くなる傾向が見られた。そのため、計画的に自信をつけ作業に取り組むことができるよう指導を行ったところ、適切な自己評価が行えるようになった。しかし、タイムトライアル訓練に移ると、数・時間の概念を理解できていないため、作業枚数を間違える、適切な目標時間の設定ができない等から、再び「自信がない」と答えるようになった。そのため、個別に数と時間の概念についてメモ帳を活用した指導を行った結果、徐々に適切な目標設定ができるようになった。それと並行して、感情的にも安定し始め、他の訓練生が騒いでいても気にせず、自分の作業に集中して取り組むことができるようになった。

この効果は他の作業に置いても持続し、維持することができていた。職業準備訓練において、計画的にセルフマネジメント能力の向上を行った結果、落ち着いて自信をもって作業に取り組むことができるようになり、母子寮内でも精神的に安定した様子が見られている。

職業準備訓練終了後、JC支援においてもセルフマネジメント能力の発揮を目指してメモ帳の活用を再び指導したところ、短期間で暗転した作業を行えるようになった。

事業所からは計画的に指導目標を達成できたこと、作業用メモ等による自律的な作業態度が他の職員への負担軽減となること、新たな作業の導入の際にも指導方法が明確になったこと等について評価されており、ナチュラルサポートへの移行も順調に図れた。現在も職場適応状況は良好であり、職場内での感情的なゆらぎは自己管理できている。

⑧ b-8

31歳の男性、身体障害者手帳4級、両下肢機能障害（右4級、左7級）である。大学在学中に交通事故に遭い、リハビリテーションセンターに入所した後、更生指導所に移った。その後、就職を目指し自立したいとの希望から来所相談を行った。更生指導所内では、時間を守った行動をとることができない（何事も他の所生より行動が1～2テンポ遅い）、身だしなみの面で意識が不十分である、といった課題点が指摘されていた。

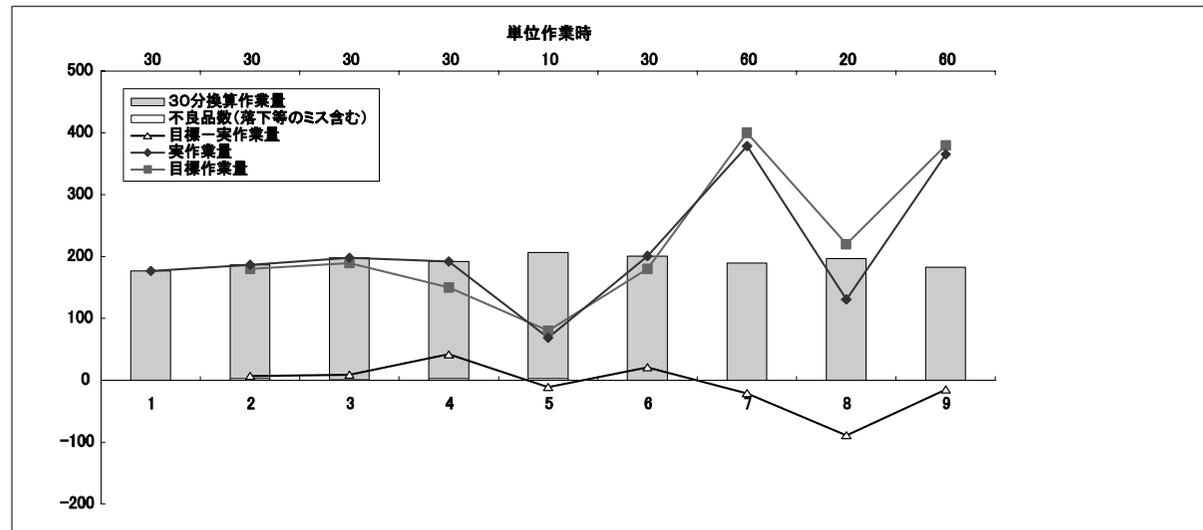
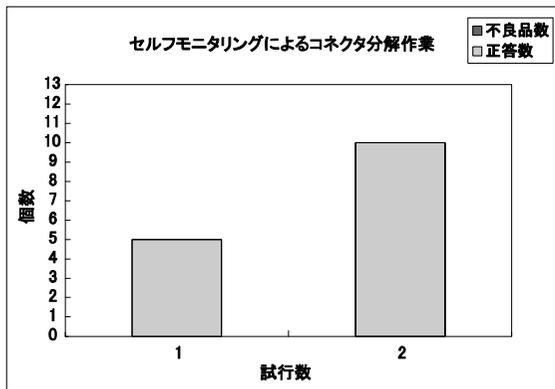
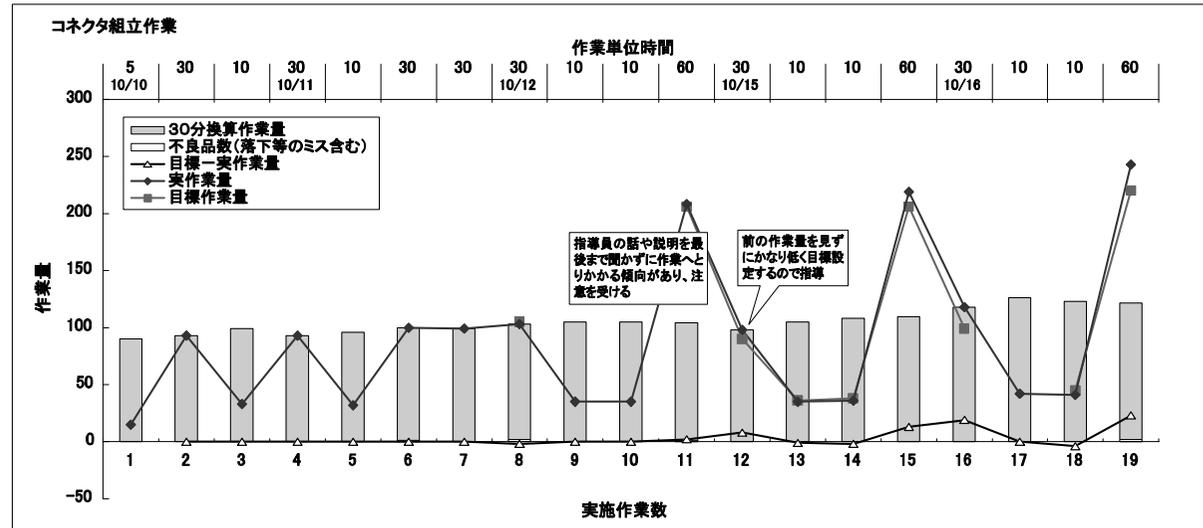
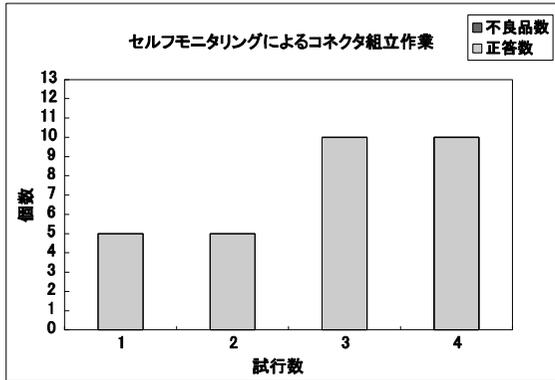
そのため、職業評価担当カウンセラーと相談の上、課題点の改善を図るため、職業準備訓練を受講することとした。職業準備訓練には施設から通うこと、家族との話し合い・調整に関しては施設が担当することとした。

職業準備訓練開始後、コネクタ作業もタオル作業も概ね安定した取り組みをすることができていた。時間のルーズさについては、なかなか口頭の指示・助言だけでは改善を図ることができないため、1日の日課の内、帰りの時間を守ることができるよう個別指導を実施した。さらに、朝と帰りの行動をルーチン化し、チェックリスト式のメモを用いて、それに従い行動するよう促した。その結果、開始前は職業準備訓練室を出る時間が終礼後、30分以上かかっていたが、10分程度で行うようになり、目標とする退社時間内で行動できるようになった。この結果から、高次脳機能障害によるか自発的な時間や行動の管理が困難な部分については、メモリーノートを活用をすることにより概ね改善可能であることが確認できた。

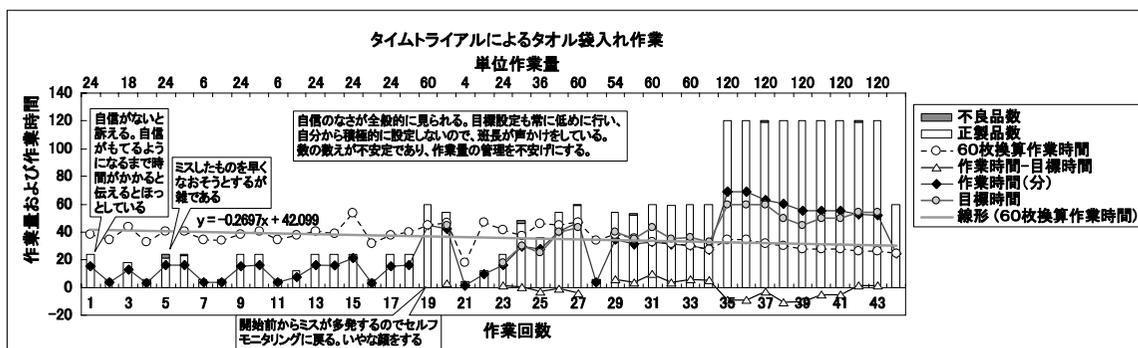
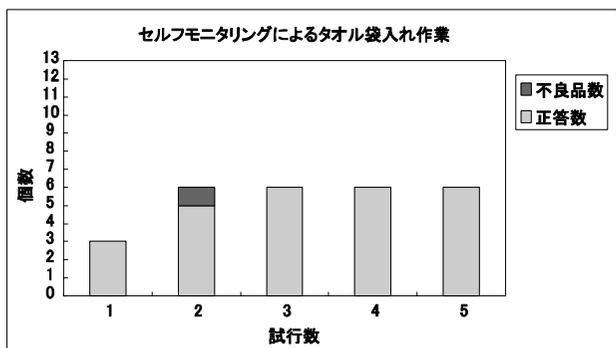
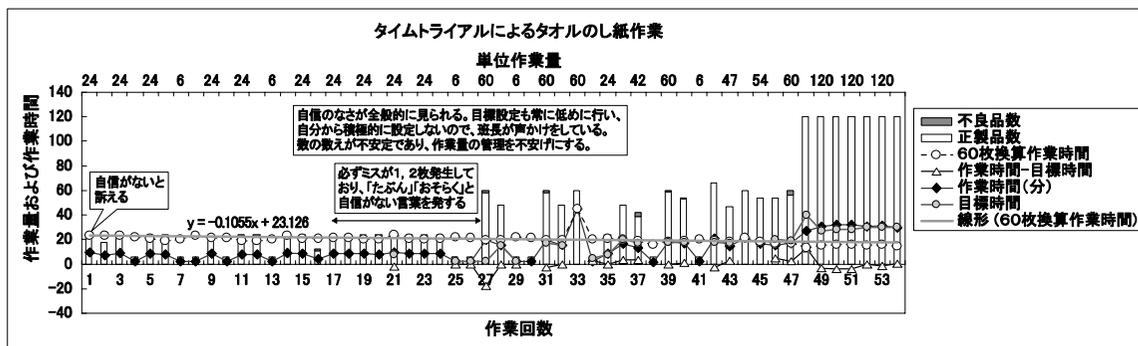
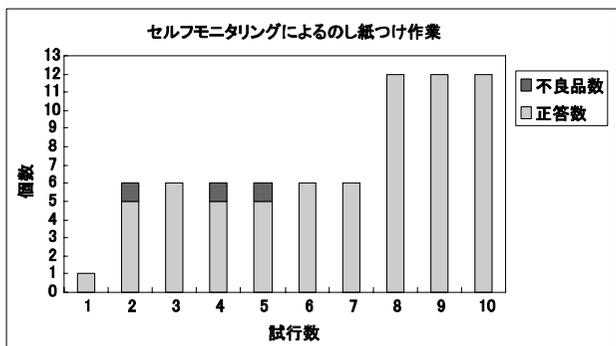
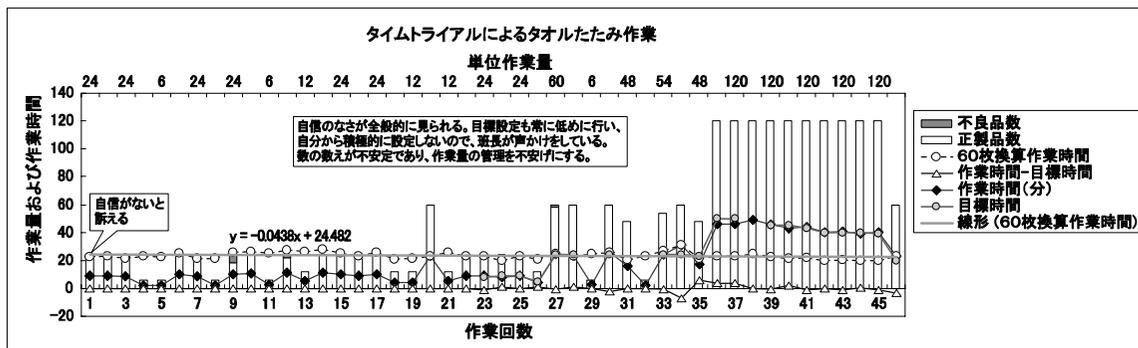
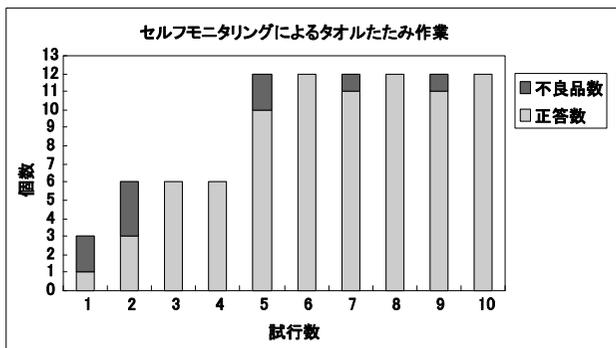
職業準備訓練終了間際には自分から主体的に就職に向けて努力したい、という発言が出るなど、積極的な態度が見られるようになった。また、時間管理についても一定の意識化が可能となった。

職業準備訓練終了後、事業所にて面接を行い、自宅から通い、職場実習を行う予定で話をすすめていたが、本人と家族の意見が合わず実習に至らなかった。現段階では、家族の意向を踏まえ、授産施設等の福祉施設への入所を検討している。

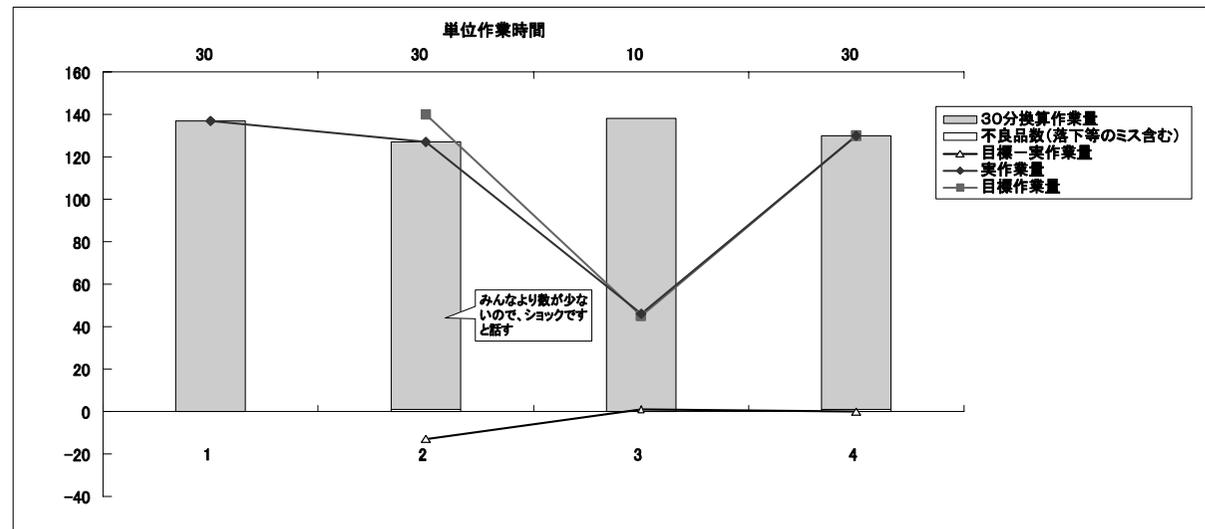
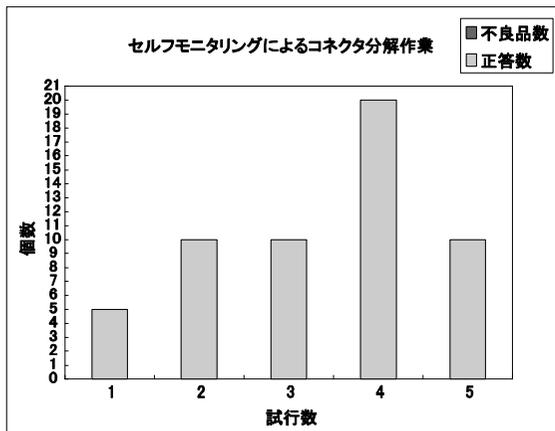
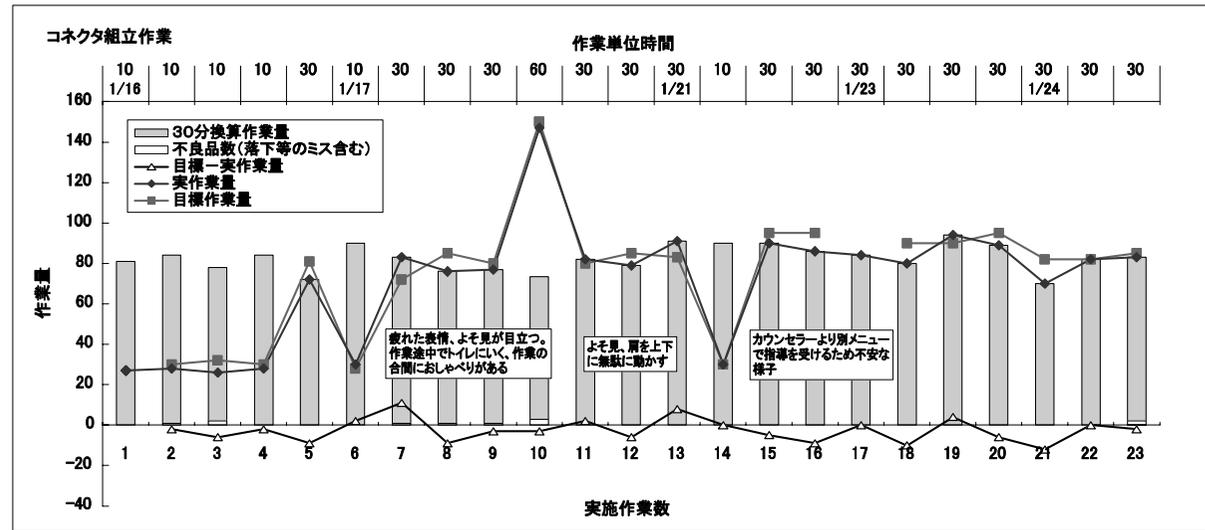
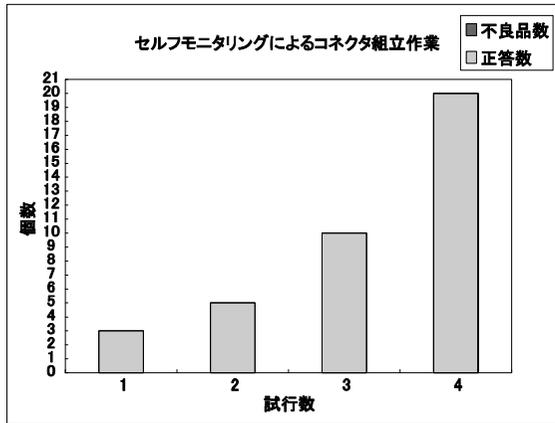
図Ⅱ-2-13. b-7さんのコネクタ組立・分解作業の作業状況



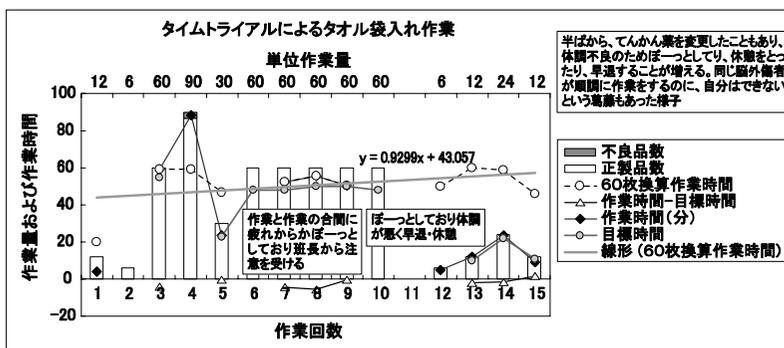
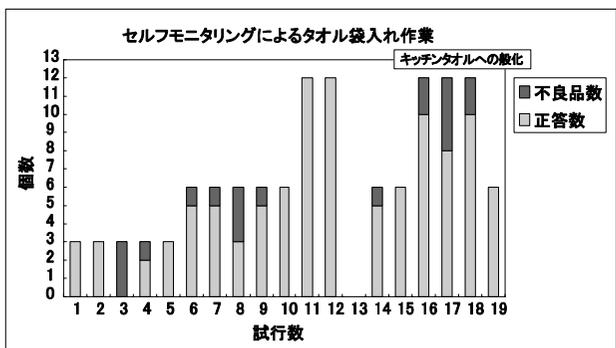
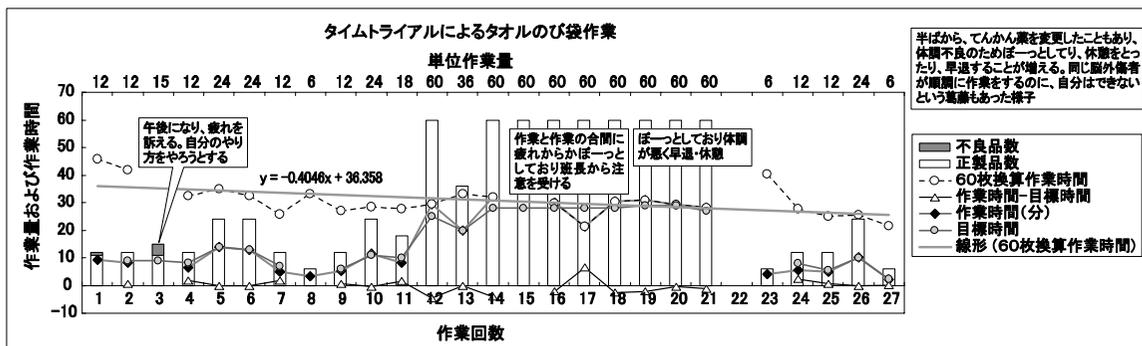
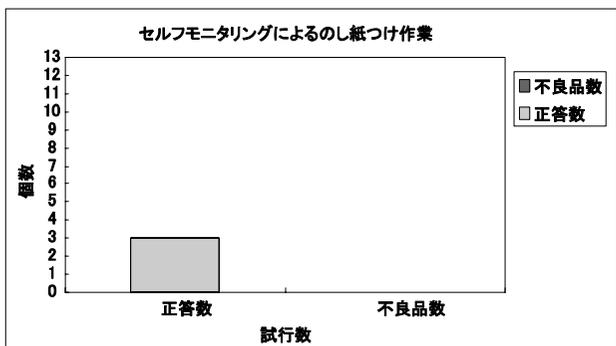
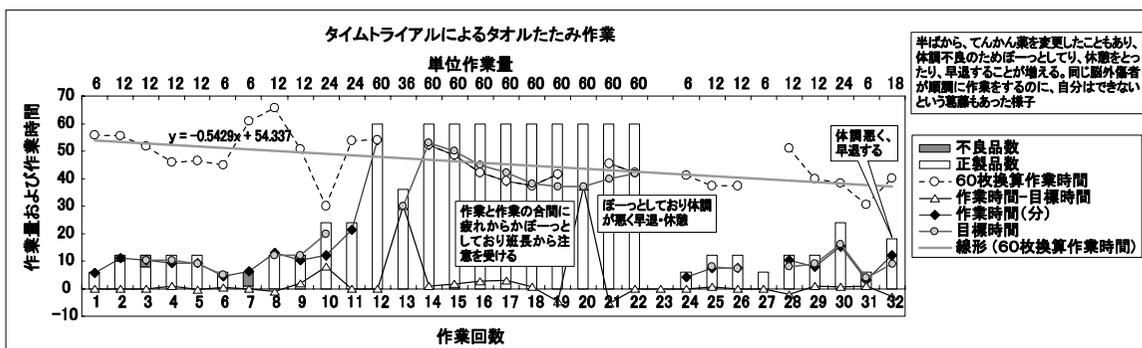
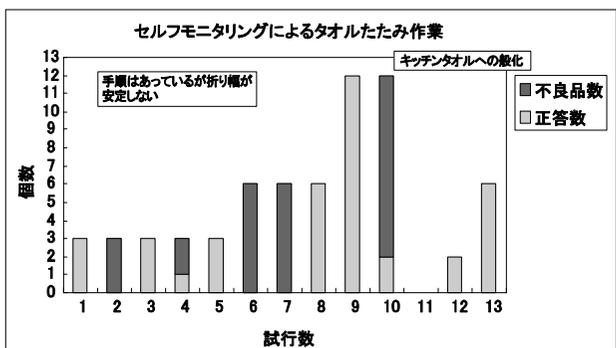
図Ⅱ-2-14. b-7さんのタオルたたみ・袋入れ・のし紙つけ作業の作業状況



図Ⅱ-2-15. b-8さんのコネクタ組立・分解作業の作業状況



図Ⅱ-2-16. b-8さんのタオルたたみ・袋入れ・のし紙つけ作業の作業状況



⑨ b-9

28歳の男性、知的障害B2、緘黙である。小学校4年次より特殊学級、中学校特殊学級卒業後、雑務で就職する。1年間働いたのち、離職し、その後すぐに他の会社に雑務で就職する。3年間働くが、景気が悪くなり、本人のできる仕事が無くなったため解雇となる。職業準備訓練受講後、木製ハンガーの穴あけ業務で就職し7年間勤めるが、本人のできる仕事が無くなったとのことで、解雇となる。

離職後、公共職業安定所で相談を行うが、本人単独では、緘黙のため相談がすすまず相談依頼を受けた。当面は雇用保険を受給しながら就職を目指し再度職業準備訓練を受けた上で就職を目指したいとの、家族の意向から職業準備訓練を受講することとした。併せて職業準備訓練期間中に地域生活支援センターの情報提供を行い、生活面での支援についても調整を行った。

このような状況から、①生活リズムの改善、②整容面の改善、③作業スピードの向上、④コミュニケーションカードを使用した意思表示、を指導目標とした。

訓練開始後、コネクタ作業、タオル作業ともに、作業ペースは訓練生の中で相対的にもっとも遅く、目標設定を行っても作業スピードの向上は図れなかった。

コミュニケーションカードの使用については、個別相談を重ね、使用の必要性を促すが一向に使用にいたらなかった。タオル作業に入ってから、コミュニケーションカードを用いる必要性のある場面が多く発生するため、計画的に使用を促した。カードが必要な場面でコミュニケーションカードを用いることでどうまく質問や報告ができることを実感させた後、使用するか否か自己選択を促した。その結果、自発的な使用が見られるようになり、それは続く他の作業においても継続された。

職業準備訓練終了後、数社面接に行くが、寡黙であることから就職に至らなかった。雇用保険受給期間が終了することから、地域生活支援センターへ相談し、地域の作業所へ通所しながら継続して就職活動をする事となった。現在は、本人自身は楽しく作業所へ通所している。

⑩ b-10

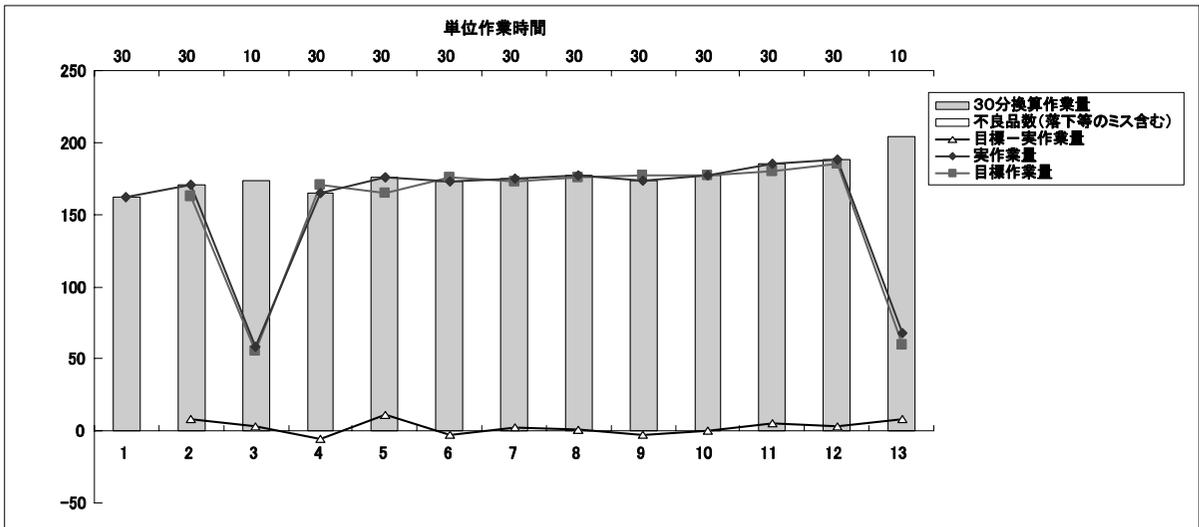
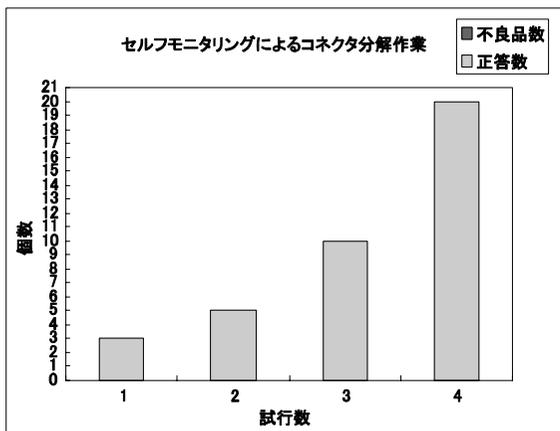
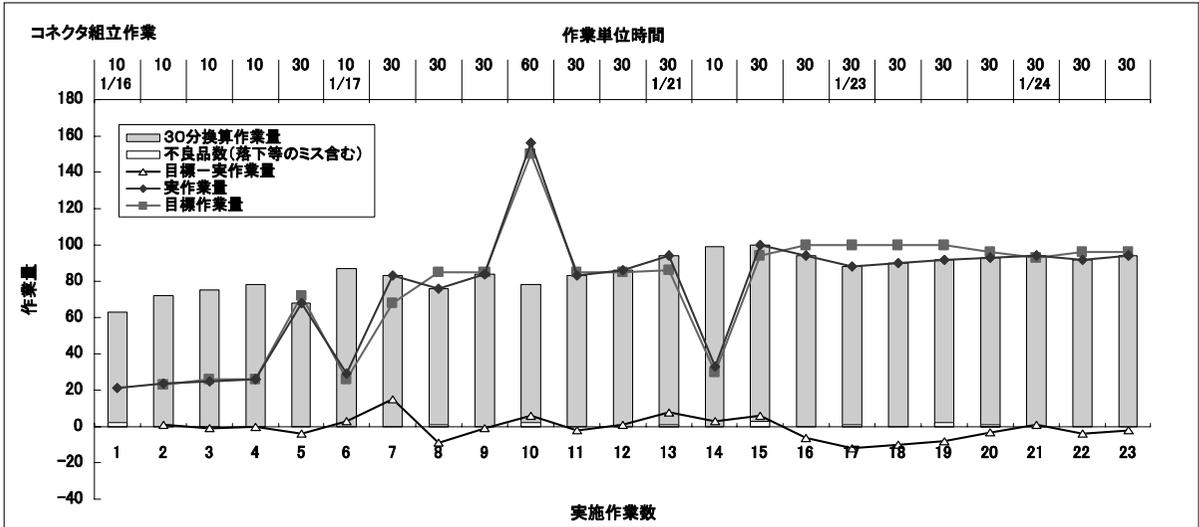
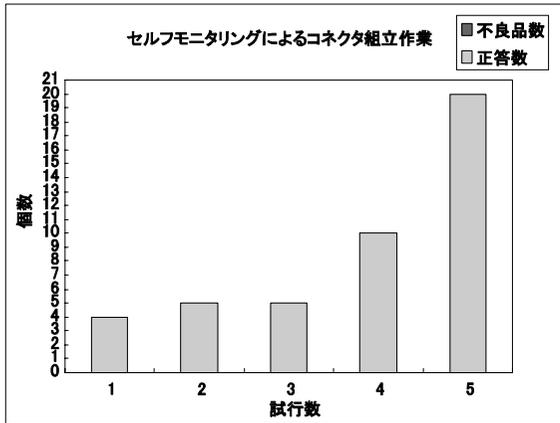
33歳、女性、知的障害B1。小中学校共に普通学級を卒業後、服飾専門学校に入学。縫製会社に就職が決まったため、途中で退学する。約10年間働くが、倒産により離職する。再就職を目指すに当たり、公共職業安定所のすすめもあり、当センターで来所相談の上、療育手帳を取得した。その後、縫製会社に再就職し、約5年間働くが、会社の業務縮小のため、解雇となる。評価担当カウンセラーと相談の上、求職活動が長引く可能性があることから職業準備訓練を受講することとなった。

作業に関しては、全般的に熱心に取り組み、班長から注意を受けても「はい」と素直に答え、めげずに取り組むことができていた。コネクタ作業時は特に問題はなかったが、タオル作業のタイムトライアル訓練になると60本を正確に数えられないため、個別指導を行った。その結果、徐々に正確に60、120と数えられるようになり、自信をもって作業に取り組むことができるようになった。

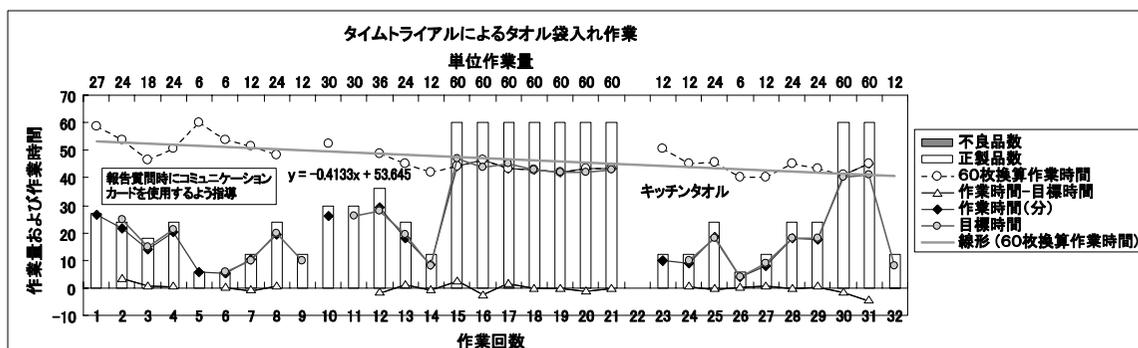
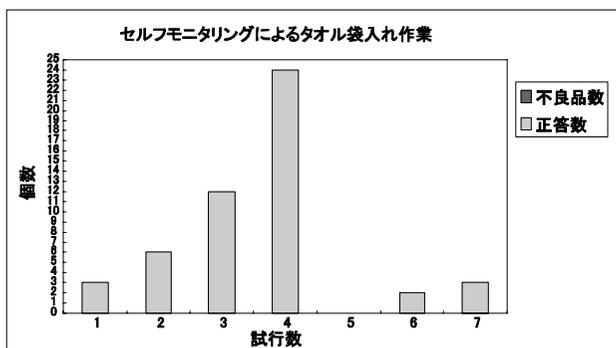
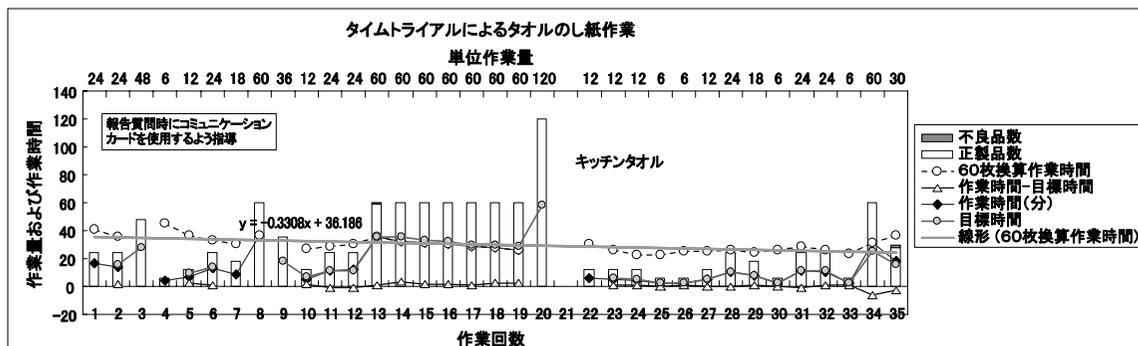
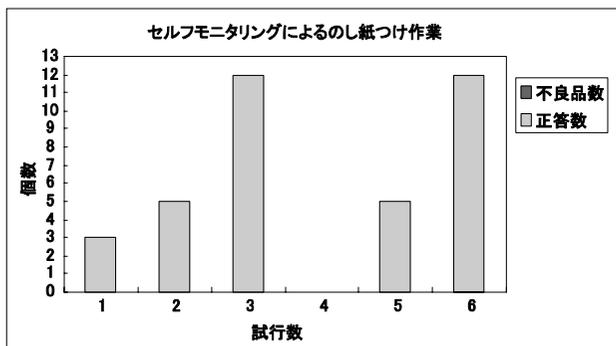
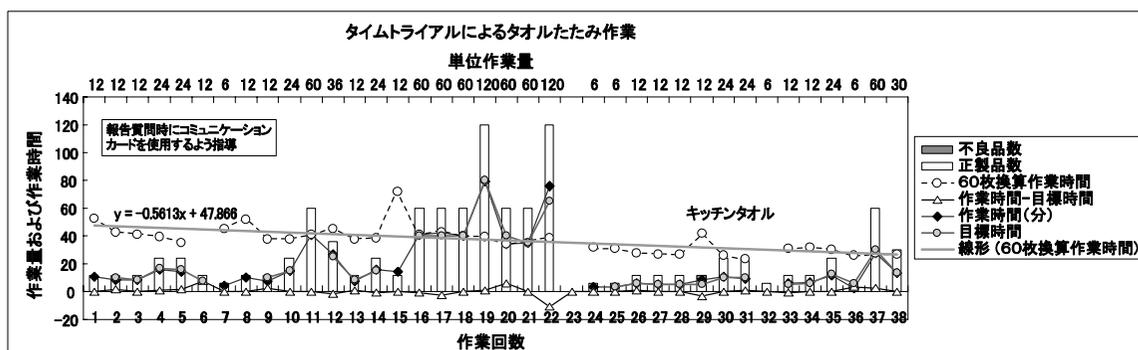
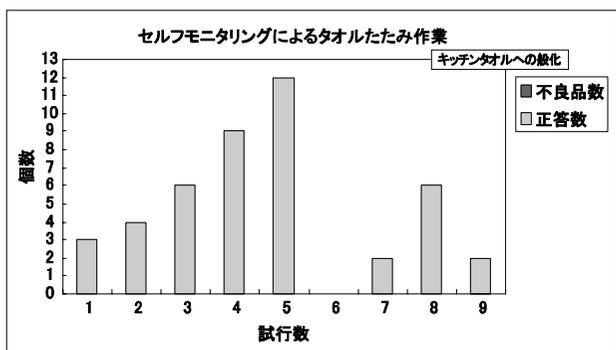
数処理能力の問題以外は、訓練開始以前から安定した作業への取り組みが可能であり、セルフマネージメント訓練の中では特に大きな課題は見られなかった。

職業準備訓練終了後、リネン関係のS社にて職務試行法を実施し、事業所からは採用してもよい、と返答をもらうものの、父親から知り合いの事業所で就職をお願いしていきたい、とのことで辞退し、現在、その事業所にて働いている。

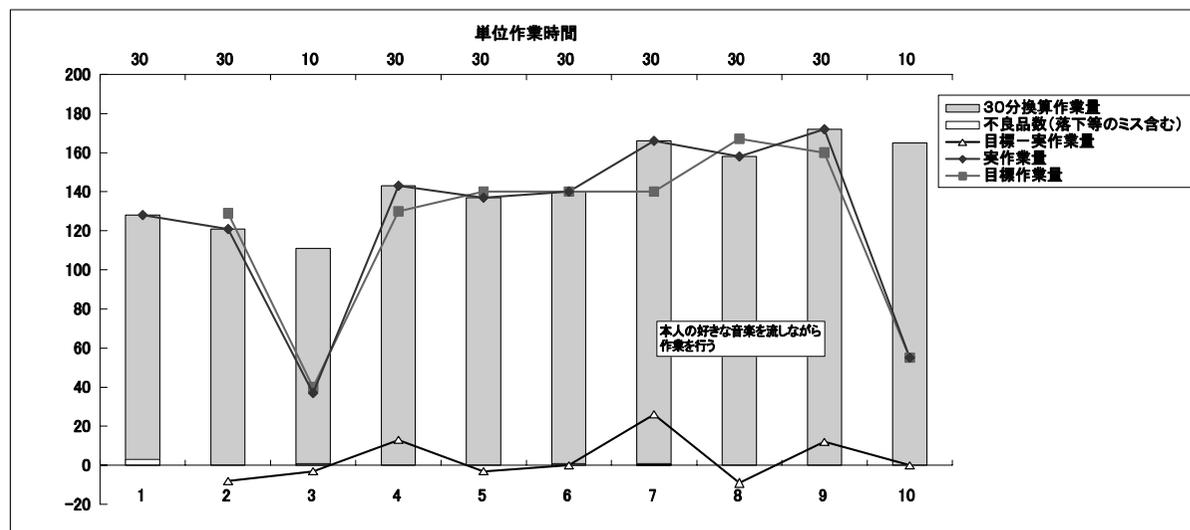
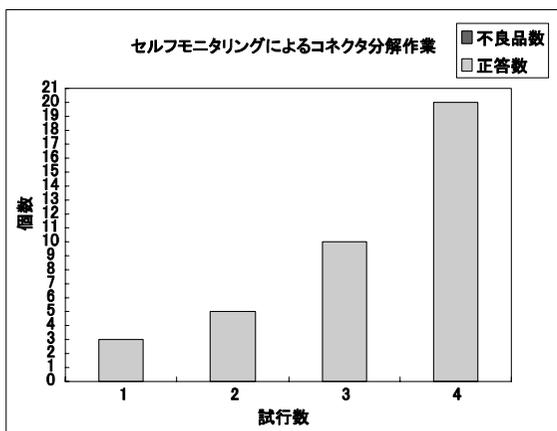
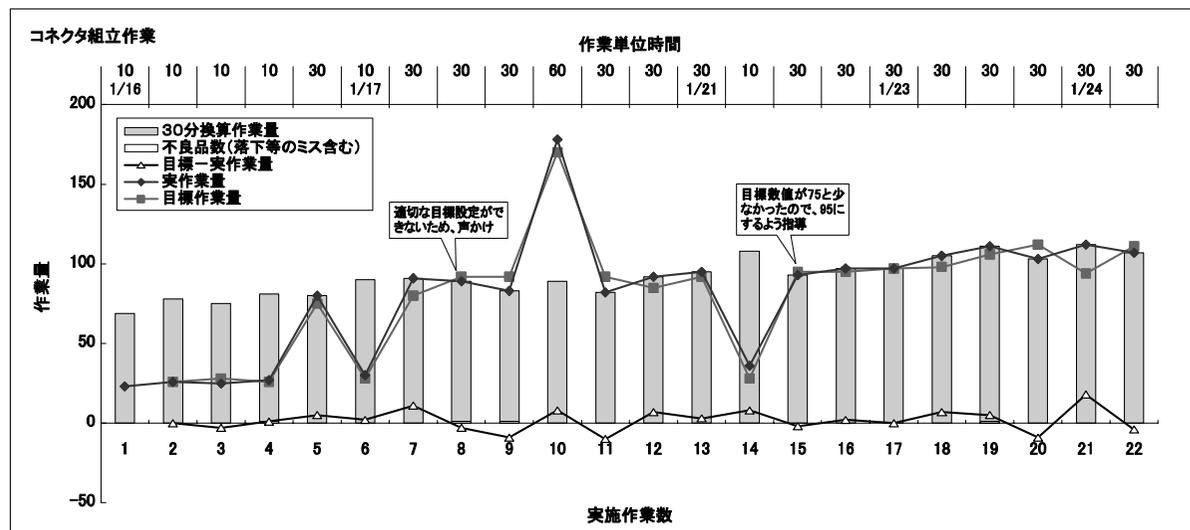
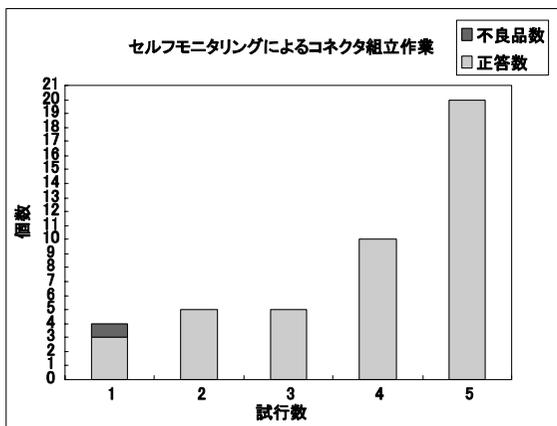
図Ⅱ-2-17. b-9さんのコネクタ組立・分解作業の作業状況



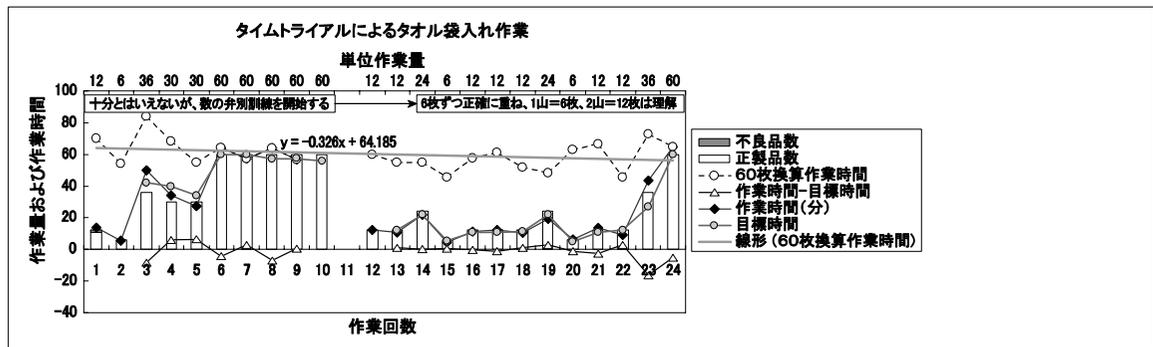
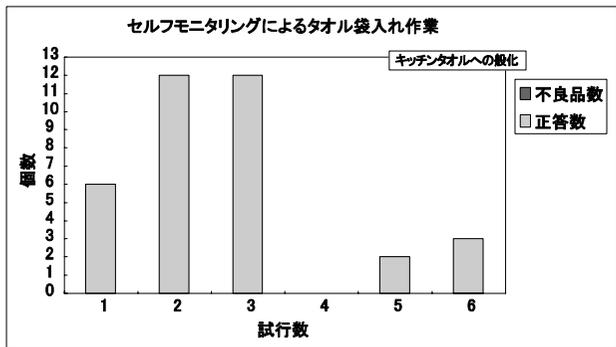
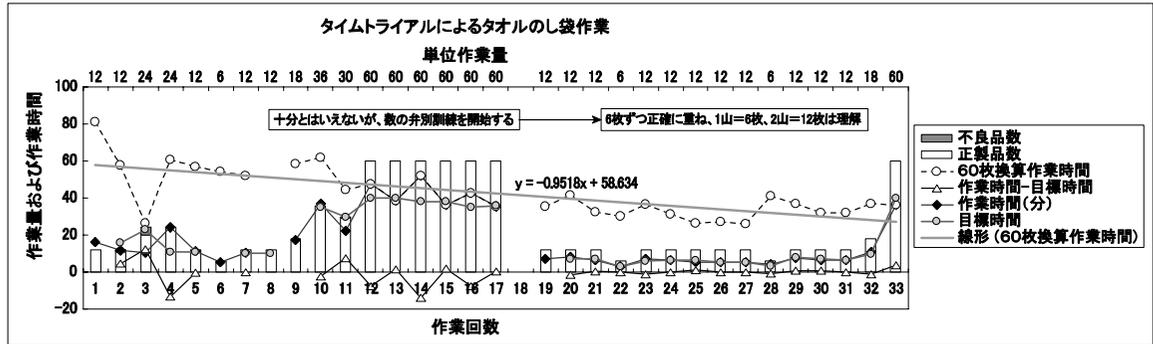
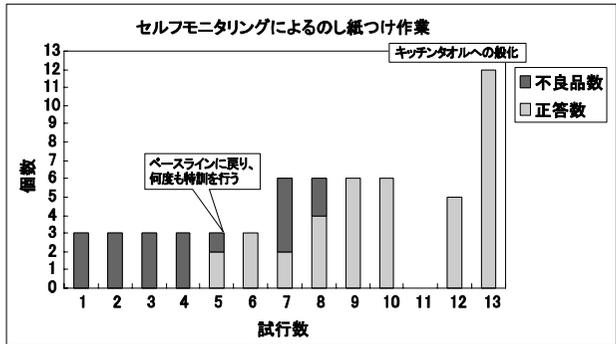
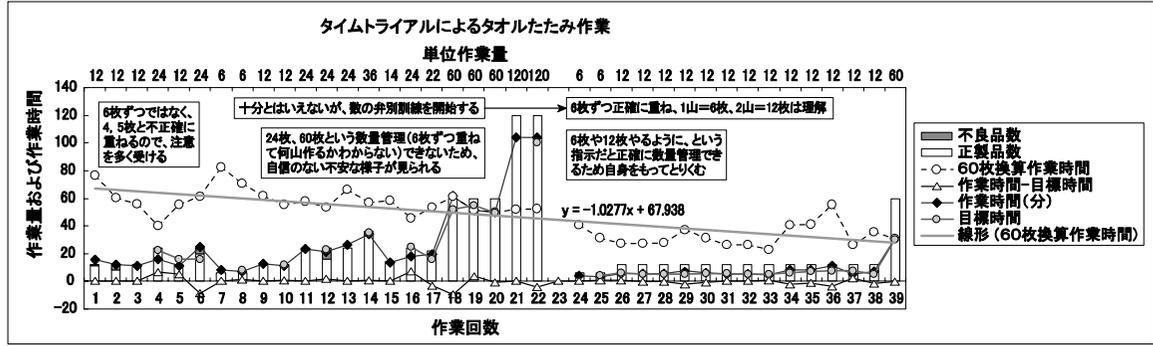
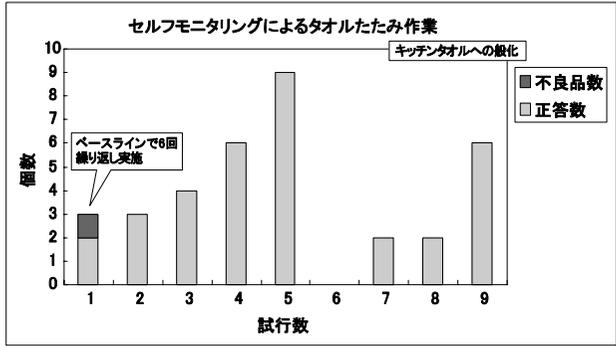
図Ⅱ-2-18. b-9さんのタオルたたみ・袋入れ・のし紙つけ作業の作業状況



図Ⅱ-2-19. b-10さんのコネクタ組立・分解作業の作業状況



図Ⅱ-2-20. b-10さんのタオルたたみ・袋入れ・のし紙つけ作業の作業状況



⑪ b-11

33歳の男性、精神保健福祉手帳3級。総合リハビリテーションセンターの紹介で来所する。大学卒業後、9年間中学校で体育教師として働いていたが、趣味のカーレース中に事故を起こしたが、一命を取り留める。

障害状況としては、右聴力の軽い障害、右上肢・体幹の軽度失調、軽度知的低下、記銘力障害、注意力障害、けいれん発作。記憶力は聴覚言語系も視覚認知系も障害レベルで、新たな学習に困難があること、一度に多数の指示・情報を出してしまうと混乱して全く想起できなくなる、即時記銘時に、思いこみから間違えて記憶してしまうことがある。また、注意の持続、作業耐性も半日程度と指摘されている。

本人・家族から、就職もしくは福祉的就労の可能性を検討するために、職業準備訓練受講の強い希望があり職業準備訓練を受講することとなった。

本人の希望もあり、片道2時間以上かけて、自宅から電車で職業準備訓練まで通うこととなった。コネクタ作業、タオル作業共に集中して取り組むことができず、よそ見が頻発していた。タオル作業に入ってから通勤の疲れもあいまって、目標達成というプレッシャーからか体調を崩し始めた。そのため、遅刻・作業を中断して休憩をとることが増えてしまった。この状態がその後の訓練も一貫して続いた。

訓練半ばより、精神的なプレッシャーへの弱さ等から、一般就労は厳しいと考えられ、家族とも相談の上、地域の作業所への通所を開始した。

⑫ b-12

28歳の男性、障害者福祉手帳3級。大学在学中、自動車事故に遭う。2ヶ月間の入院後、構音障害、左片麻痺、視力障害が残るが、歩行など日常生活上は可能との判断から退院し、以後、通院によるリハビリを続けた。この間、大学に復学するものの、受障後2年半かかっても単位取得が難しく退学する。退学後、時折、野球コーチのボランティアをして過ごすのみであり、今後の相談をするために母親と共にセンターに来所した。

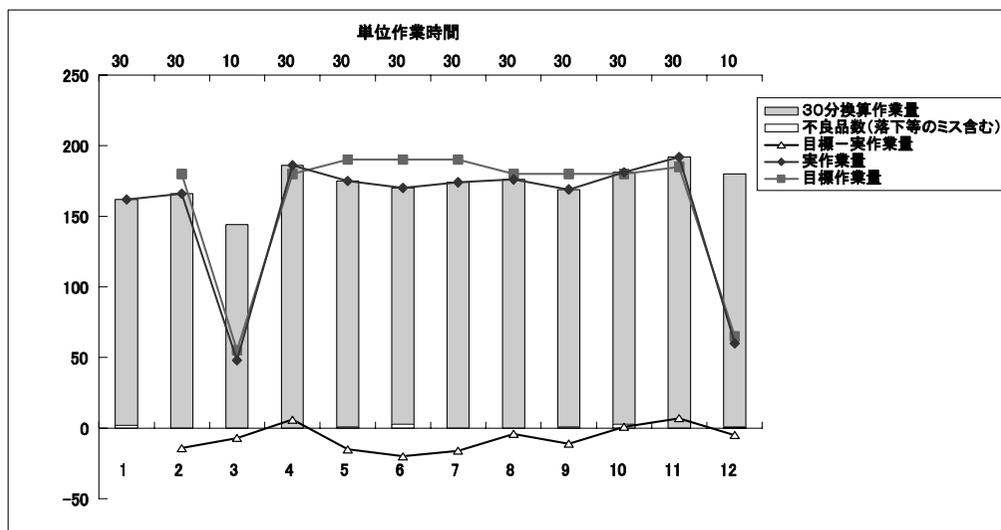
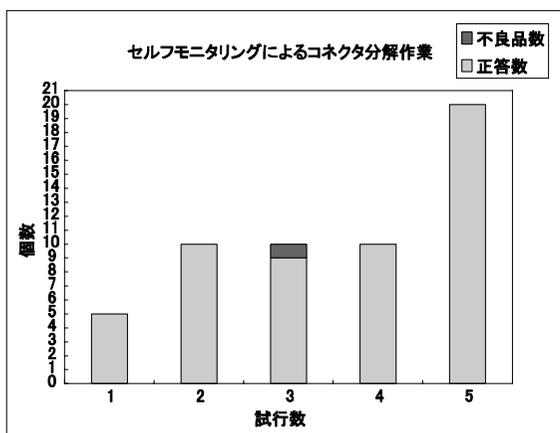
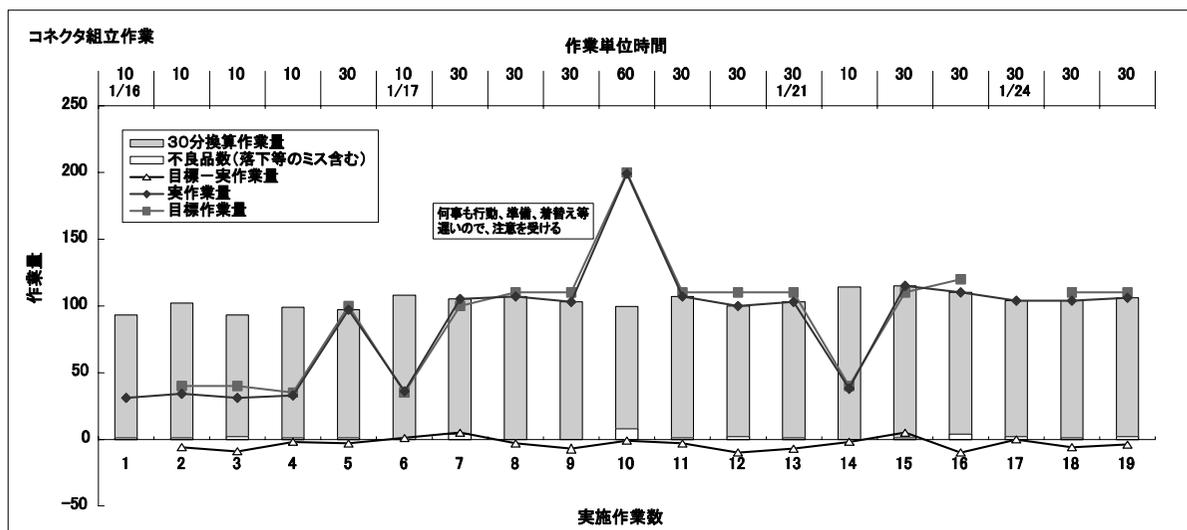
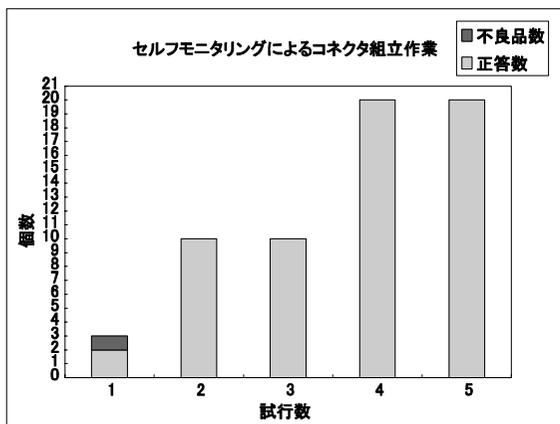
復視及び視野狭窄があり、左片麻痺が見られるが日常生活上支障はなかった。知的には障害は見られないが、聴覚記憶において、記銘・保持・再生全てに障害が見られた。また、取りかかりが全般的に遅く、発動性の低下が顕著であり、自責傾向が強く、まったく自分に自信を持ってない状況であった。

これらの状況から、①生活リズムの改善、②自信回復を指導目標として職業準備訓練を受講することとなった。また、注意力、記憶力に障害があることから、メモリーノートの活用について個別指導を行うこととした。

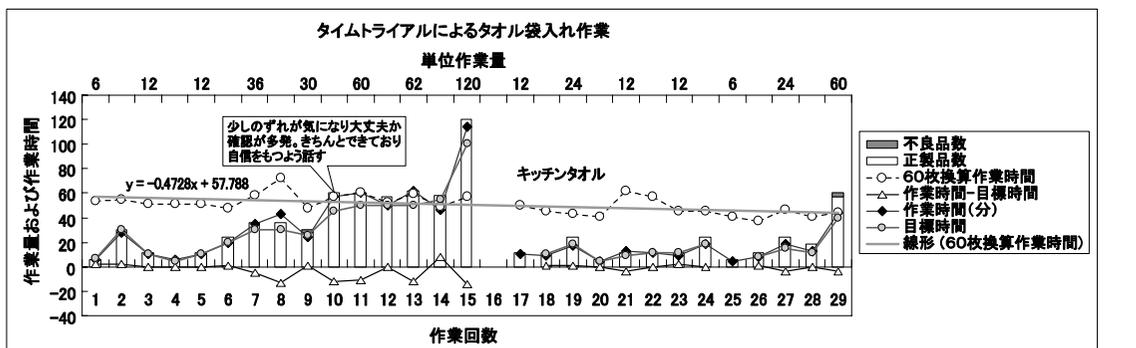
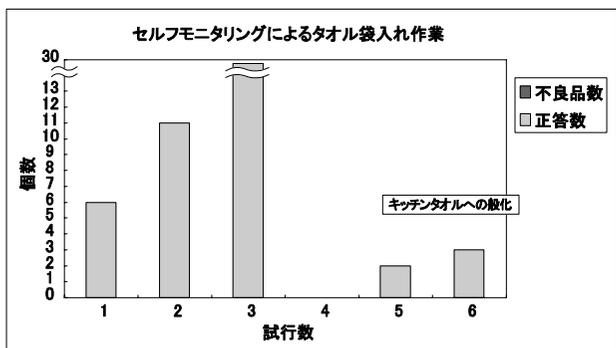
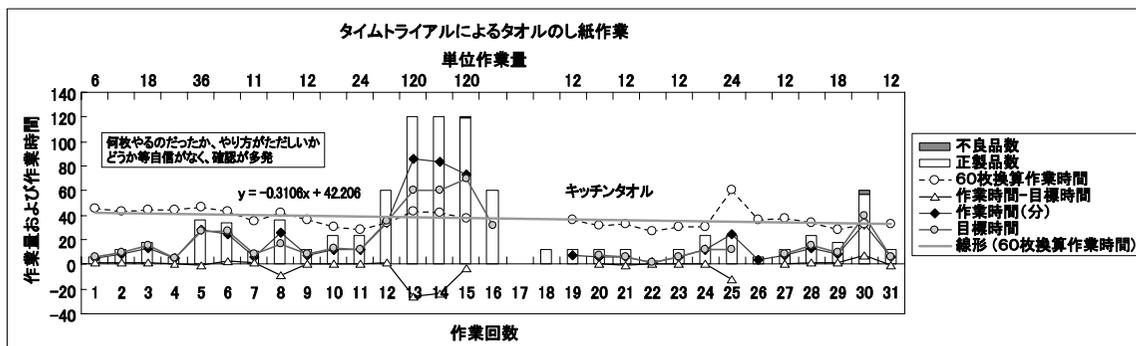
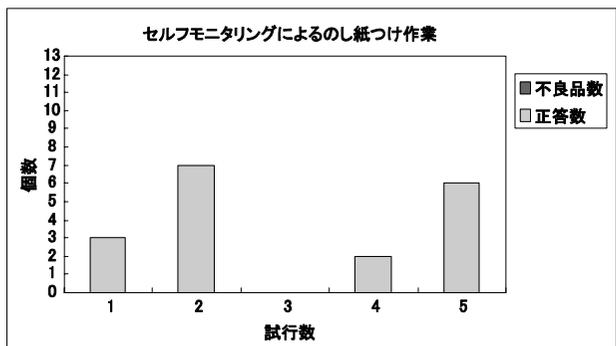
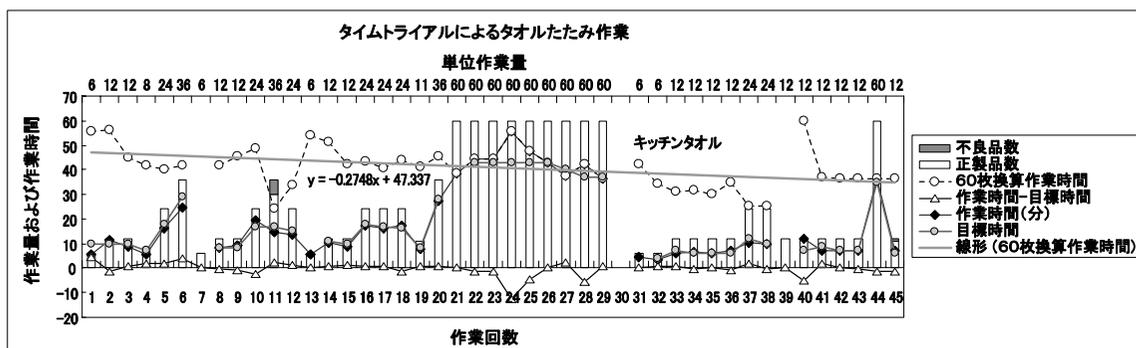
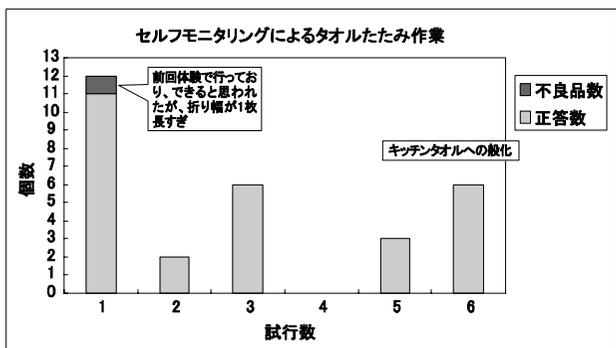
訓練開始後、コネクタ作業、タオル作業共に、他の訓練生に比べ、もっともスムーズに順調に作業をこなした。適切な目標設定を行うこともでき、主体的に取り組むことができていた。メモリーノートの使用方法は、早い段階で理解したものの、その活用の必要性について、必要とする場面設定を職業準備訓練内で十分にできなかつたこともあり、自発的な使用には至らなかつた。

訓練終了後、事務職として就職を目指したい、との希望から、OA講習を受講することとなった。OA講習のカリキュラムによる技能習得も順調であった。OA講習終了後、身体障害者手帳の取得も検討し、再度医者診断を受けたが取得は難しかった。現在、求職活動中である。

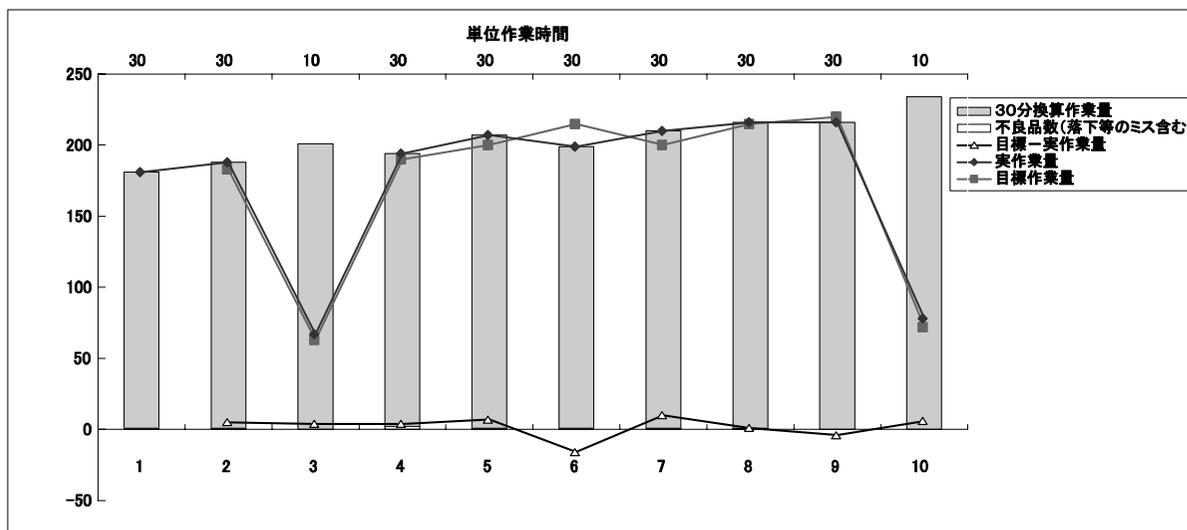
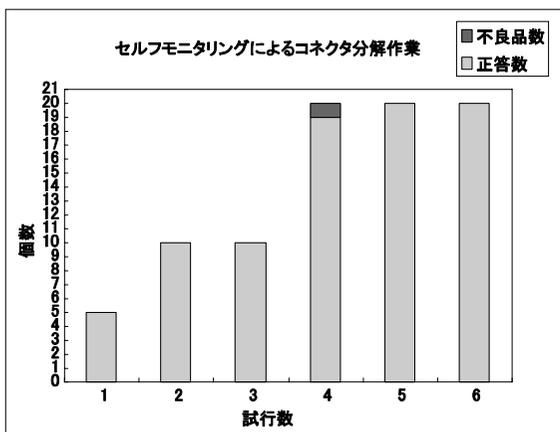
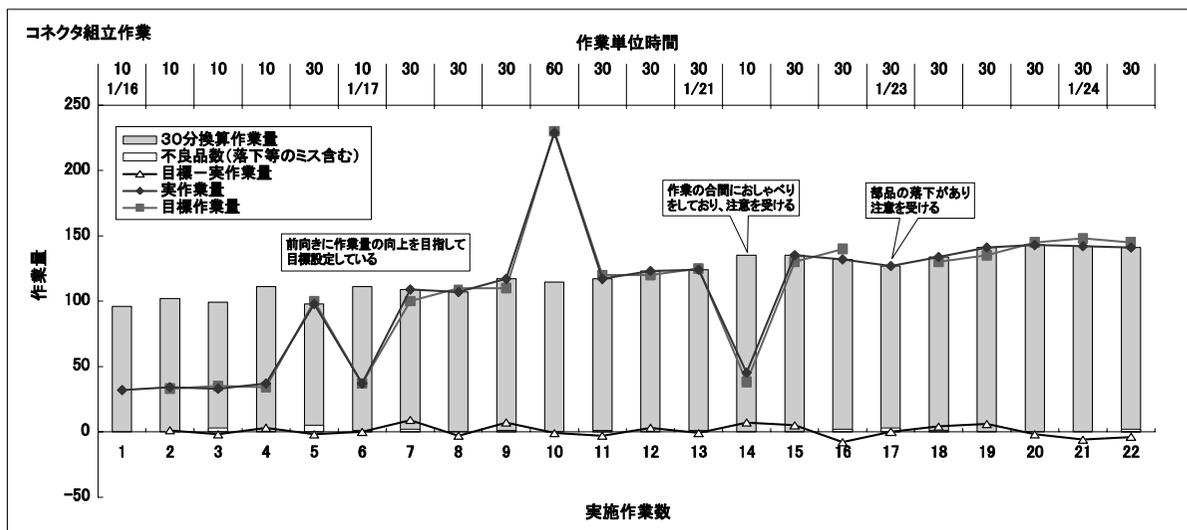
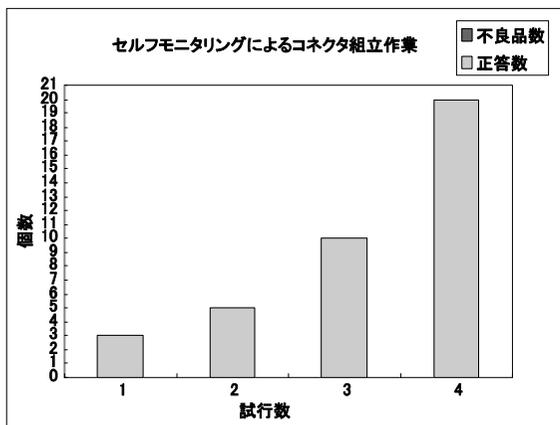
図Ⅱ-2-21. b-11さんのコネクタ組立・分解作業の作業状況



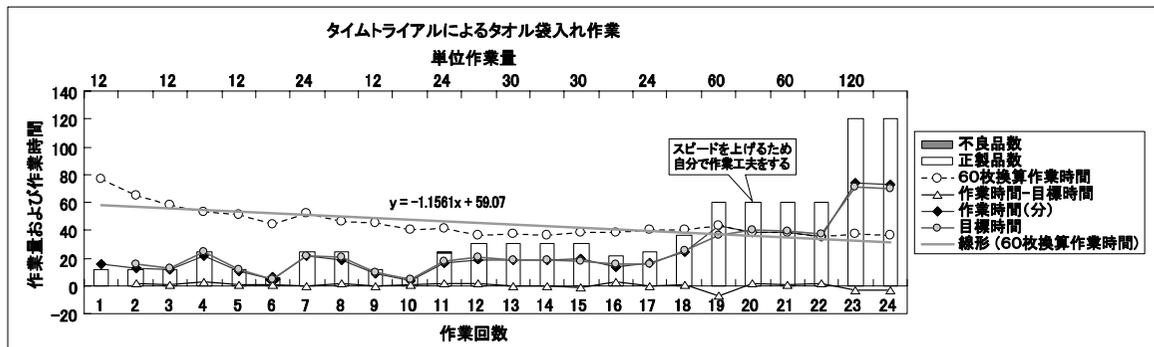
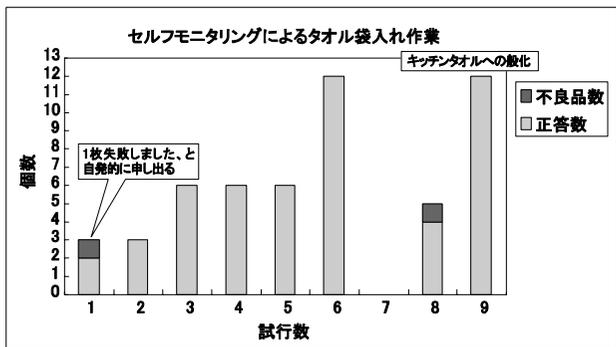
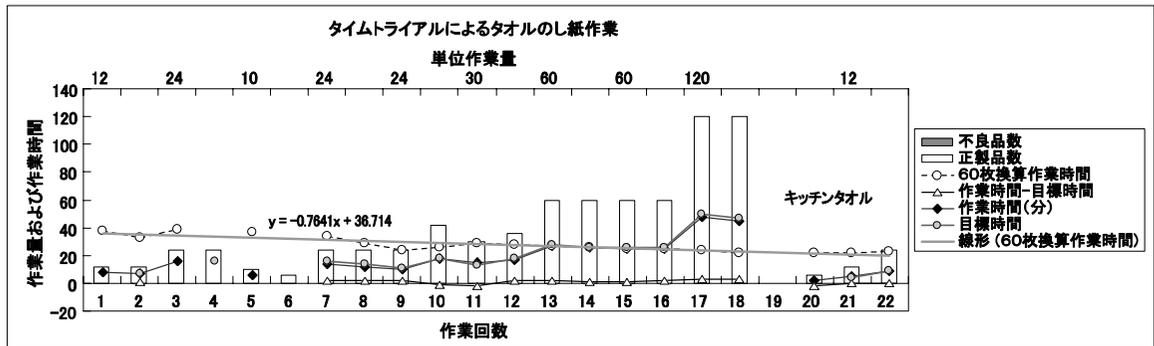
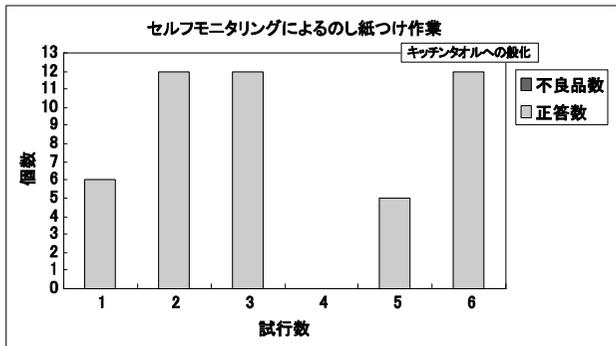
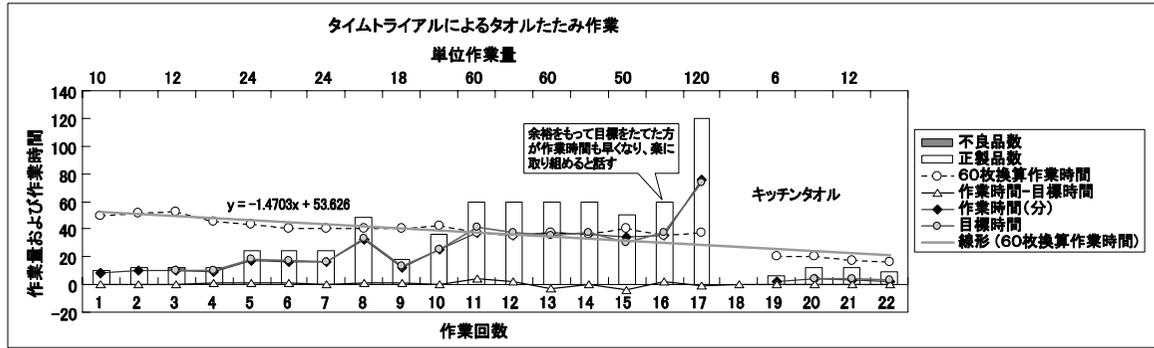
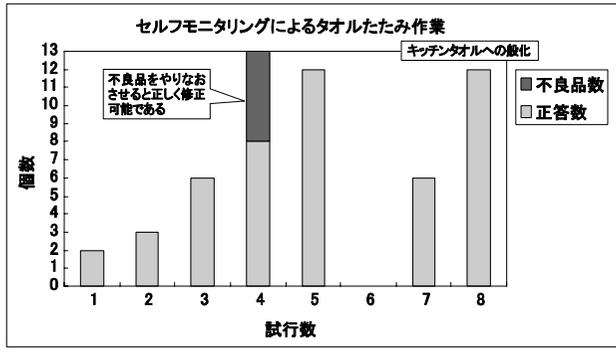
図Ⅱ-2-22. b-11さんのタオルたたみ・袋入れ・のし紙つけ作業の作業状況



図Ⅱ-2-23. b-12さんのコネクタ組立・分解作業の作業状況



図Ⅱ-2-24. b-12さんのタオルたたみ・袋入れ・のし紙つけ作業の作業状況



⑬ b-13

35歳の女性、知的障害A2。現在は、夫と二人暮らしだが、実母が近くに住んでいる。中学校特殊学級卒業後、縫製の会社に就職するが結婚し、居住地変更のため離職する。結婚後、縫製の会社に再就職し3年間働くが、仕事内容が合わないため離職する。その後、他の縫製会社に5年間勤務するが業務縮小のため離職する。さらに6年間、清掃の会社で働くが業務縮小のため、離職する。やむなく在宅となるが、姑から高圧的に言われると、意識が朦朧となり失神する意識障害発作を現れるようになり、受診したところ脳波の異常がありてんかんと診断される。

求職活動を継続するが、うまくいかず、療育手帳を取得する。職業評価後、求職期間が長期化してきたことため、労働習慣の維持を目的に職業準備訓練を受講することとなった。

訓練開始当初は、自分より年下の訓練生が騒いでいることに、露骨にいやな顔をしていた。他の訓練生にはやや見下したような態度をとる反面、工場長や班長には甘えた態度をとっていた。時々、感情的になり、個別相談場面ではかなり感情的に他の訓練生の悪口を言うこともあった。

コネクタ作業タイムトライアル時には、他の訓練生より作業量の少ないことに、悔しいという態度をはっきりと示していた。タオル作業時には、さらにそれは大きくなったため、自分のたてた目標を達成するこよ、ミス無く取り組むことが重要である、と指導を受け、徐々に他の訓練生を気にしてはいるものの、自分で感情面をコントロールして作業に取り組むことができるようになった。

このセルフマネジメント訓練による効果は、次の作業に移っても持続し、自分のペースで取り組むことができるようになった。しかし、対人関係面に関しては、変化が無く、特にある女性訓練生に対しては、露骨にいやだ、という態度を示し続けた。

訓練終盤になり、就職への焦りや不安訴えるようになった。

職業準備訓練終了後、職場実習を行うが、精神的な不安定さ等から不採用となった。現在は、作業所に通所している。

⑭ b-14

22歳の女性、知的障害B2。小学校4年より特殊学級、中学校特殊学級卒業後、養護学校高等部へ進学する。卒業後、職業訓練校へ進学・卒業した後、通勤寮に入寮し、肉の加工、ラッピング業務に従事した。当初は、事業所の評価も高かったが、働き初めて1年半経過した頃から、仕事に対して投げやりな態度になり会社内の人間関係も悪くな自己退職となった。その後公共職業安定所の紹介で採用となるが、初日から勤務することが全くできず、離職している。通勤寮にいるためには、働かなくてはならないと理解しているが、なかなか働くことができないため、職業準備訓練を受けた上で就職にむけて頑張らせたい、と希望から職業準備訓練を受講することとなった。

生活リズムの改善のために、職業準備訓練開始前に、通勤寮の関係している授産施設に2週間ほどボランティアとして通うことを職業準備訓練への入社条件としたところ、当初予定の2週間のうち半分程度は遅刻しつつも行くことができ、作業を行うことができた。

そのため、職業準備訓練実施にあたり、①休まず、遅刻等せずに職業準備訓練へ通うこと、②感情的にならないこと、指導目標とした。

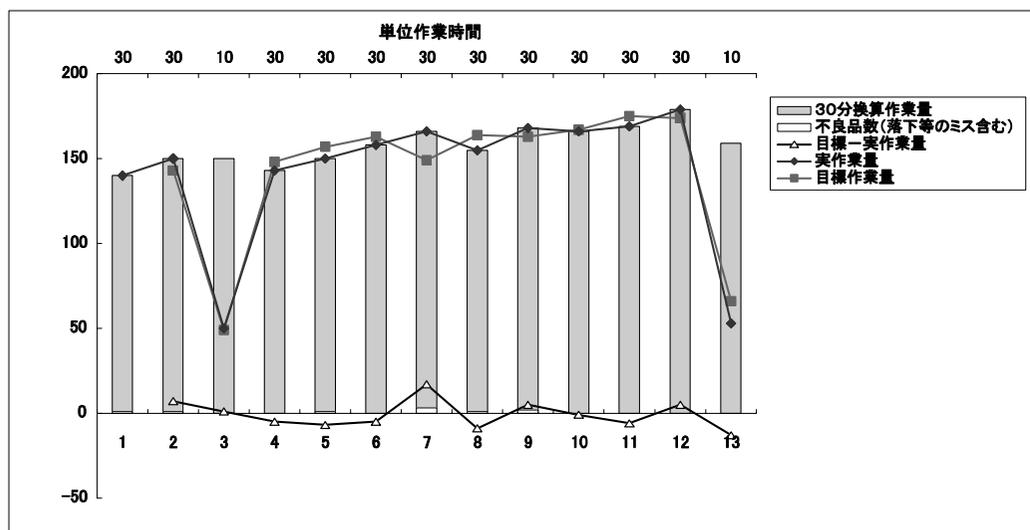
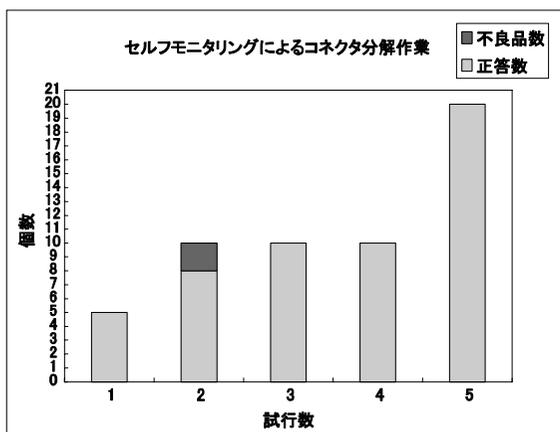
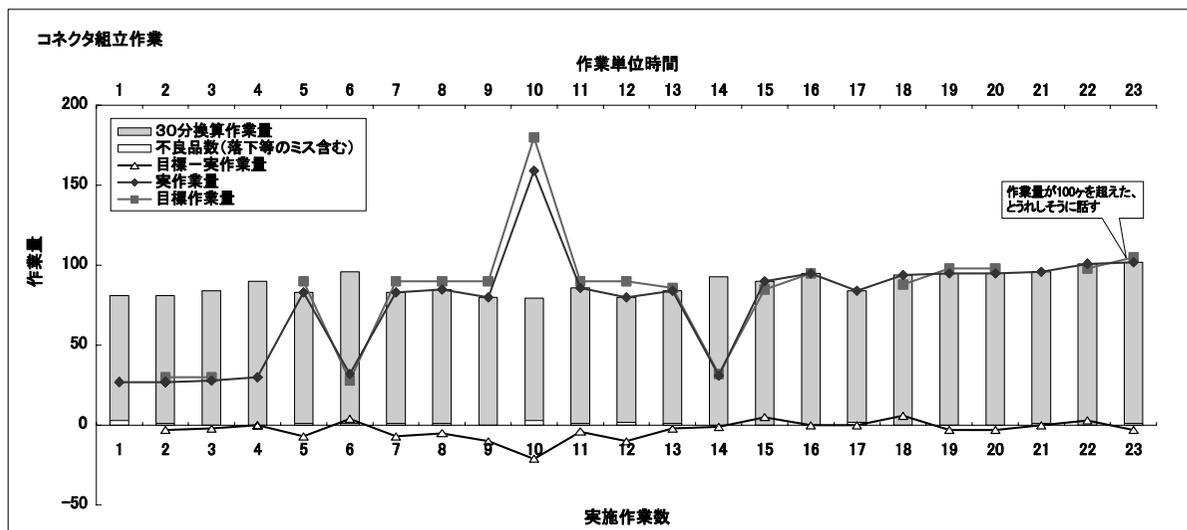
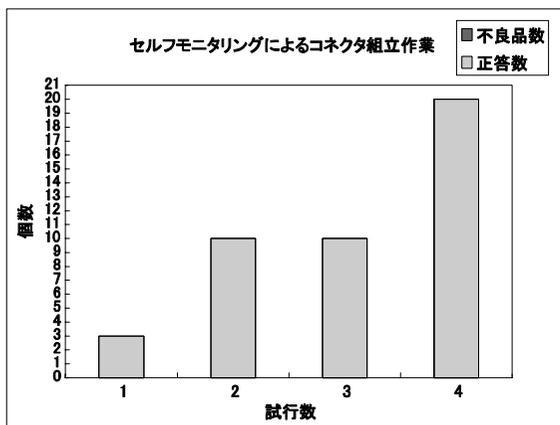
訓練開始早々に、体調不良により遅刻・欠勤が続き、自発的な出勤はできなかった。しかし、出勤できた時には作業理解もスムーズであり、訓練生の中では相対的に高い作業水準を維持し、適切な目標設定をシタイムトライアル作業を行うことができていた。作業に入ってしまうと、適切な目標設定を行い、安定して作業に取り組むことができていたが、作業以外の場面で、精神的な安定等は見られなかった。

本人の課題点である、安定した継続勤務は一貫してできておらず、通勤寮内で何らかの対人関係面でトラブルがあると安易に休んだり、遅刻することが続いた。また、タオル作業終了後、新しい作業に入った時、不良品をたくさん出してしまい、ショックを受け翌日に休んでしまうこともあった。

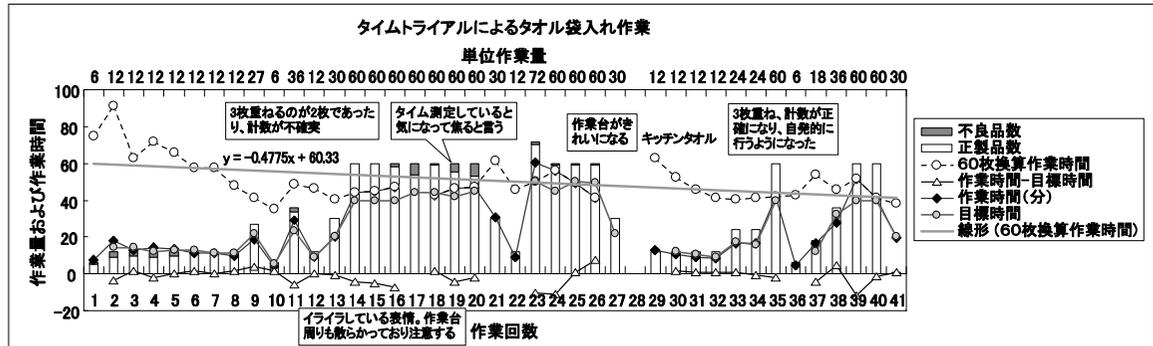
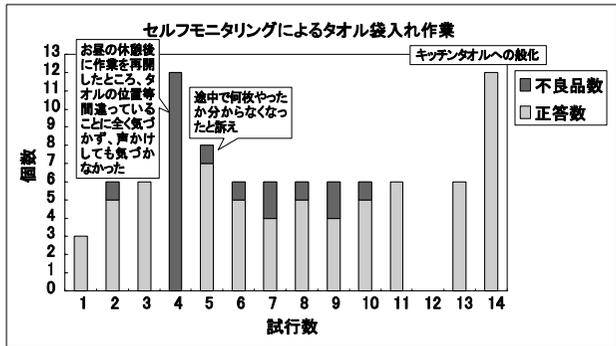
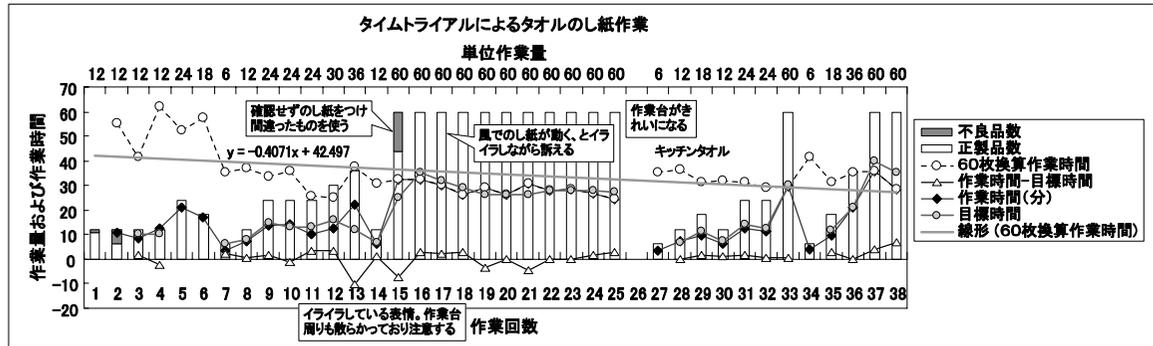
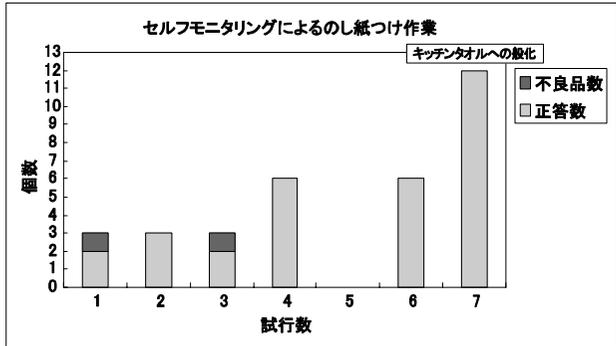
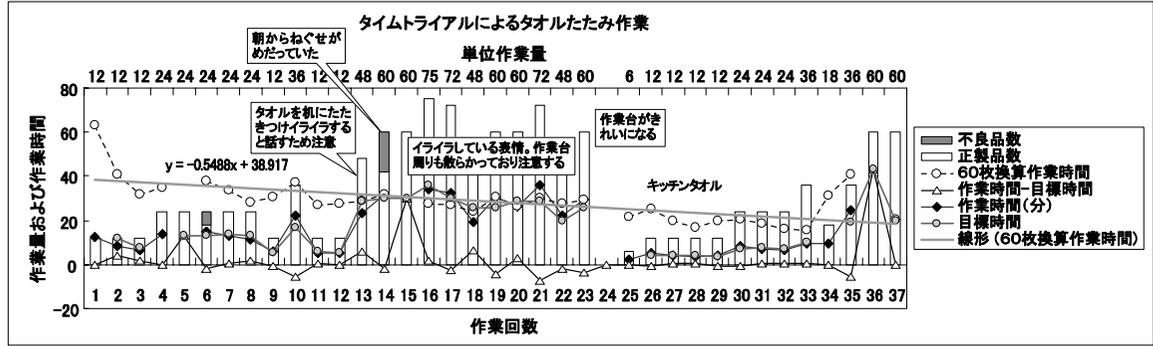
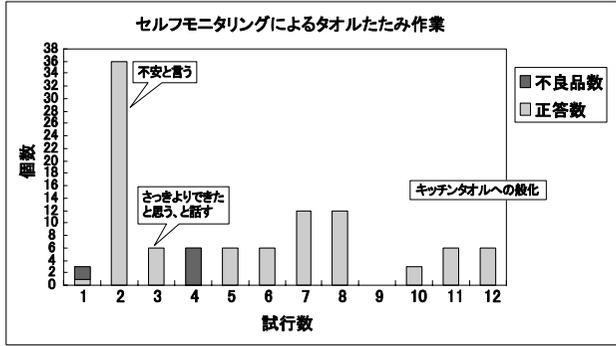
職業準備訓練終了後、本人、通勤寮と相談の上、居住環境も変え通勤寮から離れた職業センター職業準備訓練を受けることにより、課題点の改善を図ることができたら就職を考えることを最後のチャンスとして提案し、受講することとなった。

その結果、何とか継続勤務は出きるようになったものの課題の改善に至らず、周囲の大幅な配慮が必要であること、仮に就職しても短期間で離職が予想されることから、授産施設等においてより長期的に精神面での安定を図った上で、就職を目指すこととなった。

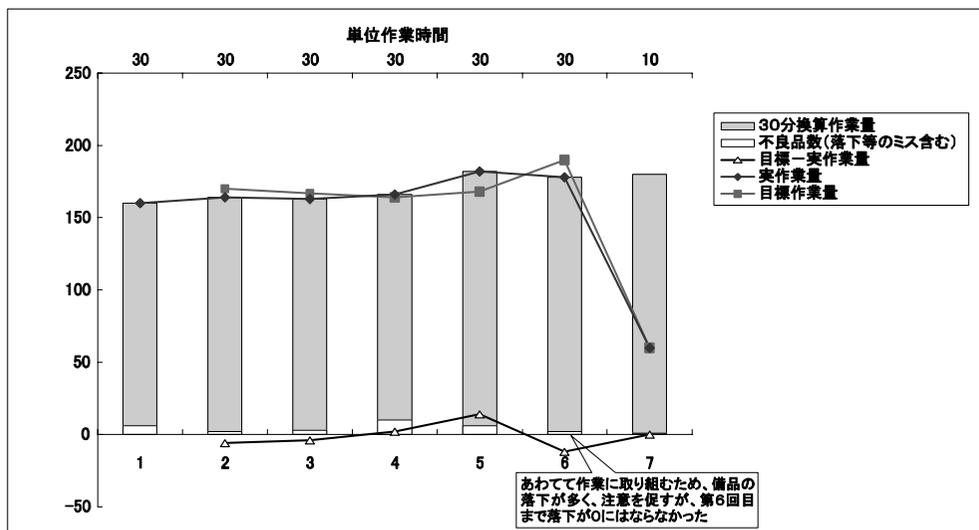
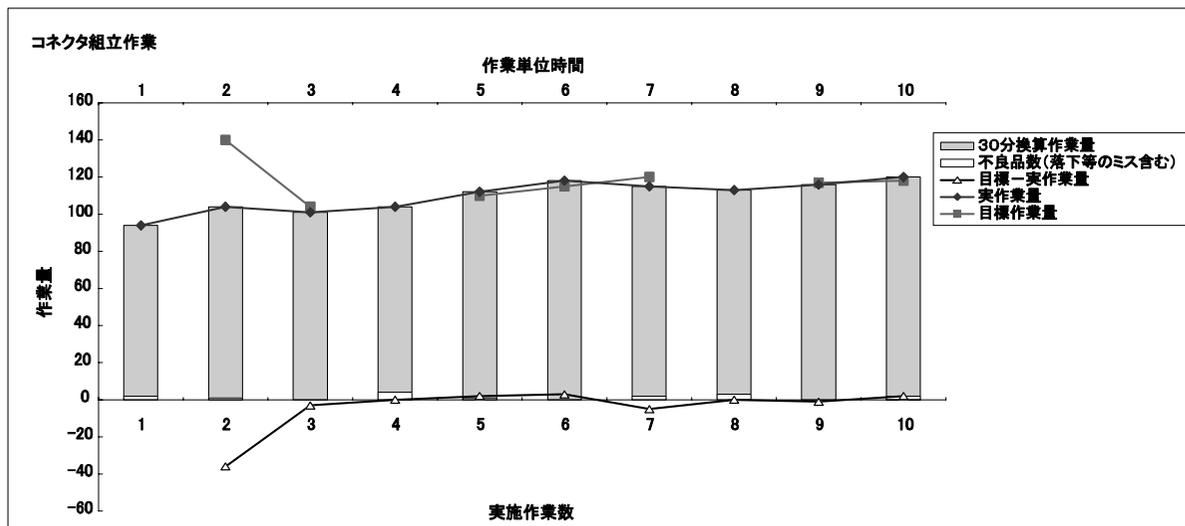
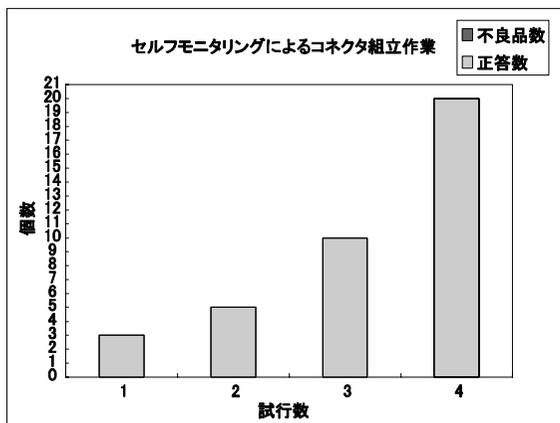
図Ⅱ-2-25. b-13さんのコネクタ組立・分解作業の作業状況



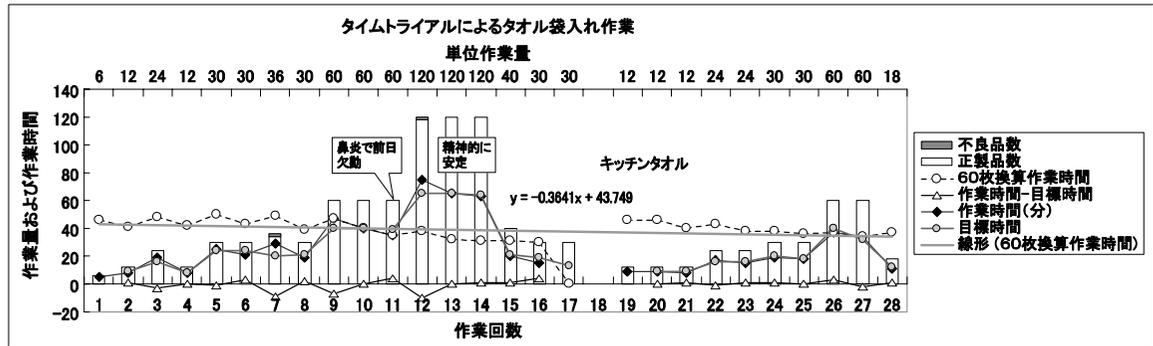
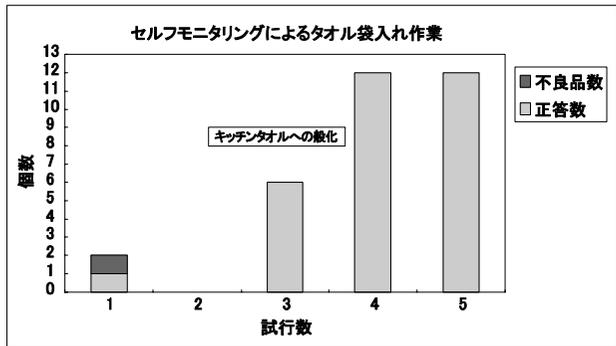
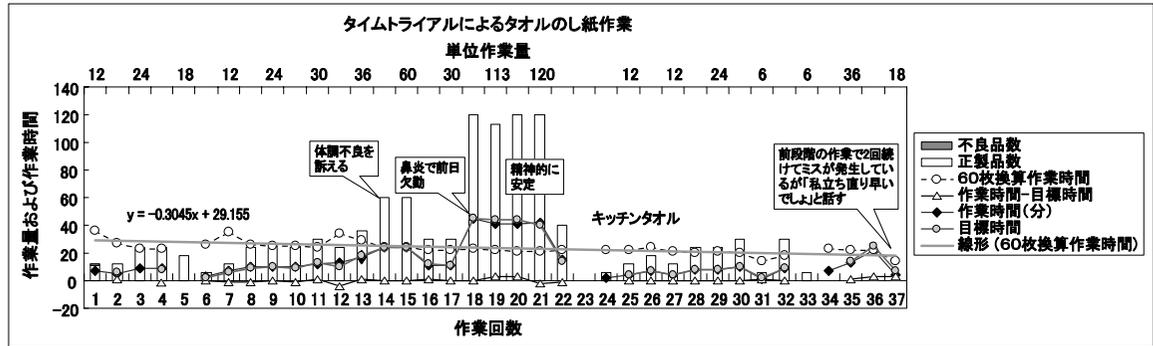
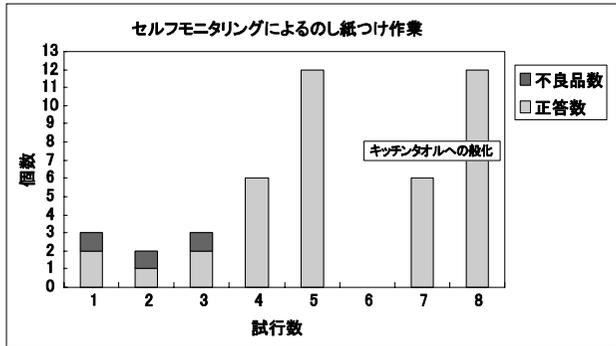
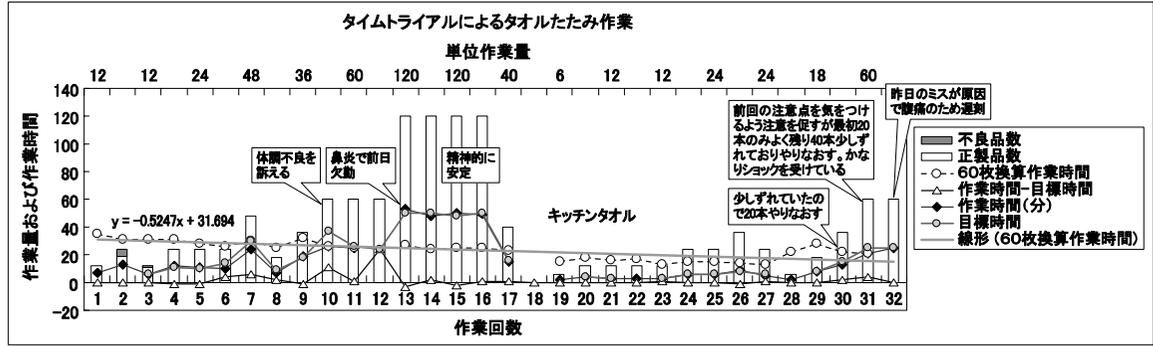
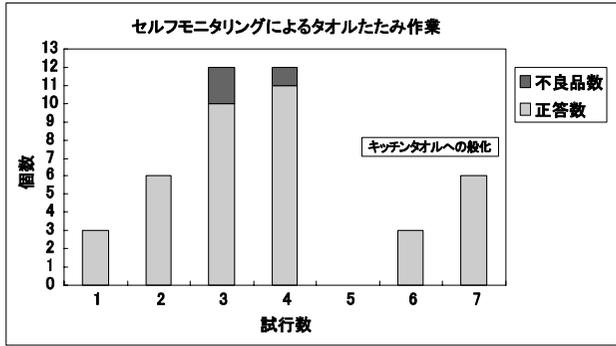
図Ⅱ-2-26. b-13さんのタオルたたみ・袋入れ・のし紙つけ作業の作業状況



図Ⅱ-2-27. b-14さんのコネクタ組立・分解作業の作業状況



図Ⅱ-2-28. b-14さんのタオルたたみ・袋入れ・のし紙つけ作業の作業状況



⑮ b-15

29歳の男性、知的障害B2、自閉症である。小学校特殊学級、中学校特殊学級、K養護学校 高等部卒業後、リネン関係の会社に就職する。約10年間働き、タオルの仕分け作業や袖だし作業に従事していたが、人員整理の中で解雇となる。継続して母親が主体となり求職活動を継続して行うが、1年以上在宅状態となり生活リズムの改善を促すため、職業準備訓練を受講することとなった。

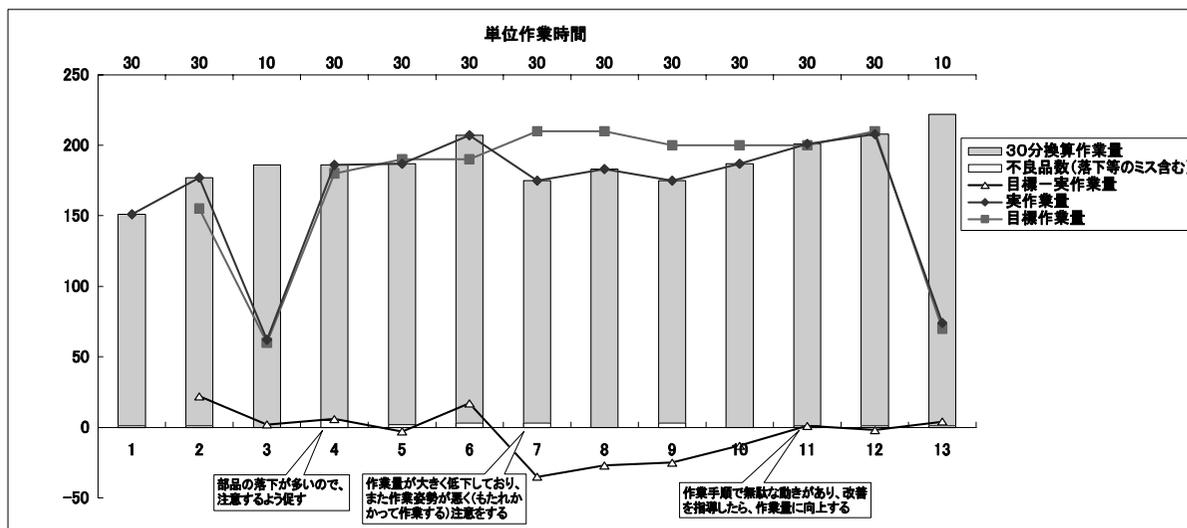
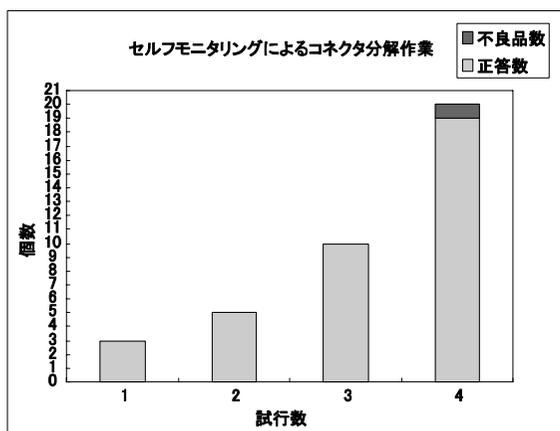
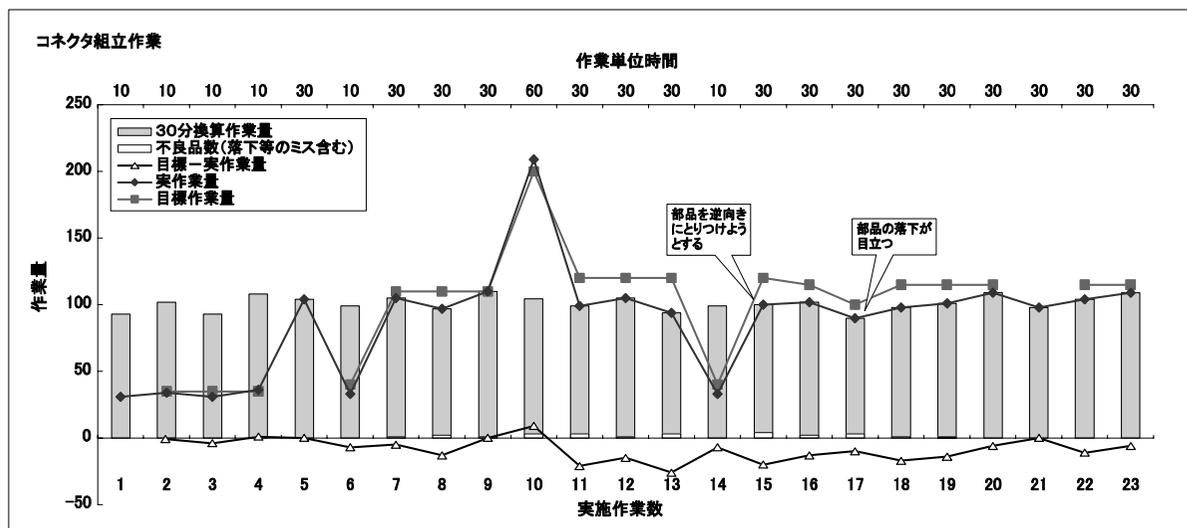
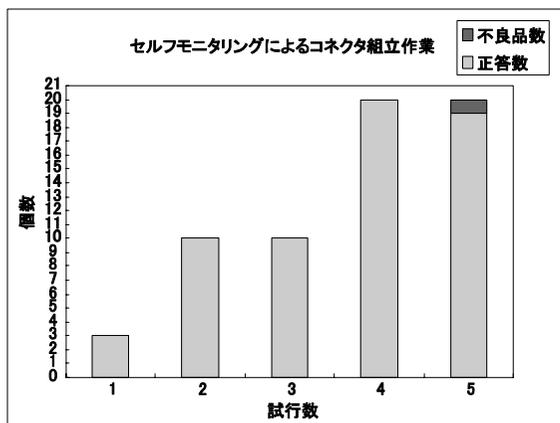
職業準備訓練受講にあたり、①JC支援を行う際の効果的な支援方法を検討すること、②整容面への指導を行うこと、③ムラなく作業に取り組むことができるようにすることを指導目標とした。

職業準備訓練開始後、コネクタ作業、タオル作業ともにタイムトライアル作業において目標を設定して作業に取り組むことは効果的であり、集中して安定した作業への取り組みが可能となった。しかし、自分で工夫して行うことや、目標時間を自発的に設定することは難しく、指導員の助言が必要な場面も多く見られた。目標をもって、集中して作業に取り組むことができるようになった効果は、別作業になっても持続し、作業への指示や目標設定には班長の一定の援助を要したが、よそ見せず安定した取り組みが可能となった。

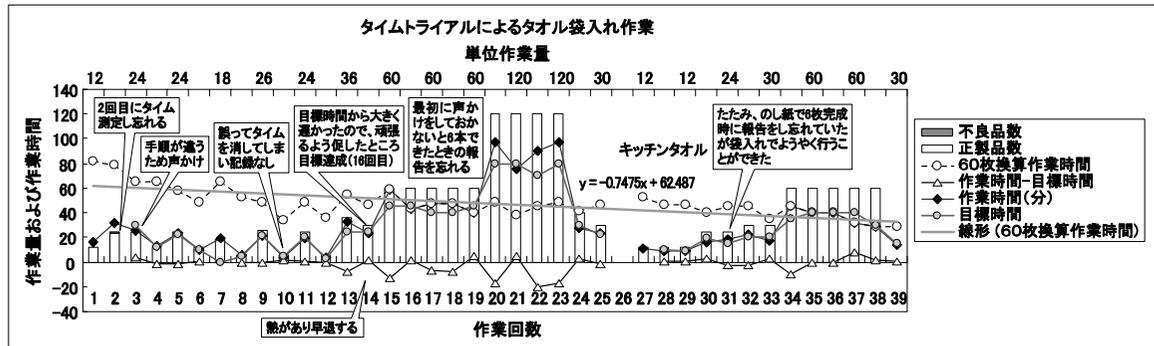
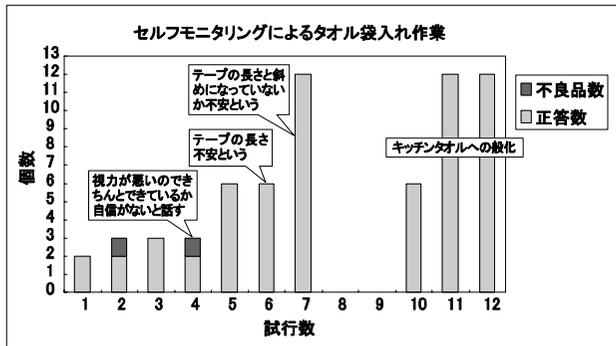
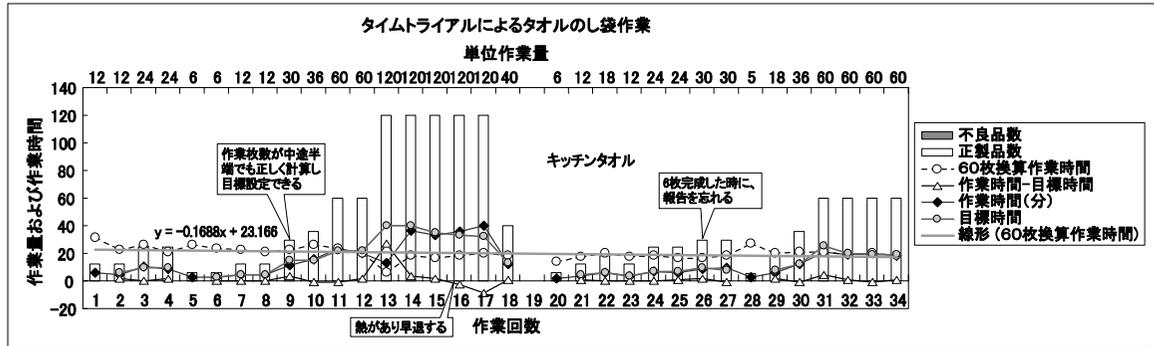
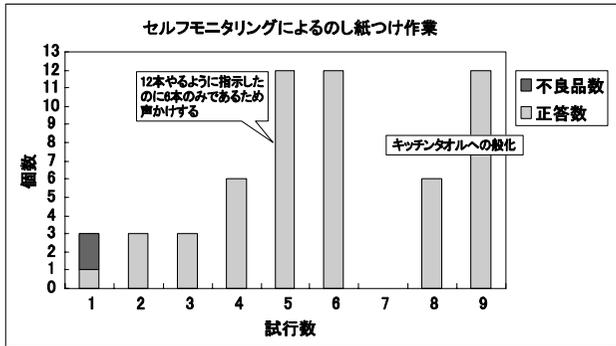
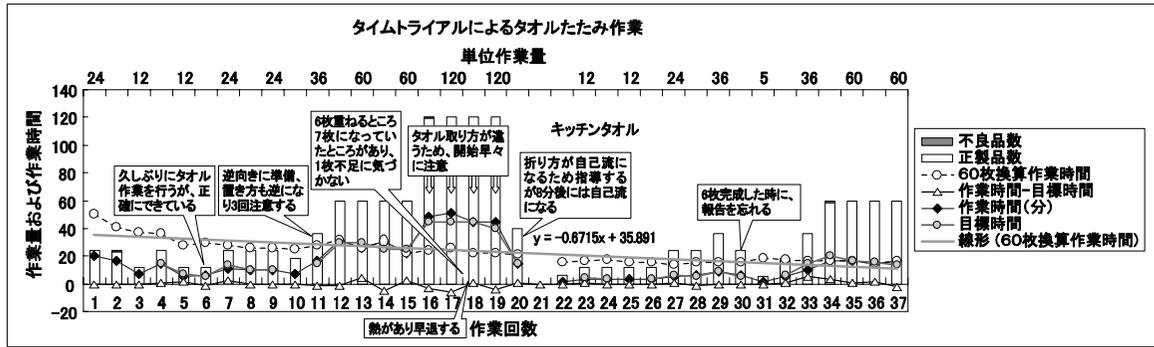
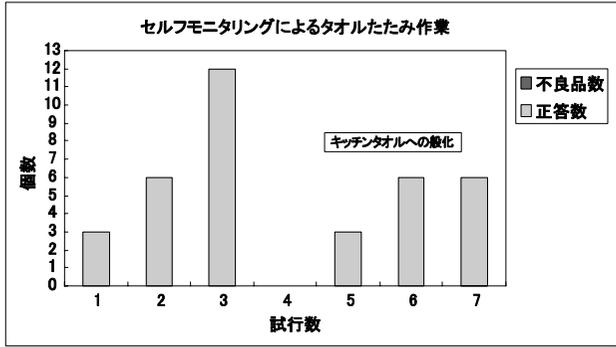
対人関係面では、休憩時間に黒板に落書きをしたり、テレビのスイッチを突然消してしまういたずらが見られ、周囲の訓練生も当初は彼の障害特性について理解できず困惑していたが、徐々に本人の障害特性について一定の理解を示し始め、対人関係を悪化させるには至らなかった。

訓練終了後、平成14年8月からJC支援による雇用前実習の受け入れ先が確保されていたが、会社都合で中止となり、現在も求職活動を継続している。

図Ⅱ-2-29. b-15さんのコネクタ組立・分解作業の作業状況



図Ⅱ-2-30. b-15さんのタオルたたみ・袋入れ・のし紙つけ作業の作業状況



### 第3節 対象者の帰趨状況とセルフマネジメント訓練の関連性

#### 1. 対象者の帰趨状況

表Ⅱ-2-6に対象者の帰趨状況をまとめた。対象者の中で雇用に至った者は6名、福祉施設等に入所した者が5名、センターで継続的に職リハサービスを受けている者が3名となっている。

表Ⅱ-2-6. 対象者の帰趨状況

No	名前	帰趨状況	詳細(帰趨状況)
1	b-1	雇用	リネン関係の工場へ就職。ペースは遅いものの休まず安定したペースで仕事している。適応に問題ない。
2	b-2	雇用	職務試行法終了後、本採用。クリーニング会社。適応に問題ない。
3	b-3	福祉→雇用	縁故により就職(アルバイト)。ゴルフ場で玉拾いをするが、指示がないとさぼったり、慣れるにつれ仕事をしなくなる。
4	b-4	福祉	作業所通所中。楽しそうに、過ごしている。幼さが作業所なくても課題となっている。
5	b-5	JC/雇用	トライアル雇用・ジョブコーチ後にMシャッターに本採用。
6	b-6	福祉	職務試行法を実施するが作業ペースが極端におそく、採用に至らない。現在は精神障害の福祉工場にて実習中である。安定した作業ペースで働いており、夏過ぎに本採用予定である。
7	b-7	JC/雇用	職務試行法、トライアル雇用・ジョブコーチ後本採用になっている。スーパーにて総菜部門を担当。
8	b-8	福祉	脳外傷友の会にて活動中。地域の小規模作業所へ6月中旬より通所。
9	b-9	福祉的就労	コミュニケーション上の問題から、実習先が確保できない。作業所・生活支援センターにて求職活動を継続している。
10	b-10	雇用	職務試行法実施後、リネン関係の会社から採用OKとなるが、本人辞退。現在は自力で就職している。
11	b-11	福祉	就職を目指し、更正施設に入所中でありそちらの方針で、自動車免許の取得を目指している。訓練終了前に、実習先の事業所も確保したが、保護者が頑として大企業でないので、だめだ、と拒否し、実習に至らなかった。
12	b-12	OA	OA講習へ移行。順調にカリキュラムをこなしている。単独での求職活動中。
13	b-13	職務試行法実施中	リネン関係の会社で職務試行法を実施するが、既婚者という理由で採用にならない。精神的な不安定さがあり、授産所への通所を指導中。
14	b-14	PVT	職業センター 職業準備訓練で再度支援を行う予定。
15	b-15	JC	求職活動中。

#### 2. セルフマネジメント訓練の結果と対象者の帰趨状況

表Ⅱ-2-7に対象者の帰趨状況と各作業におけるセルフモニタリング訓練とタイムトライアル訓練の結果を、一覧表に整理した。

タイムトライアル訓練については、5種の作業課題においてセルフモニタリング訓練が各作業課題に

において定められている基準をどの程度「達成」したのか、また「達成」に至るまでに要したブロック数を参考値として整理した。「達成」については、各作業課題の基準を全て達成した場合を A、その一段階前の段階まで達成した場合を B、B に至らなかった場合を C とした。

また、タイムトライアル訓練については、5種の作業課題のそれぞれについて「安定性」「不良」の2つの指標と「Trend」「目標達成率」を参考値として整理した。

「Trend」は各作業における作業能率の換算値に基づく近似直線が作業能率の向上を示している場合を「+」、作業能率の低下を示している場合に「-」とした。また、安定性は、各作業の後半10回において、作業能率の換算値が大きく近似直線から離れていない場合を「○」、離れていた場合を「×」とした。この判断は、独立した評価者2名が、各対象者のグラフから視覚的に判断した。さらに、「不良」については、各作業の後半10回において不良が発生しなかった場合を「○」、発生していた場合を「×」とした。

これらの結果を基に、モニタリング総合とタイムトライアル総合をそれぞれ3段階（A；訓練目標を達成、B；概ね達成、C；未達成）に分類した。モニタリング総合については、各作業におけるモニタリング訓練の「達成」が、全てAの場合を「A」、Aが3または4個の場合を「B」、Aが1または2個以下の場合を「C」とした。タイムトライアル総合については、「安定性」と「不良」における「○」が8個以上の場合を「A」、5から7個の場合を「B」、4個以下の場合を「C」とした。

表Ⅱ-2-7からこれらの結果と帰趨状況を合わせて見ると、モニタリング総合とタイムトライアル総合の両方がAの者2名のうち、職業リハビリテーションサービスを継続している者が1名（OA講習へ移行し単独で求職活動を行う）、福祉サービスへ移行した者が1名（コミュニケーション上の問題から福祉サービスへ移行し求職活動を行う）となっている。モニタリング総合とタイムトライアル総合のいずれかがAであり、もう一方がBである者3名のうち、雇用に至った者が2名、職業リハビリテーションサービスを継続している者が1名となっている。モニタリング総合とタイムトライアル総合のいずれもがBの者4名のうち職業リハビリテーションサービスを継続し雇用に至った者が2名、職業リハビリテーションサービスを継続している者が1名、福祉サービスから雇用に至った者が1名となっている。モニタリング総合がAまたはBでありタイムトライアル総合がCである者5名のうち、雇用に至った者が1名（作業ペースはゆっくりだが簡易な作業での作業遂行は安定している）、職業リハビリテーションサービスを継続している者が1名、福祉サービスへ移行した者が3名となっている。モニタリング総合とタイムトライアル総合のいずれもがCの者は1名であり、福祉サービスへ移行している。

これらの結果から、セルフモニタリング訓練からタイムトライアル訓練へ、段階的に行われるセルフマネジメント訓練の中で、より高度なレベルで訓練目標を達成した者が雇用に至るケースが多く、セルフモニタリングスキルというセルフマネジメントの基礎的行動の学習において課題が見られる者については、福祉サービスに移行しているケースが多いことが読み取れる。また、より高度なセルフマネジメントの段階が達成されたケースでも、他者とのコミュニケーション上の問題があるとスムーズに雇用に至っていないという結果となっている。

職業準備訓練の結果は、訓練の実施による効果のみでなく、終了時の雇用失業情勢や対象者の居住地、支援体制等によって影響を受けるものの、セルフマネジメント訓練の結果は、対象者のセルフマネジメント・レベルを示しており、この結果が雇用を目指す上で一つの重要な指導・支援項目であることを示唆しており、終了後の職業リハビリテーション・サービスを検討する上でも重要な結果であると考えられる。

表Ⅱ-2-7. G障害者職業センター対象者における帰趨状況とセルフマネジメント訓練の結果

No	名前	帰趨状況	モニタリング総合	タイムトライアル総合	Self-Monitoring									Time-Trial																									
					コネクタ組立			コネクタ分解			たたみ			のし紙			袋入れ			コネクタ組立				コネクタ分解				たたみ				袋入れ				のし紙			
					達成	block数	達成	block数	達成	block数	達成	block数	達成	block数	Trend	目標達成率	安定性	不良	Trend	目標達成率	安定性	不良	Trend	目標達成率	安定性	不良	Trend	目標達成率	安定性	不良	Trend	目標達成率	安定性	不良					
1	b-12	OA	A	A	A	4	A	6	A	7	A	4	A	8	+	70	○	×	+	70	○	×	+	70	○	、○	+	80	○	○	+	70	○	○					
2	b-2	雇用	B	A	A	5	B	2	A	14	A	13	A	15	+	50	○	×	+	50	○	○	+	90	○	○	+	80	○	○	+	70	○	○					
3	b-10	雇用	A	B	A	5	A	4	A	8	A	12	A	5	+	50	○	○	+	50	○	×	+	40	×	○	+	80	×	○	+	50	×	○					
4	b-15	JC	A	B	A	5	A	4	A	6	A	8	A	11	+	40	○	×	+	40	○	×	+	50	×	○	+	70	×	○	+	80	○	○					
5	b-5	JC/雇用	B	B	B	3	A	2	A	12	A	8	B	29	+	50	×	×	+	50	○	○	-	60	○	×	+	50	○	○	+	0	○	○					
6	b-7	JC/雇用	B	B	A	4	A	2	A	10	B	8	A	9	+	40	○	×	+	40	○	×	+	60	○	○	+	40	○	×	+	20	○	×					
7	b-14	PVT	B	B	A	4			B	6	A	7	B	4	+	50	○	×	+	50	○	×	+	60	×	×	+	20	×	○	+	40	○	○					
8	b-3	福祉→雇用	B	B	A	6	A	2	A	8	B	16	A	6	+	15	○	×	+	15	○	○	+	20	○	×	+	40	×	○	+	40	×	○					
9	b-1	雇用	B	C	B	4	A	9	A	14	A	8	A	15	-	15	×	×	-	15	○	×	+	70	×	○	+	40	×	○	+	40	×	○					
10	b-13	職務試行法実施中	B	C	A	4	A	5	A	11	A	6	B	13	+	30	○	×	+	30	○	×	+	50	×	○	+	50	×	○	+	50	×	○					
11	b-9	福祉的就労	A	A	A	5	A	4	A	8	A	5	A	6	+	30	○	×	+	30	○	○	+	80	×	○	+	40	○	○	+	50	○	○					
12	b-8	福祉	A	C	A	4	A	5	B	12	A	9	A	9	-	20	×	×	-	20	×	×	+	10	×	○	+	60	×	○	-	30	×	○					
13	b-11	福祉	B	C	A	5	A	5	B	5	B	4	A	5	-	30	×	×	+	30	○	×	+	50	×	○	+	60	×	○	+	30	×	○					
14	b-6	福祉	B	C	A	6	A	2	B	9	B	8	A	9	-	50	×	×	-	50	×	×	+	40	○	○	+	50	×	○	+	30	×	○					
15	b-4	福祉	C	C	A	4	A	2	B	62	B	16	B	18	-	40	×	×	+	40	×	×	-	70	×	○	+	70	×	○	+	50	×	○					

☆モニタリング総合の指標: A="All" A", B="B"+"A×1or2", C="B"+"A×3or4"

☆タイムトライアル総合の指標: 安定性+不良の○、A>=8、7>B>=5、C>4

## 第4節 セルフマネージメント訓練の効果に関する考察

第Ⅱ部第1章及び第2章では、職業準備訓練の中にセルフマネージメント・トレーニング・マトリックスに基づく、段階的なセルフマネージメント訓練の実施例を、実施前、実施後、さらにその結果等について、実践事例を示した。これらの実践事例と、その実践から得られた障害者職業カウンセラーや職業準備訓練指導員らからのコメントから、セルフマネージメント訓練の効果について次のように考察した。

### 1. セルフマネージメント訓練の実施前の効果

職業準備訓練にセルフマネージメント訓練を実施するに際し、①支援者研修と②作業課題の特定と分析および再構成を行った。この結果、次の2点について訓練環境が整備された。

#### (1) 職業準備訓練における指導ポイントの整理

担当障害者職業カウンセラーと職業準備訓練指導員に対し、支援者研修を行った結果、職業準備訓練を運営する指導者・支援者内の視点が整理され、セルフマネージメント・トレーニング・マトリックスに基づく、段階的な職業リハビリテーションサービスのあり方について共通認識を持つことができたと考えられる。

また、この共通認識に基づき、個々の作業における指導のポイントや対象者毎の課題、それらに対する指導・支援方法等についても整理でき、職業準備訓練における訓練計画策定の効率化を図ることも可能であろう。

このように実施前の支援者研修は、単に職業準備訓練の指導における人的環境を整えるだけでなく、業務の効率化にも繋がったと考えられる。

#### (2) 作業課題の構造化

もう一つの実施前準備である、作業課題の特定と分析および再構成を行うことによって、個々の作業の手順が整理されるだけでなく、その作業に求められる能力（例：正誤の判断力等）とその能力を発揮すべき工程が明確化された。その結果に基づき、工程を分割しセルフモニタリング訓練の手続きを実施することが可能となった。

このように個々の作業について作業学習のための課題分析を行うことにより、単独での作業遂行に繋がる手続きが明らかになるとともに、訓練段階を個々の状況に応じて対応できるよう設定することが可能となった。

このような作業課題の構造化は、小集団指導の中で個々の状況に応じた対応を可能とするために、必要不可欠な分析であると言えるのではないだろうか。

### 2. セルフマネージメント訓練の実施による効果

セルフマネージメント訓練の実施中はそれぞれの手続きに応じた従属変数を設定し、個々の作業結果

を数値化し把握した。また、対象者には、現在の訓練段階でどのような望ましい結果が得られると次の段階に移行するかを、伝えるよう心がけている。この結果、次の3点について効果的であった。

#### (1) 指導・支援状況の把握の明確化

セルフモニタリング訓練では、個々の対象者が自分の作業結果を自己確認することが求められ、作業の正確性が計られる。ここで得られるデータは、対象者の状況によっては、対象者の正誤判断の能力（例：認知障害の有無）や作業手順の安定性、作業に対する責任感等の変遷として捉えることもできる。また、タイムトライアル訓練では、対象者自身が作業目標を立て、それに沿った作業遂行が求められ、その結果が作業能率や正確性として示される。個々で得られるデータは、個々人の自己能力の評価や疲労等への認識、作業への意欲、作業耐性等の現れと捉えることもできる。

これら作業の客観的な指標は、職場生活の中での対象者の行動上の課題と合わせて検討することにより、対象者の作業能力や行動面での課題の改善程度の把握が可能となったと考えられる。

#### (2) 個々の課題に対する指導・支援方法の明確化

個々の対象者の作業能力や行動面での課題と改善の程度が把握できると、どのような指導・支援方法が効果的であったかについても明確に捉えることができる。つまり、ある指導によって作業面での課題が改善されたとすると、その方法は他の作業の同様の課題でも有効である可能性が高いと判断することができる。

このように対象者個々人の持つ課題に対して、有効と考えられる指導・支援方法がそれぞれ特定され、さらに有効な個別指導の方法を効率的に検討することが可能となった。

#### (3) 対象者のモチベーションの向上

対象者毎の課題や指導・支援方法が明確化されることにより、達成すべき目標も明らかとなる。また、課題毎に段階を設けることで大きな目標へ至る道程についてもはっきりと示される。これらが明確に示されること、対象者自身が努力すべき内容を理解しやすくなることでもある。その結果、個々の対象者のモチベーションは向上し、作業遂行や行動の改善に向けた努力が得られやすくなった。

### 3. セルフマネジメント訓練の結果による効果

セルフマネジメント訓練の結果は、ある作業を自立的に行うまでに必要とされる指導・支援と対象者の学習経過を示すものである。また、これらの結果は、新たな作業学習の場面で生じうる課題を内包している可能性が高く、個々の対象者に必要な職業リハビリテーションサービスをある程度具体的に示していると考えられる。

このような考え方から、セルフマネジメント訓練の結果が、次の3点について有益な情報をもたらさう。

#### (1) 個々の職場における適応的な環境条件の明確化

職業準備訓練で行ったセルフマネジメント訓練の結果から、個々人が一定の作業の中で獲得したセルフマネジメント・レベルを同定することができる。このことから、対象者の自律／自立度から見て

実施可能な職務内容の推定したり、職務の遂行に必要とされる職場内での人的・物理的環境を含めた支援体制等を推測することができる。

これらの仮説は、ジョブコーチ支援や職場内でのナチュラルサポートに向けた支援を示唆するものであり、職場適応を促す際に有効な情報であると考えられる。

#### (2) 終了時点での職業リハビリテーション計画策定への効果

地域障害者職業センターでは、(1)で同定・推定した結果や対象者に生じがちな課題、また対象者にとって必要かつ有効な指導・支援方法、職業リハビリテーションサービスを継続する関係機関や関係者等の情報から職業リハビリテーション計画を策定することとなる。これまで考察してきたように、セルフマネジメント訓練の実施やその結果から得られた情報は、対象者が達成しうるセルフマネジメント・レベルを示唆している。この結果は、次の段階での職業リハビリテーションサービスの中で、予測される支援を内包しているため、対象者の状況に応じた的確な職リハ計画の立案が可能となると考えられる。

#### (3) 職業リハビリテーションサービスの移行における有益な情報の伝達

(2)で策定された職業リハビリテーション計画は、効果的と思われる職業リハビリテーションサービスの情報等を含んでいる。この情報を継続的に職業リハビリテーションサービスを実施する、支援者や事業所、関係機関に提供することは、ナチュラルサポートに向けた指導・支援の方針の理解に効果を発揮する。